宇都宮市埋蔵文化財調査報告書　第34集

天　狗　原　遺　跡

平成6年3月

宇都宮市教育委員会

序

天狗原遺跡は，宇都宮市内に所在する数少ない弥生時代の遺跡のひとつとして，戦前から知られておりました。しかしこの地にも近年開発の波が押し寄せ，遺跡の大半が旧状をとどめぬまでになってしまいました。

このたび，同遺跡の範囲内に，宇都宮市土地開発公社による宅地造成が計画されることとなり，その工事によって遺跡が影響を受けることが予想されました。そこで宇都宮市教育委員会と同公社では，文化財保護の立場から誠意をもって協議を重ねた結果，遺跡を記録として保存するための発掘調査を実施することとなりました。

調査は同公社の費用負担のもとで当教育委員会が実施し，竪穴住居跡・土坑・円形周溝遺構と多数の土器類の出土を見るにいたりました。その成果をまとめたものが本報告書であります。読者各位におかれましては，本書を存分に御活用いただき，文化財の保護に務めていただければ幸いです。

末文になりましたが，発掘調査にあたり御指導いただいた宇都宮市文化財保護審議委員会の塙静夫・大金宣亮・橋本澄朗各委員，また何かと便宜をお図りいただいた宇都宮市土地開発公社に対しまして，深く感謝の意を表する次第であります。

平成6年3月

宇都宮市教育委員会

教育長　藤　田　昌　平

例　言

1. 本書は，栃木県宇都宮市さつき１丁目1,008-1に所在した天狗原遺跡（宇都宮市遺跡番号225番）の緊急発掘調査報告書である。なお，宇都宮市遺跡台帳（宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第10集『宇都宮の遺跡』昭和58年）には「天狗原雀宮中前遺跡」として登録されているが，従来知られている天狗原遺跡の一部であることに鑑み，調査・報告においては名称を統一した。
2. 調査は，財団法人宇都宮市土地開発公社が費用を負担し，宇都宮市教育委員会がこれを実施した。
3. 調査期間は平成４年４月１日から同年７月31日までであり，調査面積は4,500㎡である。
4. 遺跡地における測量・写真撮影等は，賀来孝代・横堀聡の協力のもとに神野安伸がこれを行った。
5. 報告書の作成については梁木誠・大塚雅之・今平利幸の助言のもとに，賀来孝代・横堀聡の協力を得て，神野がこれにあたった。
6. 弥生土器については，栃木県立博物館人文課上野修一主任研究員，栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター塚本師也技師の御指導を得た。深く感謝する次第である。
7. 出土遺物・実測図・写真は宇都宮市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査の関係者は次のとおりである。

宇都宮市教育委員会

〔指導助言〕　宇都宮市文化財保護審議委員会委員　塙静夫
同　大金宣亮
同　橋本澄朗

〔事務局〕　教育長　藤田昌平　教育次長　近能忠良
文化課長（前）　安達光政　文化課長（現）　横堀杉生
文化財保護係長　定岡明義
文化財保護係　手塚英男　文化財保護係　梁木誠
同　小松俊雄　同　大塚雅之
同　今平利幸　同　神野安伸

〔調査・報告書作成協力者〕　大沢順子　賀来孝代　清水豊　横堀聡

〔発掘調査補助員〕　阿久津道子　石崎富美子　稲葉貞子　入江文子　檀松満里子　加藤敬子　篠原信子　高田延子　沼田淑子　森田幸江　渡辺綾子

〔遺物整理補助員〕　大野節子　大森八重子　鈴木道子　鈴木芳子　樋口静子　福田貴久栄

9. 発掘調査及び報告書作成に際し，次の諸氏・諸機関の御協力を得た。記して謝意を表する。（個人名五十音順・敬称略）

秋元陽光　阿部知己　石部正志　上野修一　鏑木理広　木下実　小森哲也　小森紀男　齋藤恒夫
篠原祐一　塚本師也　藤田典夫　吉岡秀範　吉田哲　渡辺邦夫
栃木県教育委員会事務局文化課　財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター　宇都宮市立雀宮中学校

凡　例

1. 文中および写真図版中の略号は，ＳＩは住居跡を意味する。
2. 挿図・表・写真図版における遺物の番号は一致する。
3. 挿図の縮尺は，特記以外，遺構は60分の一，カマドは30分の一，遺物は３分の一である。
4. 出土土器観察表における「注記」は当該土器に直接記入された整理番号を指し，挿図・表・写真図版における番号とは必ずしも一致しない。
5. 遺構実測図の土層説明においては，次の略号を使用した。
   ロームブロック…ロームＢ　　今市パミス…ＩＰ　　七本桜パミス…ＳＰ
6. 遺構実測図中の方位は真北である。

目　次

序
例　言
凡　例
Ⅰ　調査にいたるまでの経過 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 1
　1.　遺跡の位置 …… 1
　2.　周辺の地形 …… 3
　3.　周辺の遺跡 …… 3
Ⅲ　調査の方法と経過 …… 3
　1.　調査の方法 …… 3
　2.　調査の経過　－調査日誌抄－ …… 4
Ⅳ　確認された遺構と遺物 …… 7
　1.　竪穴住居跡 …… 7
　2.　円形周溝遺構 …… 48
　3.　土坑 …… 48
　4.　表土中出土の遺物 …… 53
Ⅴ　結語 …… 55

挿図目次

第1図　天狗原遺跡位置図 …… 2
第2図　調査区周辺図 …… 2
第3図　遺構配置図 …… 2
第4図　周辺遺跡分布図 …… 5
第5図　1号住居跡 …… 7
第6図　1号住居跡カマド …… 7
第7図　1号住居跡出土遺物 …… 8
第8図　2号住居跡 …… 8
第9図　2号住居跡カマド …… 9
第10図　2号住居跡出土遺物 …… 9
第11図　3号住居跡 …… 10
第12図　3号住居跡カマド …… 11
第13図　3号住居跡出土遺物 …… 11
第14図　4号住居跡 …… 12
第15図　4号住居跡出土遺物(1) …… 13
第16図　4号住居跡出土遺物(2) …… 14
第17図　4号住居跡出土遺物(3) …… 15
第18図　5号住居跡・14号住居跡 …… 17
第19図　14号住居跡エレベーション図 …… 18
第20図　5号住居跡出土遺物 …… 18

第21図　14号住居跡出土遺物……18
第22図　6号住居跡……19
第23図　7号住居跡……20
第24図　7号住居跡カマド……21
第25図　7号住居跡出土遺物(1)……23
第26図　7号住居跡出土遺物(2)……24
第27図　7号住居跡出土遺物(3)……25
第28図　7号住居跡出土遺物(4)……26
第29図　7号住居跡出土遺物(5)……27
第30図　8号住居跡……28
第31図　8号住居跡カマド……29
第32図　8号住居跡出土玉類……29
第33図　8号住居跡出土遺物……29
第34図　9号住居跡……30
第35図　9号住居跡出土遺物……32
第36図　10号住居跡……33
第37図　10号住居跡遺物出土状態図……34
第38図　10号住居跡埋土下層出土遺物……35
第39図　10号住居跡埋土上層出土遺物(1)…37
第40図　10号住居跡埋土上層出土遺物(2)…38
第41図　11号住居跡……40
第42図　11号住居跡カマド……41
第43図　11号住居跡出土遺物……42
第44図　12号住居跡……43
第45図　12号住居跡出土遺物……44
第46図　13号住居跡……45
第47図　13号住居跡カマド……46
第48図　13号住居跡出土遺物(1)……46
第49図　13号住居跡出土遺物(2)……47
第50図　円形周溝遺跡……49
第51図　土杭……50
第52図　表土中出土遺物(1)……51
第53図　表土中出土遺物(2)……52
第54図　表土中出土遺物(3)……54

表目次

第1表　周辺遺跡一覧表……6
第2表　1号住居跡土器観察表……8
第3表　2号住居跡土器観察表……9
第4表　3号住居跡土器観察表……11
第5表　4号住居跡土器観察表(1)……15
第6表　4号住居跡土器観察表(2)……16
第7表　5号住居跡土器観察表……18
第8表　14号住居跡土器観察表……18
第9表　7号住居跡土器観察表(1)……22
第10表　7号住居跡土器観察表(2)……23
第11表　8号住居跡土器観察表……29
第12表　9号住居跡土器観察表……31
第13表　10号住居跡下層土器観察表……36
第14表　10号住居跡上層土器観察表(1)……38
第15表　10号住居跡上層土器観察表(2)……39
第16表　11号住居跡土器観察表……41
第17表　12号住居跡土器観察表……44
第18表　13号住居跡土器観察表……48
第19表　円形周溝遺構土器観察表……48
第20表　表土中土器観察表(1)……53
第21表　表土中土器観察表(2)……54
第22表　第52図土器出土位置……54
第23表　第53図土器出土位置……54
第24表　弥生土器破片文様別集計表……55

写真図版目次

ＰＬ１① 全景（北から）
② １号住全景（南東から）
③ １号住遺物出土状態（南東から）
④ １号住カマド（南から）
⑤ ２号住全景（南から）
ＰＬ２① ２号住カマド（南から）
② ３号住全景（南東から）
③ ３号住カマド（南東から）
④ ４号住全景（南東から）
⑤ ４号住遺物出土状態（北から）
⑥ ４号住遺物出土状態　No.１
⑦ ４号住遺物出土状態　No.５
⑧ ４号住遺物出土状態　No.24
ＰＬ３① ４号住遺物出土状態　No.25
② ４号住炉（南から）
③ ５号住・14号住全景（南東から）
④ 14号住全景（南から）
⑤ ５号住・14号遺物出土状態（北から）
⑥ ６号住全景（南から）
⑦ ７号住全景（南から）
⑧ ７号住遺物出土状態（東から）
ＰＬ４① ７号住内貯蔵穴（南東から）
② ７号住カマド（南から）
③ ８号住全景（南から）
④ ８号住遺物出土状態（南から）
⑤ ８号住カマド（南から）
⑥ ９号住全景（南から）
⑦ ９号住遺物出土状態（南西から）
⑧ ９号住内貯蔵穴（南から）
ＰＬ５① 10号住全景（南から）
② 10号住遺物出土状態（南から）
③ 10号住遺物出土状態　下層No.55
④ 10号住遺物出土状態　下層No.57
⑤ 10号住炉
⑥ 11号住全景（南から）
⑦ 11号住カマド（南から）
⑧ 12号住全景（西から）
ＰＬ６① 12号住遺物出土状態（南から）
② 12号・13号住全景（西から）
③ 13号住全景（南東から）
④ 13号住遺物出土状態（南から）
⑤ 13号住遺物出土状態
⑥ 13号住カマド（南から）
⑦ 円形周溝遺構
⑧ １号土杭（北から）
ＰＬ７① ２号土杭（南から）
② ３号土杭（南東から）
③ ４号土杭（南西から）
④ ５号土杭（南から）
⑤ ６号土杭（北東から）
⑥ ７号土杭（南から）
⑦ 作業風景
⑧ 現地説明会
ＰＬ８① ２号住居跡No.１
② ２号住居跡No.３
③ ２号住居跡No.４
④ ４号住居跡No.１
⑤ ４号住居跡No.５
⑥ ４号住居跡No.７
⑦ ４号住居跡No.８
⑧ ４号住居跡No.９
⑨ ４号住居跡No.12
⑩ ４号住居跡No.13
⑪ ４号住居跡No.14
⑫ ４号住居跡No.15
⑬ ４号住居跡No.18

⑭ 4号住居跡No.19
⑮ 4号住居跡No.20
PL 9① 4号住居跡No.24
② 4号住居跡No.25
③ 5号住居跡No.1
④ 5号住居跡No.2
⑤ 7号住居跡No.1
⑥ 7号住居跡No.2
⑦ 7号住居跡No.3
⑧ 7号住居跡No.4
⑨ 7号住居跡No.5
⑩ 7号住居跡No.6
⑪ 7号住居跡No.7
⑫ 7号住居跡No.8
⑬ 7号住居跡No.9
⑭ 7号住居跡No.10
⑮ 7号住居跡No.11
⑯ 7号住居跡No.12
PL10① 7号住居跡No.13
② 7号住居跡No.15
③ 7号住居跡No.16
④ 7号住居跡No.17
⑤ 7号住居跡No.20
⑥ 7号住居跡No.21
⑦ 7号住居跡No.22
⑧ 7号住居跡No.23
⑨ 7号住居跡No.24
⑩ 7号住居跡No.25
⑪ 7号住居跡No.26
⑫ 7号住居跡No.27
PL11① 7号住居跡No.28
② 7号住居跡No.29
③ 7号住居跡No.30
④ 8号住居跡No.3
⑤ 8号住居跡No.4
⑥ 9号住居跡No.4
⑦ 9号住居跡No.5
⑧ 10号住居跡埋土下層No.55
⑨ 10号住居跡埋土上層No.46
⑩ 10号住居跡埋土上層No.47
⑪ 10号住居跡埋土上層No.49
⑫ 10号住居跡埋土上層No.51
⑬ 10号住居跡埋土上層No.52
⑭ 10号住居跡埋土上層No.53
PL12① 10号住居跡埋土下層
② 10号住居跡埋土上層
PL13① 11号住居跡No.1
② 11号住居跡No.2
③ 11号住居跡No.3
④ 11号住居跡No.4
⑤ 11号住居跡No.6
⑥ 11号住居跡No.7
⑦ 11号住居跡No.8
⑧ 12号住居跡No.1
⑨ 12号住居跡No.2
⑩ 13号住居跡No.1
⑪ 13号住居跡No.2
⑫ 13号住居跡No.3
⑬ 13号住居跡No.4
⑭ 13号住居跡No.8
⑮ 13号住居跡No.9
⑯ 13号住居跡No.10
⑰ 表土中(2)No.1
⑱ 表土中(3)No.1
⑲ 表土中(3)No.2
PL14① 表土中(2)
② 表土中(1)
③ 4号住居跡出土鉄器
④ 10号住居跡出土石器
⑤ 土製品
⑥ 玉類

I　調査にいたるまでの経過

本遺跡は，「下野中原遺跡調査概報」に紹介されるなど戦前から知られており[1]，野沢岩蔵の収集した弥生土器片は，該期出土遺物の僅少な宇都宮市において重要な資料と言える[2]。野沢によって紹介された「天狗原遺跡」は，今次調査地区の北方約300～400㍍にあたると思われるが，遺跡としては一連のものであろう。

しかしながら，戦後急速に開発が進み，宅地等によって蚕食されるにいたった。近年は，舌状台地南端の部分のみが平地林として残されており，宇都宮市遺跡台帳には「天狗原雀宮中前遺跡」として登録されていた[3]。

平成３年10月に，本遺跡地内のさつき２丁目1,010番地１に個人経営による病院の建設計画がもちあがったため，同年12月に宇都宮市教育委員会で確認調査を実施したが，遺構は同計画地内には存在しないことが判明した[4]。（第１次調査）

続いて翌平成４年１月に，本遺跡の大部分を占めるさつき２丁目1,008番地１に財団法人宇都宮市土地開発公社による宅地造成計画が生じたため，同年３月12日と同13日に確認調査を実施した。その結果，造成予定地内には竪穴住居跡・土坑・円形周溝遺構が存在することが判明したため，同公社と当教育委員会では数度にわたって協議を重ねたが，当地を現状で保存することは不可能であるとの結論に達し，平成４年度当初から記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

註(1)寺内武夫他，　1939，　「下野中原遺跡調査概報」（『考古学』10―10）
註(2)塙静夫他，　1979，　『宇都宮市史』第１巻　宇都宮市
註(3)塙静夫他，　1983，　『宇都宮の遺跡』　（宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第10集　宇都宮市教育委員会）
註(4)宇都宮市教育委員会，　1992，　『宇都宮市文化財年報』第８号

II　位置と環境

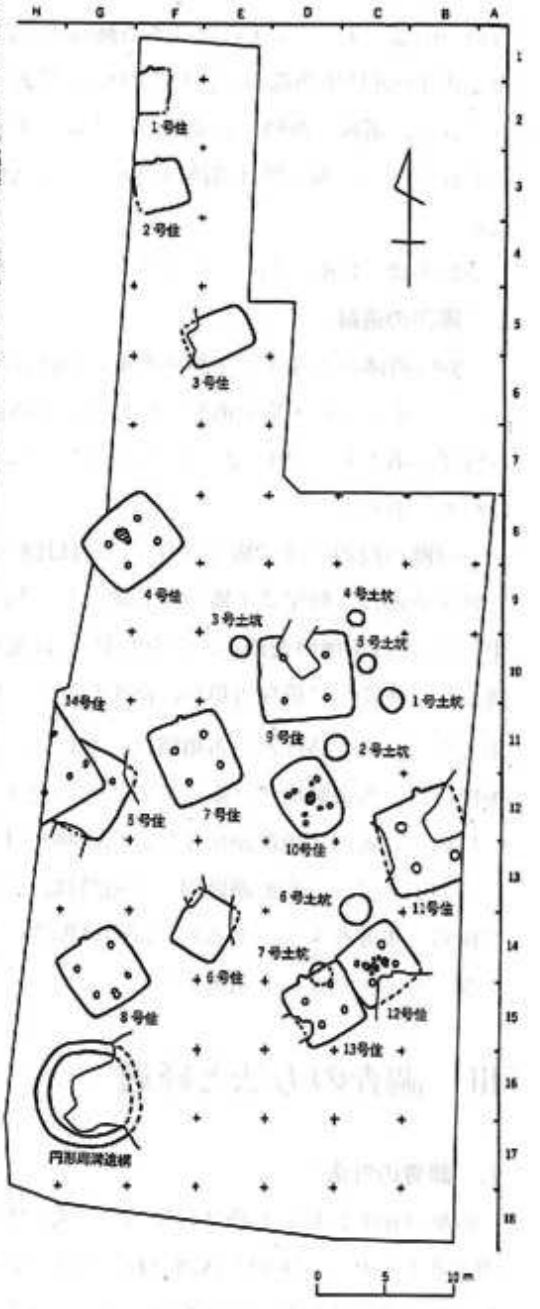
1．遺跡の位置

本遺跡が所在するのは，栃木県宇都宮市さつき２丁目1,008番地１である。宇都宮市中心街より南南西に約７キロの地点であり，さらに南1.3キロで下都賀郡石橋町との境界に，また西２キロで下都賀郡壬生町との境界に達する。遺跡の東0.7 キロのところには国道４号線が，同じく1.3キロのところにはJR東北本線が南北に通じている。

遺跡周辺は，昭和30年代までは雑木林と畑地が混在する中に住宅が散在する状況であったが，その後急速に市街地化が進行し，近年では今次調査地区近辺のみが雑木林として残存していた。

第1図　天狗原遺跡位置図　　1：100,000

第2図　調査区周辺図　　1：5,000



第3図　遺構配置図

2. 周辺の地形

本遺跡が立地するのは，南北に連なる宝木台地が小河川によって解析されてできた小さな舌状台地の南端である。宝木台地は本遺跡周辺では東西に約2.7キロの幅があり，本遺跡はそのほぼ中央（田川の沖積地西端から約1.3キロ）に位置する。台地上は中小の河川によって葉脈状に解析されており，遺跡の西側には姿川の一支流である兵庫川が，東側には同じく姿川の支流である新川が流れている。両河川は遺跡の南１キロで合流し，さらに姿川，思川へ合流したのち利根川にいたる。

遺跡の標高は82～85メートルである。

3. 周辺の遺跡

天狗原遺跡の所在する宇都宮市雀宮地区は従来から数多くの遺跡が所在する地域として知られている。そのうち天狗原遺跡を中心とする所在状況については，第４図に示すとおりであり，その概要を第１表に記す。表示した52か所の内，発掘調査を経て遺跡の内容が明らかであるものは，13か所である。

当遺跡の周辺には宇都宮市内としては比較的多くの弥生時代の遺跡が分布しており，なかでも二軒屋遺跡は二軒屋式土器の標式地として知られている。また古墳時代前期の遺跡として，東南東1.3㌔には牛塚東遺跡が，南東2.3㌔には愛宕塚古墳，大日塚古墳が存在し，古墳時代中期の遺跡として東３㌔に笹塚古墳が，南東1.7㌔には権現山北遺跡が，北北東2.3㌔には塚山古墳が存在するなど，弥生時代から古墳時代にかけての良好な遺跡が濃密に分布する地域である。古墳時代後期には，当遺跡周辺に限ってみても，東１㌔に牛塚古墳が，西500㍍に二子塚古墳が，北西1.4㌔に針ヶ谷新田古墳群が所在し，当遺跡をはじめとして数多くの集落跡が知られている。

このように，天狗原遺跡周辺の遺跡は，弥生時代から古墳時代の当地域の歴史を理解するうえで極めて重要なものであるが，同時に開発の進行が非常に早い地域でもあり，すでに内容がわからなくなってしまった遺跡も多い。

Ⅲ　調査の方法と経過

1. 調査の方法

現地は南北に長い短冊状の地割りであるが，その北東隅にはすでに民家が建っていた。また西側は並木をもって隣地と区画されていたが，境界に不明確な部分があるため，調査区の設定にあたり，大きく後退せざるを得なかった。また，南側には水路がある関係上，斜面中位以下に土砂を降ろすことを避けた。以上のような状況のため開発対象面積4,500㎡に対し，調査面積は3,700㎡となった。

確認調査は重機により，幅1.5メートルのトレンチを10メートル間隔で掘削して表土を除去し人力によって遺構を探査した。その結果，竪穴住居跡14軒，円形周溝遺構１基，土坑若干が存在することが確認された。

本調査にあたっては，調査区が南北に長いため，南北軸を基準とする５ｍ方眼の設定をおこなった。南北軸の方向はＮ－５°—Ｅである。

標高点は，国道４号線上の水準点（86.30㍍）から移動して設定した。

調査は造成部分の全面調査を原則として，重機による表土除去を先ず実施し，その後人力により遺構確認作業，遺構の排土を実施した。

遺構の測量は，調査補助員の協力を得て，オフセット測量で実施した。

調査後の埋め戻しは，重機によって行った。

2．調査の経過（調査日誌抄）

今回の調査地区は雑木林となっていたが，調査に先立って伐採が終了していた。４月13日～14日にかけて重機による表土の排除を実施し，それと並行して調査事務所の設営を行い，４月17日から調査作業にとりかかった。以下，調査経過の概要については，発掘調査日誌抄に記すとおりである。

４月17日～４月24日　調査地区内の遺構確認作業を行う。それと同時に基準杭の設定，標高原点の移動・設定，遺構配置図の作成を実施し，そののち遺構確認状況の写真撮影を行った。

４月27日～７月１日　４月27日より遺構の排土を開始する。３号住居跡・10号住居跡より開始。以後順次，１号住居跡・２号住居跡・４号住居跡・１２号住居跡・９号住居跡・７号住居跡・11号住居跡・13号住居跡・６号住居跡・８号住居跡・５号住居跡・14号住居跡の順で排土を開始し，７月１日まで実施する。

４月28日～６月23日　住居跡の遺物出土状態の写真撮影及び実測を行う。

５月13日～７月３日　住居跡内の柱穴・貯蔵穴の排土を実施する。

５月25日～７月17日　３号住居跡から順次カマドの調査を実施する。

６月22日～７月１日　円形周溝遺構の調査を実施する。

６月25日～７月24日　住居跡の平面測量を実施する。

７月２日　宇都宮市文化財保護審議委員会第２部会による発掘調査現地指導が実施される。

７月14日　調査地区全体を清掃し，全景写真を撮影する。測量以外の作業を終了する。

７月28日　調査事務所内の機材・施設を撤収し，調査終了とする。

第4図　周辺遺跡分布図　　1：25,000

No.	地図	遺跡名	類別	時期	備考(文献等)	No.	地図	遺跡名	類別	時期	備考(文献等)
1	225	天狗塚遺跡	集落	弥生・古墳	本遺跡	27	217	熊野神社南遺跡	集落	奈良	
2	395	幕田城遺跡	集落	奈良・平安		28	213	宮宮駅東遺跡	集落	奈良	
3	190	合ノ畑遺跡	集落	縄文・奈良・平安		29	408	榎戸遺跡	集落	奈良・平安	
4	394	塚山北遺跡	集落	奈良・平安		30	220	二子塚古墳	古墳	古墳	註(6)調査報告
5	397	東見附遺跡	集落	縄文		31	219	見明遺跡	集落	縄文・弥生・奈良	
6	191	大野神遺跡	集落	古墳～平安		32	214	牛塚東遺跡	周溝墓等	古墳・奈良	註(7)調査報告
7	196	塚山古墳群	古墳	古墳	註(1)概報	33	227	赤岩遺跡	集落	縄文・古墳	
8	202	北若松原遺跡	集落	古墳	註(2)概報	34	225	鳥の巣遺跡	集落	縄文・古墳・奈良	
9	197	旭ケ丘団地北遺跡	集落	縄文		35	221	牛塚古墳	古墳	古墳	註(8)調査報告
10	203	若松原遺跡	集落	縄文～古墳		36	228	並木遺跡	集落	縄文・古墳・奈良	
11	205	二軒屋遺跡	集落	弥生・古墳	註(3)	37	229	三ツ矢遺跡	集落	縄文・奈良	
12	204	一宮寺跡遺跡	集落	古墳		38	407	成願寺北遺跡	集落	奈良・平安	
13	198	旭ケ丘団地遺跡	集落	縄文		39	231	赤土山遺跡	集落	縄文・奈良	
14	399	幕田星宮神社古墳	古墳	古墳		40	232	富士見団地北遺跡	集落	縄文・奈良	
15	206	西原北遺跡	集落	縄文～古墳		41	230	石川坪遺跡	集落	縄文・奈良	註(9)
16	401	堂前東遺跡	集落	奈良・平安		42	233	宇都宮機器南遺跡	集落	古墳	
17	402	若松原遺跡	集落	古墳		43	234	多功神塚古墳群	古墳	古墳	
18	359	幕田古墳群	古墳	古墳		44	244	富士見向山遺跡	集落	古墳・奈良	
19	208	針ケ谷新田古塚群	古墳	古墳	註(4)調査報告	45	410	鳴神遺跡	集落	縄文・奈良・平安	
20	215	上坪遺跡	集落	弥生・奈良		46	341	権現山北遺跡	集落	古墳	註(10)調査報告
21	216	上坪新田遺跡	集落	縄文・弥生・奈良		47	243	茂原北原遺跡	集落	奈良	
22	207	宮西遺跡	集落	古墳		48	242	権現山古墳群	古墳	古墳	註(11)調査報告
23	209	姥女塚古墳	古墳	古墳	註(5)	49	245	西ノ前遺跡	集落	奈良	
24	212	宮宮東部遺跡	集落	奈良		50	429	下原遺跡	集落	奈良・平安	註(12)概報
25	404	宮宮4丁目遺跡	集落	古墳		51	430	宮の内遺跡	集落	奈良・平安	註(13)概報
26	218	立伯遺遺跡	集落	古墳・奈良		52	436	宮の内1丁目遺跡	集落	奈良～中世	註(14)概報

第1表　周辺遺跡一覧表

註(1)　石部正志，1990，「塚山古墳（第1次調査概要）」　（『宇都宮市文化財年報』第6号　宇都宮市教育委員会）
石部正志他，1991，「塚山古墳（第2次・第3次調査概要）」　（『宇都宮市文化財年報』第7号　宇都宮市教育委員会）
大塚雅之，1992，「塚山古墳群」　（『宇都宮市文化財年報』第8号　宇都宮市教育委員会）
石部正志他，1992，「塚山古墳」　（『宇都宮市文化財年報』第8号　宇都宮市教育委員会）
定岡明義他，1993，「塚山古墳群――第2次調査――」　（『宇都宮市文化財年報』第9号　宇都宮市教育委員会）

註(2)　梁木誠，1992，「北若松原遺跡」　（『宇都宮市文化財年報』第8号　宇都宮市教育委員会）

註(3)　寺内武夫他，1939，「下野中原遺跡調査概報」（『考古学』第10巻第10号）

註(4)　梁木誠他，1983，『針ケ谷新田古墳群』　（『宇都宮市埋蔵文化財調査報告書』第11集　宇都宮市教育委員会）

註(5)　山ノ井清人，1979，「古墳時代」　（『宇都宮市史』第1巻　原始古代編　宇都宮市）

註(6)　大塚雅之，1990，『針ケ谷二子塚古墳』　（『宇都宮市文化財年報』第6号　宇都宮市教育委員会）

註(7)　今平利幸，1993，『牛塚東遺跡』　（『宇都宮市埋蔵文化財調査報告書』第33集　宇都宮市教育委員会）

註(8)　大和久震平，1984，『牛塚古墳』　（『宇都宮市埋蔵文化財調査報告書』第1集　宇都宮市教育委員会）

註(9)　野沢岩蔵，1939，「有史以前の針ケ谷」　（『下野史談』昭和13年～14年）

註(10)　久保哲三他，1979，『権現山北遺跡』　（『宇都宮市埋蔵文化財調査報告書』第5集　宇都宮市教育委員会）

註(11)　久保哲三他，1990，『茂原古墳群』　（『宇都宮市埋蔵文化財調査報告書』第28集　宇都宮市教育委員会）

註(12)　大塚雅之，1993，「下原遺跡」　（『宇都宮市文化財年報』第9号　宇都宮市教育委員会）

註(13)　中山晋他，1992，「宮の内A・B遺跡」　（『宇都宮市文化財年報』第8号　宇都宮市教育委員会）

註(14)　大塚雅之，1993，「宮の内1丁目遺跡」　（『宇都宮市文化財年報』第9号　宇都宮市教育委員会）

Ⅳ　確認された遺構と遺物

今回の調査で確認された遺構は，竪穴住居跡14軒・円形周溝遺構１基・土坑７基であり，その分布状況は全体図に示すとおりである。以下，順番にその内容を示す。

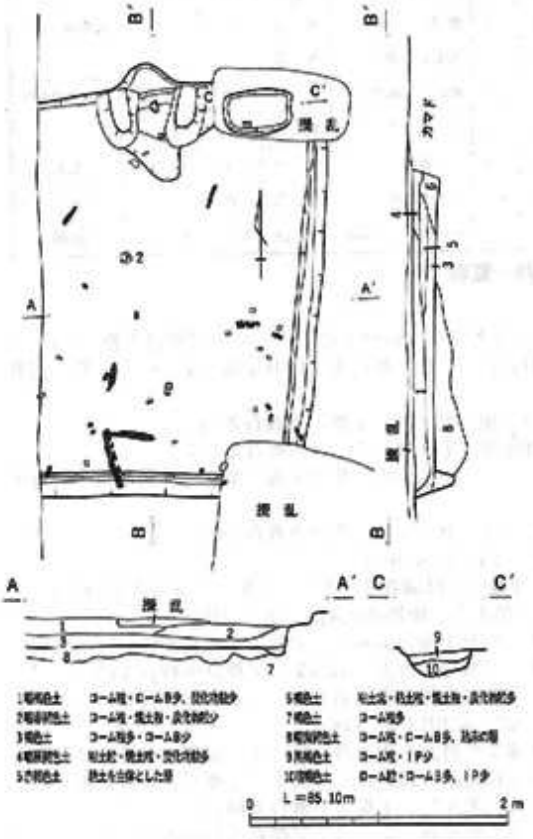
1.　竪穴住居跡

竪穴住居跡は14軒確認された。調査地区が南北に長い短冊状であるため，分布の傾向を掴むことは困難であるが，台地上の平坦面から南向きの緩傾斜面に移行する調査区の中央部付近に濃密に分布する。

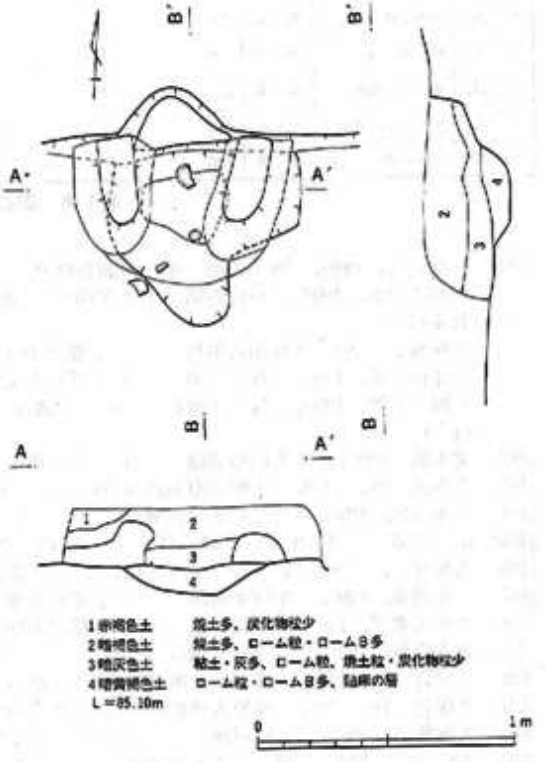
以下，順に従い遺構と遺物の内容を記述する。

１号住居跡

位置　調査区の北端，Ｆ－１・Ｆ－２グリッドに所在し，調査区外にまたがっている。　**平面形**　隅丸方形　**規模**　南北 3.45㍍　東西　不明　**床面**　中央部はローム地山を床面とし，壁際はロームブロックの混入する黒色土による貼床である。ほぼ平滑であり，中央部は硬くしまり，周縁部は軟弱である。　**壁**　立ち上がりは直線的でほぼ直立する。



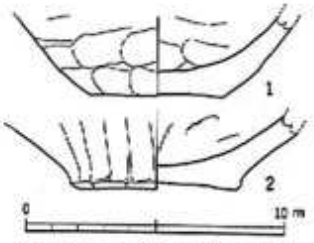
第５図　１号住居跡



第６図　１号住居跡カマド

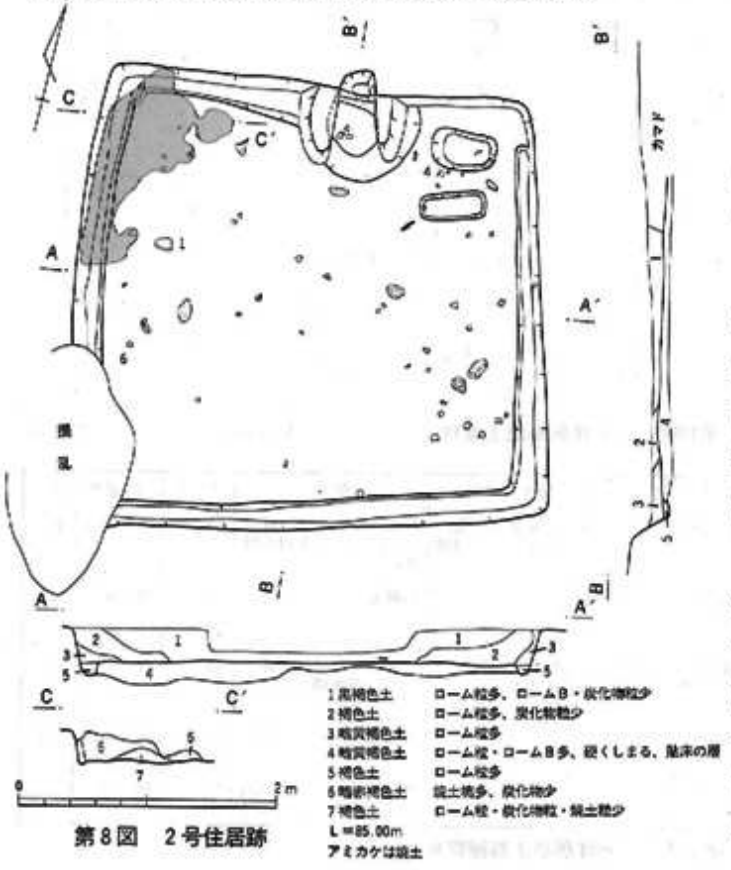
No	器種	法量 (cm)	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
1	甕	底径 5.0	砂粒を含む 焼成良好	暗褐色			底部外面横方向ヘラケズリ，内面は底から斜めにヘラナデ，木葉底	10%	埋土中	No2
2	甕	底径 6.0	緻密 焼成良好	淡褐色			外面縦方向の粗いヘラケズリ，内面は丁寧なヘラナデ	10%	埋土中	No1

第2表　1号住居跡土器観察表



第7図　1号住居跡出土遺物

埋土の状況　埋土中に焼土および炭化物が多量に含まれる。第一次堆積土の堆積したのちに，有機物の焼却もしくは焼却物の廃棄が行われ，その後人為的に埋め戻されている。　**周溝**　南及び東壁直下に認められる。深さ5～14㌢，幅10～18㌢で断面は箱形を呈する。　**柱穴**　認められなかった。　**貯蔵穴**　住居内の北東隅に1か所確認された。南辺がやや膨らむ東西に長い長方形で，壁は直線的に外傾して立ち上がり，底面は中央部が低い凹面である。　**カマド**　北壁に存在する。床面に掘り方を設けたのち，ロームブロックの混入する黒褐色土で貼床をし，粘土でカマドを構築する。カマド内面は被熱により赤色化・硬化が著しい。ただし，上部は表土除去の段階で削平されている。　**遺物**　埋土の上・中層から破片で出土しており，投棄もしくは流入と思われる。

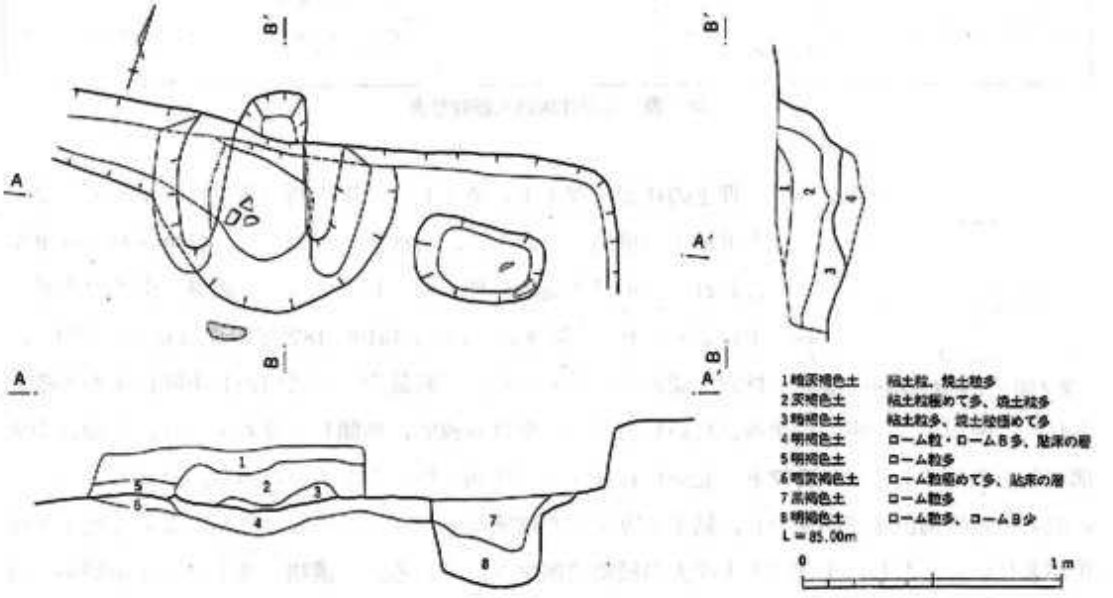


第8図　2号住居跡

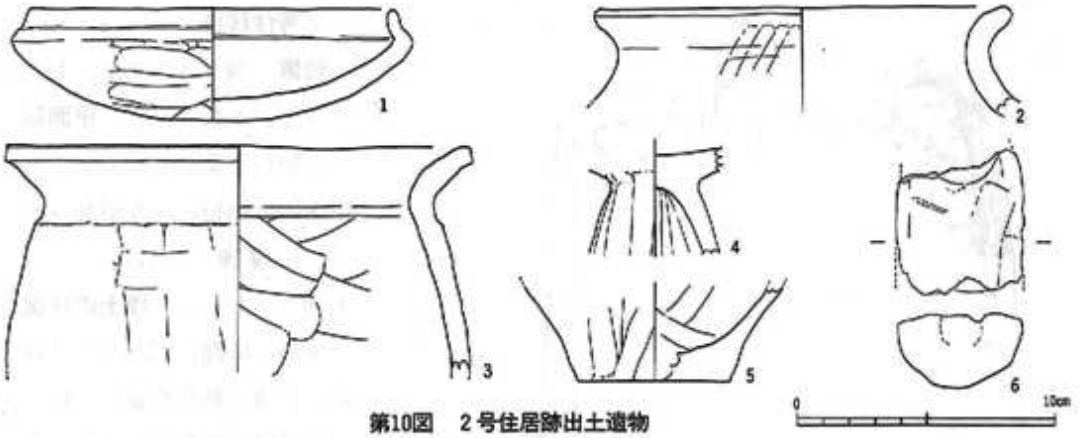
2号住居跡

位置　調査区の北部，F－3グリッドに所在する。　**平面形**　東辺が短い不整な方形である。なお南西隅は樹根により攪乱されている。　**規模**　3.17㍍～3.54㍍×3.26㍍～3.55㍍　**埋土の状況**　自然堆積　**床面**　凹凸のあるローム面上に薄い貼床を施している。軟弱で住居中央部がわずかに低い凹面を呈する。　**壁**　住居の四辺ともほぼ同じ角度で，直線的にやや外傾して立ち上がる硬い明瞭な壁である。　**周溝**　北東隅を除く住居の四辺に認められる。幅16㌢～21㌢，深さ5～12㌢で，断面はU字形である。　**柱穴**　認められなかった。

貯蔵穴　住居内の北東隅に１か所認められる。東西に長い楕円形であるが，北辺が直線的であるので元来は長方形であったものと思われる。底面は中央やや東よりが低い凹面で，貼床を切



第９図　２号住居跡カマド

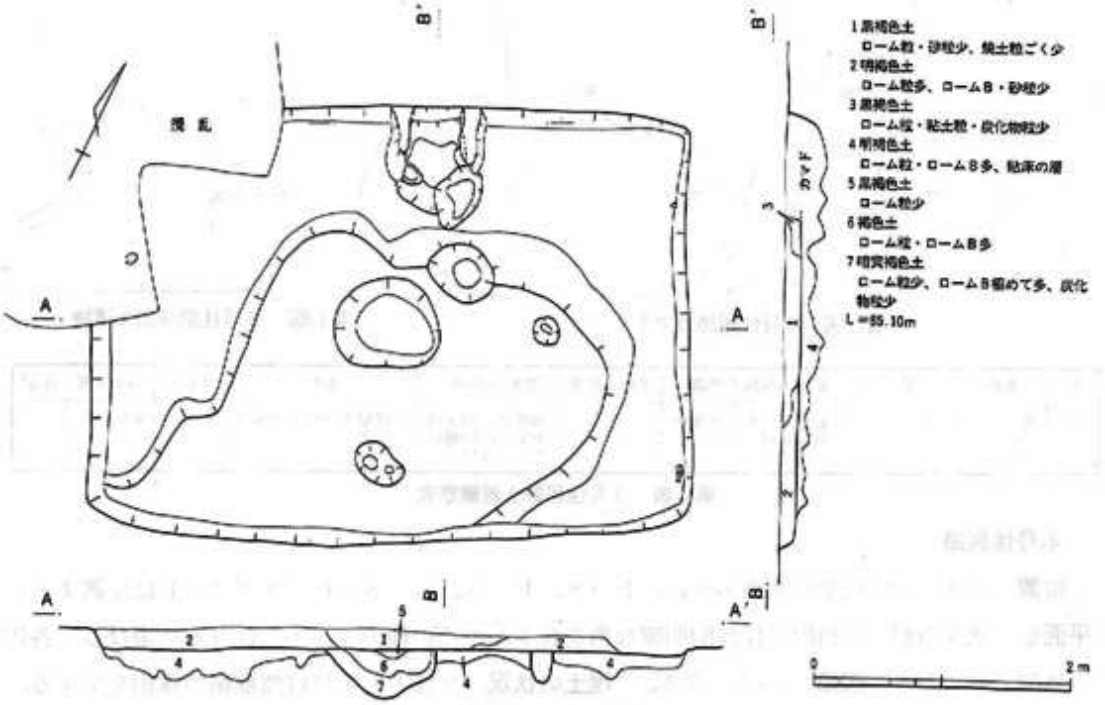


第10図　２号住居跡出土遺物

No.	器種	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
1	坏	口径 13.8 器高 5.3	砂粒を含む焼成良好	暗褐色		口縁部は下端に段をもって内傾する	外面ヘラケズリ口縁部ヨコナデ，内面同心円状のナデ	60%	堆土中	No.2
2	甕	口径 16.1	3²/₀大の砂粒少量含む焼成良好	暗褐色			口縁部ヨコナデ	10%	堆土中	No.5
3	甕	口径 16.0	1 ～ 2²/₀の砂粒多く含む焼成良好	褐色	２次焼成	口唇部は外側に面をもつ	外面ヘラケズリ後軽くナデ，内面横方向ナデ	10%	堆土中	No.1
4	台付甕		緻密	淡褐色			外面縦方向ヘラケズリ内面ナデ	10%	堆土中	No.4
5	甕	底径 5.8	砂粒を含む	褐色			外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ	10%	堆土中	

第３表　２号住居跡土器観察表

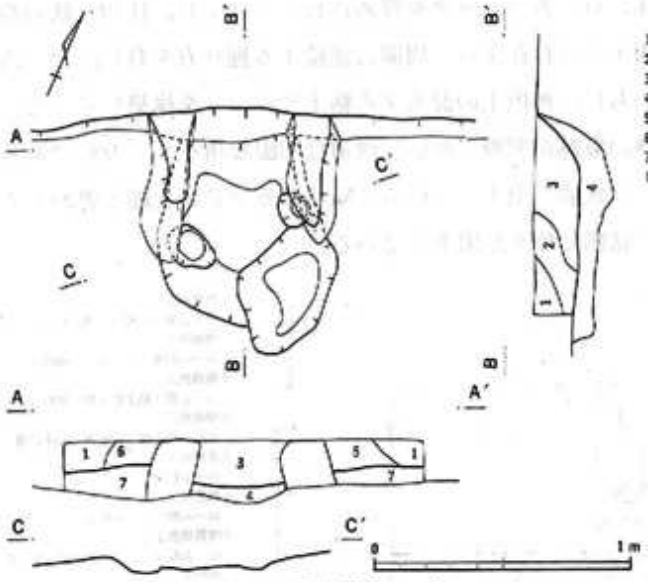
り込んで掘られている。南側には貼床にロームブロックを埋め込むことにより，仕切り状の高まりを設ける。 **カマド** 北壁のやや東よりに存在する。周溝に連続する掘り方を有し，ロームブロックの混入する褐色土で貼床したのちに，褐色土の混入する粘土でカマドを構築している。カマド自体は崩落しており，内面は被熱の痕跡が明瞭でない。煙道は明瞭な角をもつ方形である。 **遺物** いずれも床面から5～20㌢浮いた状態で出土している。№6はカマドの支脚と思われる。 **備考** 北西隅には，北から流れ込んだ状態で焼土が出土している。



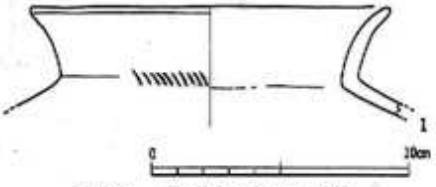
第11図　3号住居跡

3号住居跡

位置 調査区の北部，E－5グリッドを主として，E—6，F—5グリッドにまたがっている。 **平面形** 東西に長い長方形 **規模** 4.7㍍×3.2㍍ **埋土の状況** 自然堆積と思われる。 **床面** 不規則な起伏を有するが，ほぼ平坦である。カマド前付近は極めて硬くそれ以外の部分は軟弱である。カマド前から住居中央部にかけて焼土が見られる。住居の西部～北部～東部にかけては貼床がなされる。 **壁** 内湾しつつやや外傾して立ち上がり，壁面は軟弱である。 **周溝** 東壁下が溝状に微妙に窪むものの不明瞭。 **柱穴** 小ピットが3か所に認められるものの，不明である。 **貯蔵穴** 認められなかった。 **カマド** 北壁に存在する。上部が削平されたため明確でないが，壁面に掘り方を作らず，床面に浅い掘り方を設け，ロームブロックの混入する粘土でカマドを構築する。内部は被熱による硬化・赤色化が著しい。 **遺物** 土師器の小片が，床面から5～10㌢浮いた状態で出土している。 **備考** 住居中央部に土坑があるが，埋土上が硬く踏み固められており，住居使用時には埋められていたものと考えられる。



第12図　3号住居跡カマド



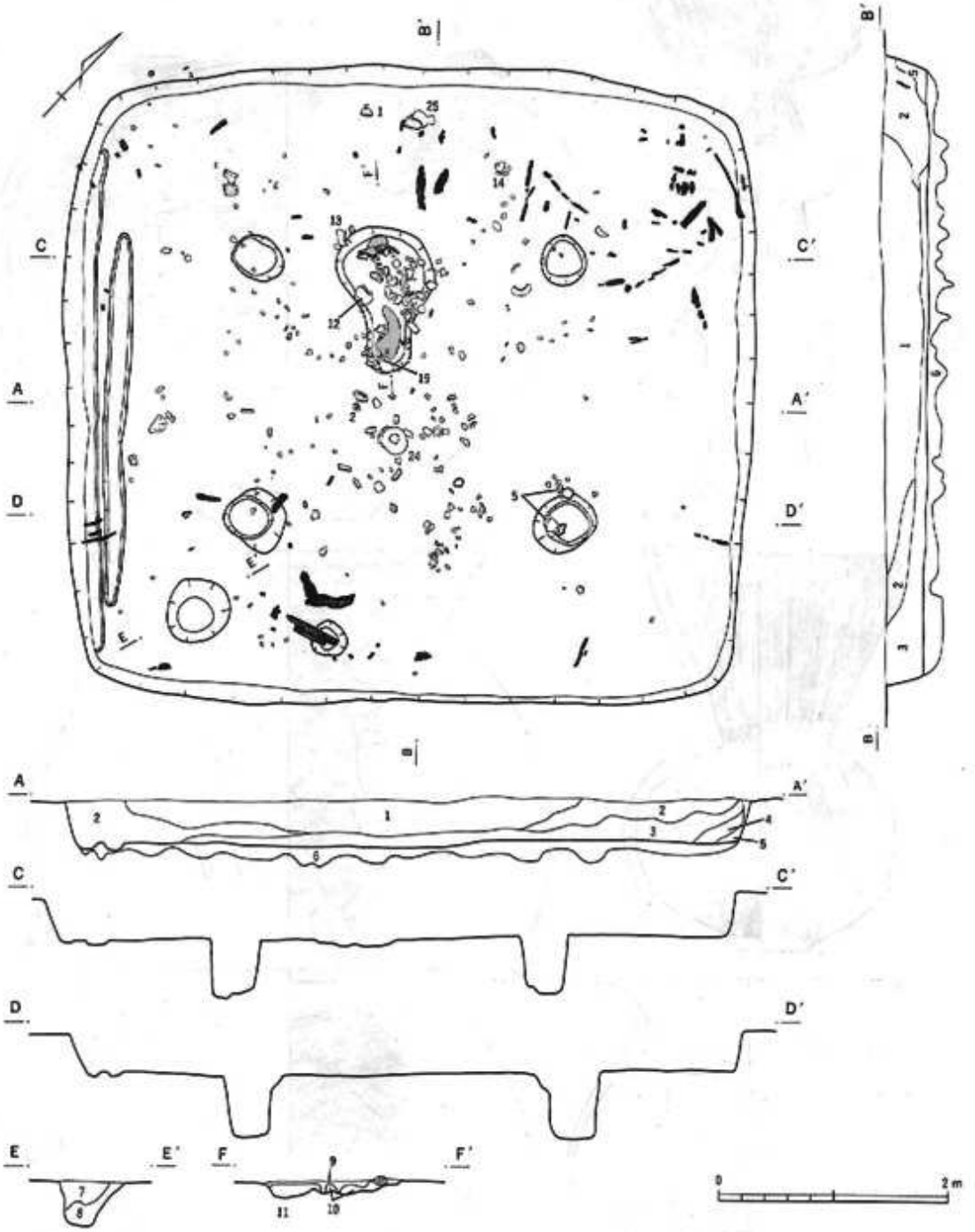
第13図　3号住居跡出土遺物

No.	器種	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
1	甕	口径　13.9	砂粒を含む 焼成良好	淡褐色		頸部はクの字状を呈し，口縁はきつく外反	頸部縦方向ハケメ後ヨコナデ	5 %	貼床下	

第4表　3号住居跡土器観察表

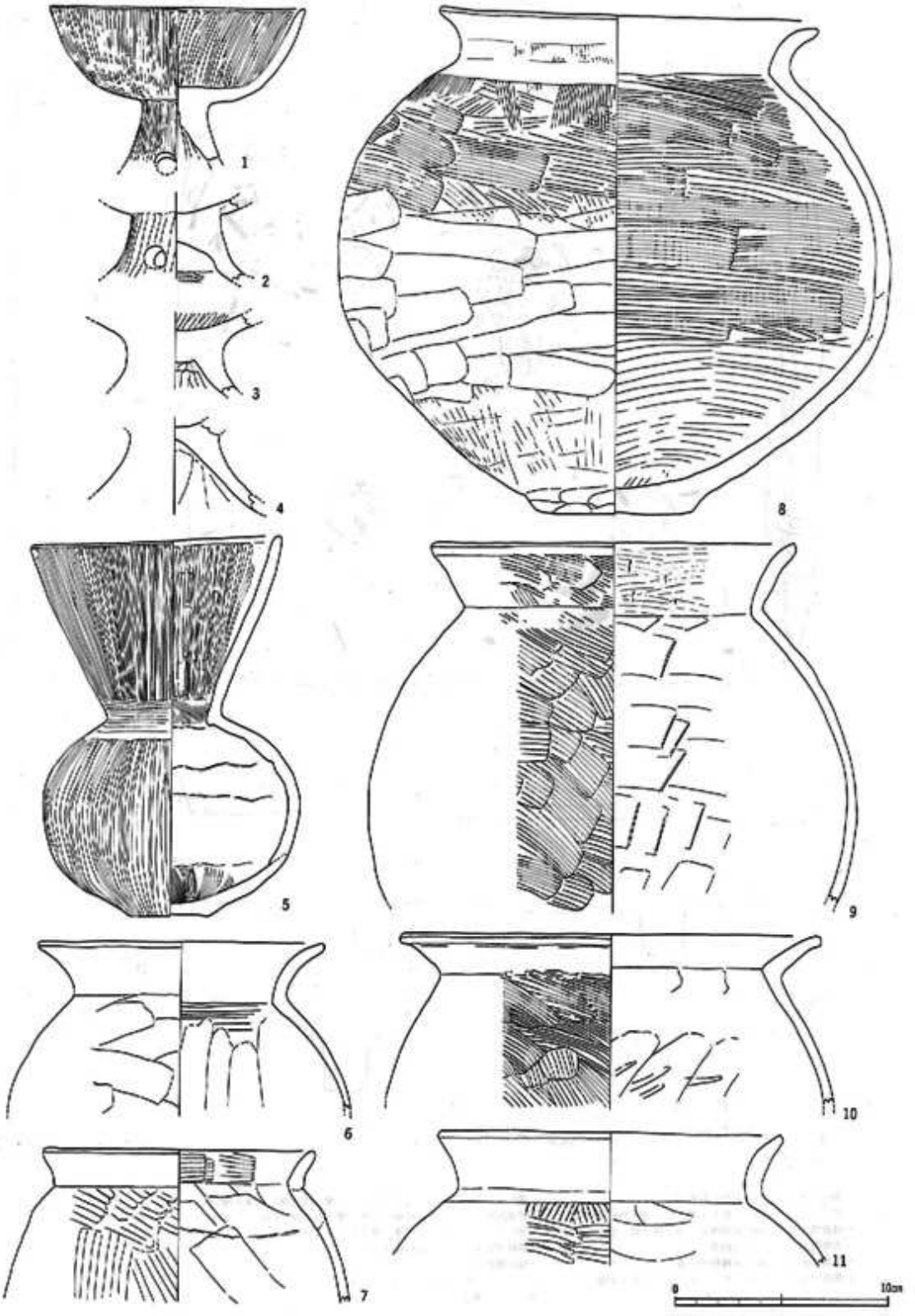
4号住居跡

位置　調査区の中央やや北西よりの，F－8，F－9，G－8，G－9グリッドに位置する。**平面形**　隅丸方形。南西隅は比較的明瞭な角をなすが，その他のコーナーは丸みを帯びる。各辺は外側に膨らむ。　**規模**　6.0㍍×5.4㍍　**埋土の状況**　全体としては自然堆積の様相を呈する。**床面**　なだらかな起伏を有するが，ほぼ平坦である。全体的に一様に硬化している。西部および南東部はローム地山の床。それ以外の部分はロームブロックの混入する黒色土および褐色土による貼床。　**壁**　立ち上がりは，直線的でやや外傾。ただし傾斜角は一様ではなく，北西壁中部・北東壁中部・南東壁西部は外傾。　**周溝**　南西壁下に2条。壁直下のものは，幅12～17㌢，深さ2～4㌢。その内側のものは，幅14～18㌢，深さ2～4.5㌢。いずれも断面は箱形を呈する。　**柱穴**　主柱穴は4本認められる。開口部は崩落によりやや広がっているが，ほぼ垂直に掘り込まれており，底面には柱の圧痕と思われる凹部が残る。なお南東壁際の南よりには，深さ33㌢の小ピットがある。　**貯蔵穴**　住居内南隅に1か所確認された。ほぼ円形で，壁は外湾しつつ外傾して立ち上がり，底面は中央が低い凹面をなす。　**炉**　中央部のやや北西よりに1か所確認された。平面形は西洋梨形で，北西端から河原石が2個並んで出土し，南東に偏って焼土が確認された。**遺物**　遺物の大半は埋土の上層・中層から出土。No.14・24のみ床面直上。埋土中層から炭化物出土。26は鉄鏃。無茎で，鏃身の下半を絞りこみ，腸抉が外反するもの。27は片刃の鉄鏃と思われるが不詳。

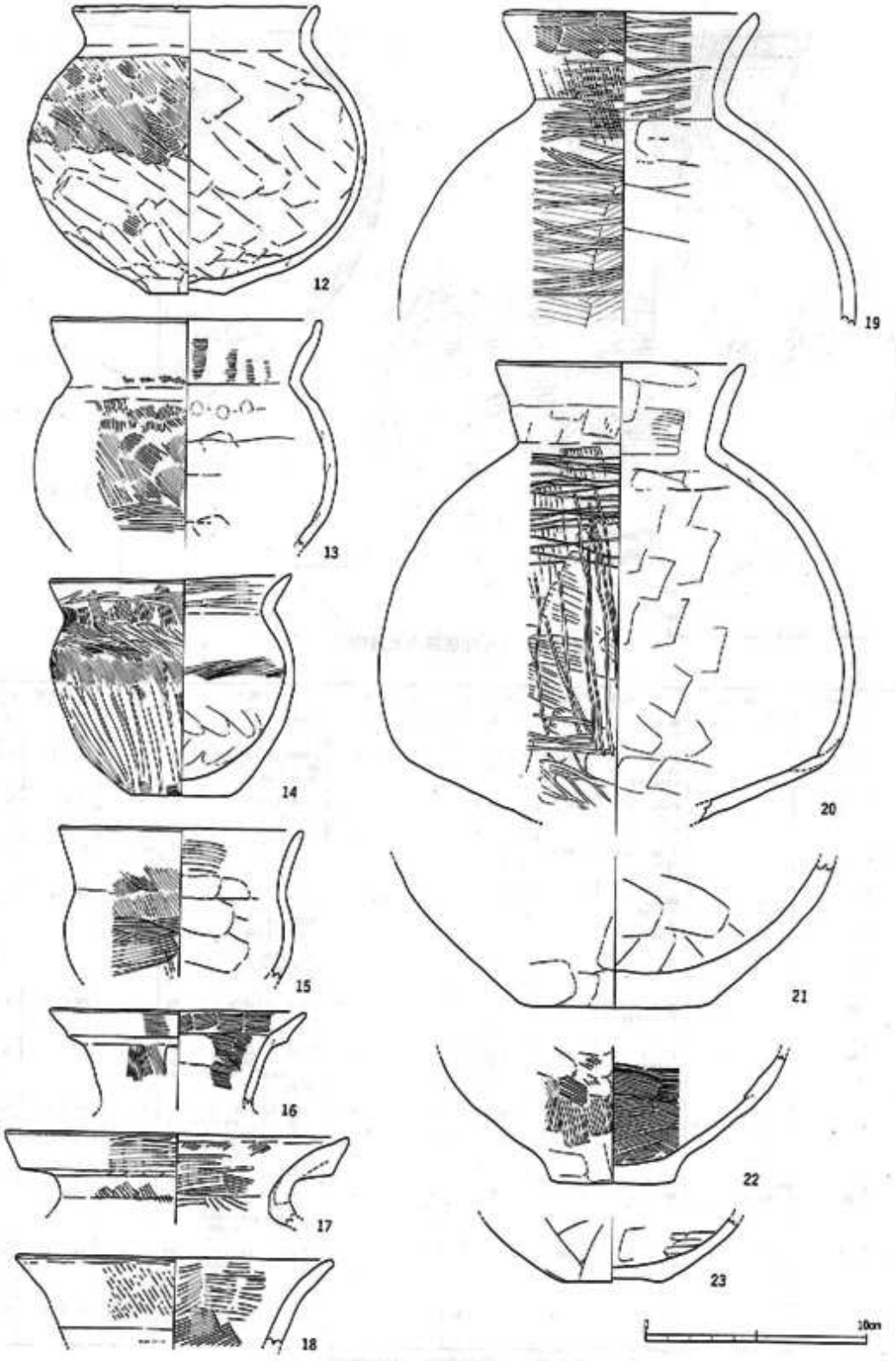


1 黒褐色土　ローム粒・砂粒少
2 褐色土　ローム粒多、焼土粒・炭化物粒少
3 暗黄褐色土　ローム粒極めて多、焼土粒・炭化物粒少
4 明褐色土　ローム粒多
5 暗黄褐色土　ローム粒極めて多
6 黄褐色土　ローム粒・ローム目多、貼床の層
7 褐色土　ローム粒多、焼土ごく微、炭化物粒・炭化物目少
8 暗黄褐色土　ローム粒極めて多、焼土粒・炭化物粒ごく少
9 褐色土　ローム粒多、焼土粒・炭化物粒少
10 暗黄褐色土　ローム粒極めて多
11 暗褐色土
L＝A～D＝84.90m　L＝E～F＝84.60m
アミカケは焼土

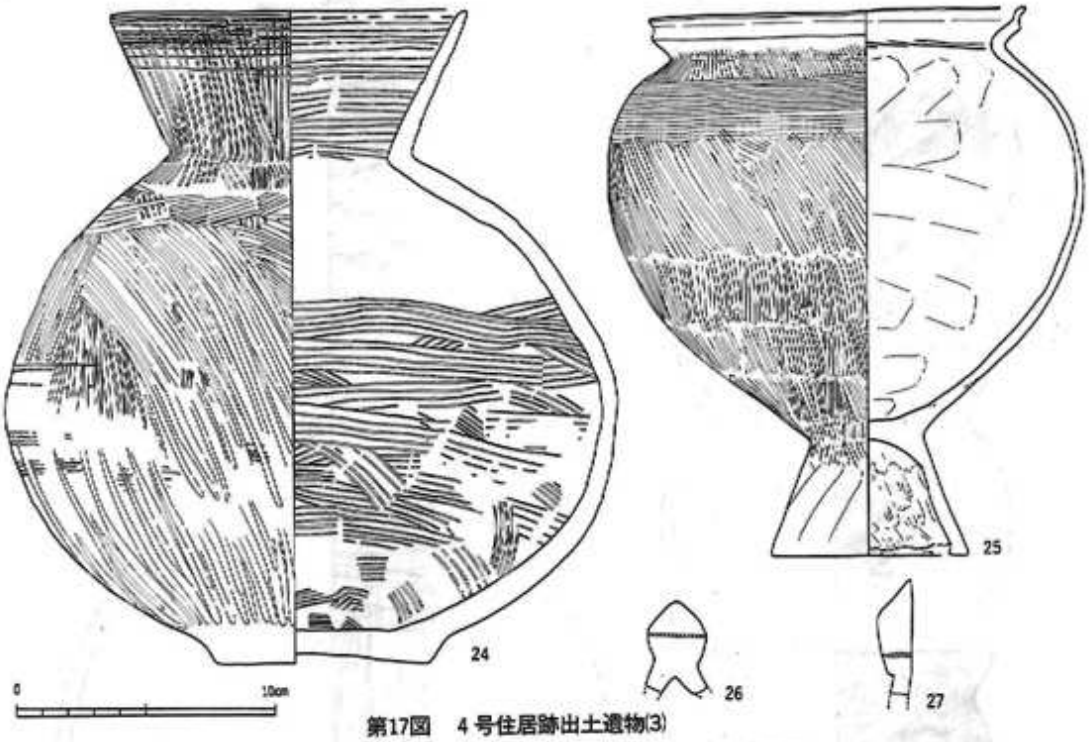
第14図　4号住居跡



第15図　4号住居跡出土遺物(1)



第16図　4号住居跡出土遺物(2)



第17図　4号住居跡出土遺物(3)

No	器種	法量 (cm)	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	器形	残存率	出土状態	図版
1	高坏	口径　11.9	緻密 焼成良好	赤褐色	剥落多い	脚部に3孔	内外面ともミガキ	50%	埋土中	No5
2	高坏		微細な砂粒含む 焼成良好	淡褐色	内外面ともやや摩滅	脚部に3孔	内面は坏部ミガキ，脚部ナデ，下位ハケメ，外面は脚部ミガキ	20%	埋土中	No28
3	高坏		微細な砂粒含む 焼成良好	淡褐色	外面摩滅		内面は坏部ミガキ，脚部ナデ	20%	埋土中	No3
4	高坏		微細な砂粒含む 焼成良好	淡褐色	内外面とも摩滅			10%	埋土中	No17
5	甕	口径　11.6 底径　3.6 器高　17.6	緻密，3 ㎜大の砂粒微量含む 焼成良好	橙褐色	黒変あり，赤彩	口縁部微妙に内湾	外面は口縁部頸部は縦方向のナデ後ミガキ，胴部は縦方向のミガキ内面は口縁部は縦方向のケズリ後ナデ後ミガキ，底部はハケメ，胴部は横方向のナデで底部付近ハケメ	90%	埋土中	No2 48
6	甕	口径　13.2	緻密 焼成良好	橙褐色		口縁部夕の字状に外反	外面は口縁部ナデ，胴部ハケメ後ナデ，内面ハケメ，ナデ後ケズリ	10%	埋土中	No47
7	甕	口径　12.6	1 ～3 ㎜大の砂粒含む 焼成良好	淡褐色	2次焼成 口縁部の一部に煤付着	底部がくびれる	外面は口縁部ナデ，胴部ハケメ後ナデ，内面は口縁部ハケメ後ナデ胴部ナデ	20%	埋土中	No42 45 46
8	甕	口径　17.5 底径　7.3 器高　23.2	焼成良好	淡褐色	外面煤付着一部剥落あり	胴部中位に最大径	外面は，口縁部はハケメ後ナデ，胴部上位はハケメ，胴部中位はハケメ後ケズリ，胴部下位はハケメ後ナデ，内面はハケメ	90%	埋土中	No25
9	甕	口径　17.0	緻密 焼成良好	橙褐色	2次焼成	胴部中位に最大径	外面は口縁部，頸部ハケメ後ナデ，胴部ハケメ，内面は口縁部ハケメ後ナデ，胴部ナデ	20%	埋土中	No30 16
10	甕	口径　19.6	緻密 焼成良好	褐褐色		口縁部夕の字状に外反	外面は口縁部ナデ，胴部ハケメ，内面は口縁部ハケメ後ナデ，胴部ケズリ，ナデ	10%	埋土中	No16 26 32
11	甕	口径　16.0	緻密 焼成良好	赤褐色	外面煤付着		外面は口縁部ナデ，胴部ハケメ後ミガキ，内面はナデ	破片	埋土中	No37

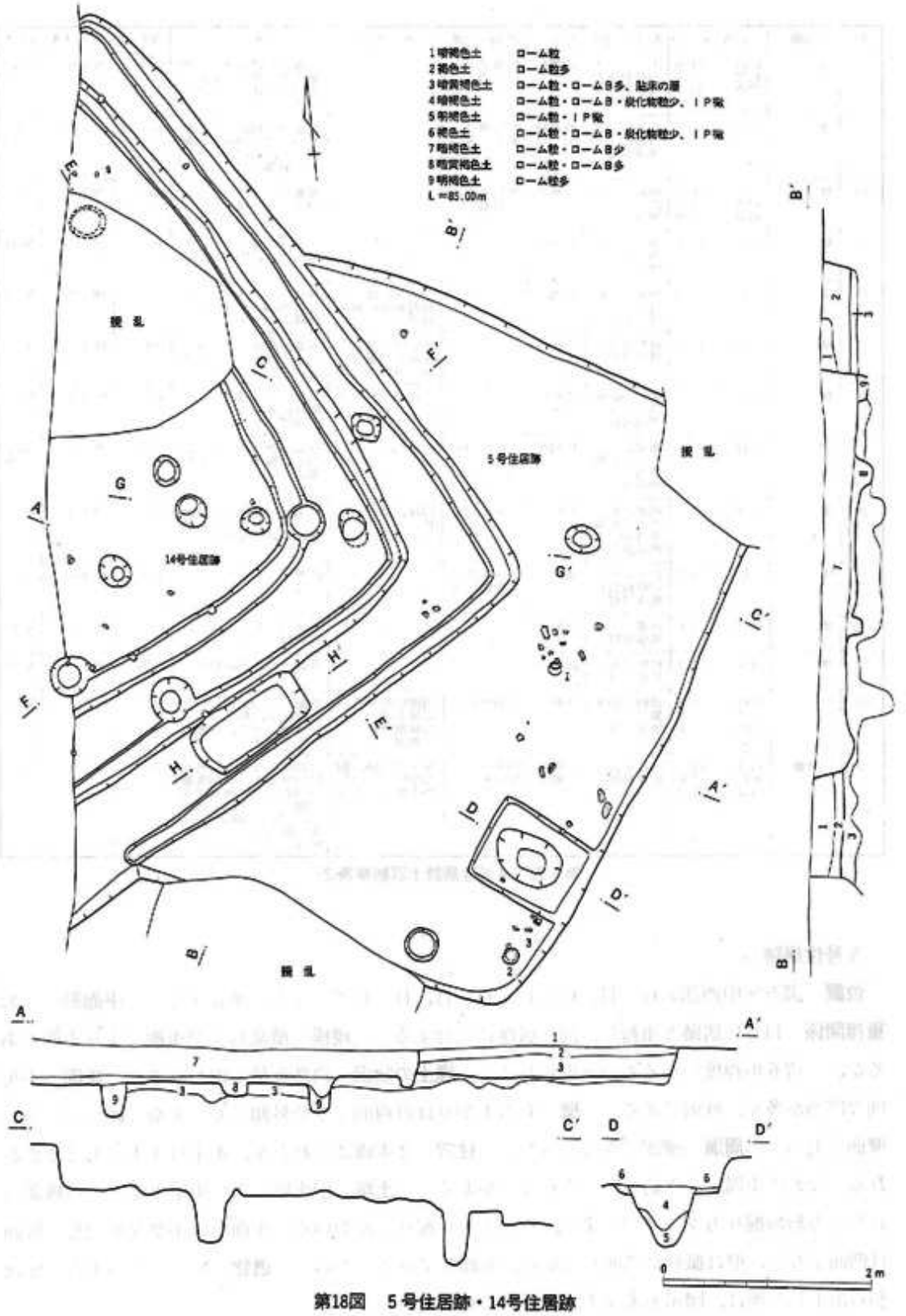
第5表　4号住居跡土器観察表(1)

No.	器種	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
12	甕	口径 11.0 底径 3.4 器高 12.7	3～5 ㎜大の砂粒含む 焼成良好	淡褐色	黒斑あり，煤付着		外面は口縁部ナデ，胴部上半ハケメ，胴部下半ハケメ後ナデ内面はナデ	90%	埋土中	No.7
13	甕	口径 12.2	3～5 ㎜大の砂粒含む 焼成良好	暗赤褐色	2次焼成，剥落が多い		外面は口縁部ナデ，胴部ハケメ，内面は口縁部ナデ，頸部ユビオサエ，胴部ナデ	60%	埋土中	No.6 10 21
14	甕	口径 10.8 底径 4.5 器高 9.9	微細な砂粒含む 焼成良好	淡褐色	黒斑あり，煤付着		外面ハケメ後ミガキ，内面ハケメ後ナデ	90%	埋土中	No.3
15	甕	口径 10.8	粗かい砂粒含む 焼成良好	淡褐色			外面は口縁部ナデ，胴部ハケメ，内面はナデ	40%	埋土中	No.54
16	甕	口径 11.4	微細な砂粒含む 焼成良好	淡褐色		ハの字に開いた頸部から口縁部はさらに開く	外面ハケメ後ナデ，内面は頸部ハケメ後ナデ口縁部ハケメ	破片	埋土中	No.42 32
17	甕	口径 13.4	砂粒を含む 焼成良好	赤褐色		短い頸部が立ち上がり口縁部は強く外反する	外面は頸部ハケメ後ナデ，口縁部ミガキ，内面はハケメ後ナデ	破片	埋土中	No.15
18	甕	口径 14.2	細かい砂粒含む 焼成良好	黒褐色		口縁部中位でさらにひらく	外面ハケメ後ナデ，内面は口縁部ハケメ後ナデ頸部ハケメ	破片	埋土中	No.21 13
19	甕	口径 11.5	緻密，3 ㎜大の砂粒微量含む 焼成良好	橙褐色	外面煤付着	口縁部はハの字状にひらく	外面ハケメ後ミガキ，内面口縁部ミガキ，胴部ナデ	50%	埋土中	No.27 25
20	甕	口径 11.2	緻密，3 ㎜大の砂粒微量含む 焼成良好	褐色	外面漆付着	口縁部はハの字状にひらく しもぶくれ	外面は口縁部ナデ，胴部ハケメ後ミガキ，内面はハケメ後ナデ	80%	埋土中	No.25
21	甕	底径 8.5	1～3 ㎜大の砂粒含む 焼成良好	褐色	2次焼成 外面煤付着		内外面ともナデ	10%	埋土中	No.25
22	甕	底径 5.6	緻密 焼成良好	淡褐色			外面にハケメ，ナデ，内面にハケメ	15%	埋土中	No.41
23	甕	底径 4.4	砂粒含む 焼成良好	淡褐色			外面ナデ，内面はナデ	10%	埋土中	No.29
24	甕	口径 13.8 底径 8.2 器高 25.0	砂粒やや多量 焼成良好	淡褐色	外面煤付着	胴部中位やや下に最大径 口縁部直線的に外傾	外面は，口縁部はハケメ後ナデ，胴部はハケメ後ミガキ，内面はハケメ後ナデ	90%	床面	No.1
25	台付甕	口径 14.5 底径 7.6 器高 21.0	砂粒を含む 焼成良好	暗褐色～褐色	内外面とも煤付着	S字状口縁，胴部中位よりややや上部に最大径	台端部折り返し，外面は口縁部ナデ，胴部横方向のハケメ後周部縦方向のハケメ，台部ナデ，内面は口縁部ナデ，頸部横方向のハケメ，胴部ナデ，	80%	埋土中	No.4

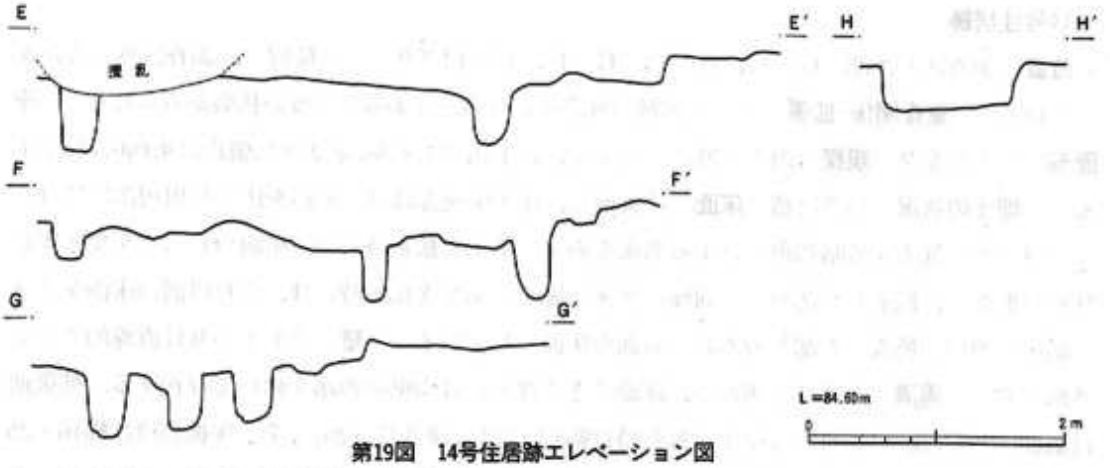
第6表　4号住居跡土器観察表(2)

5号住居跡

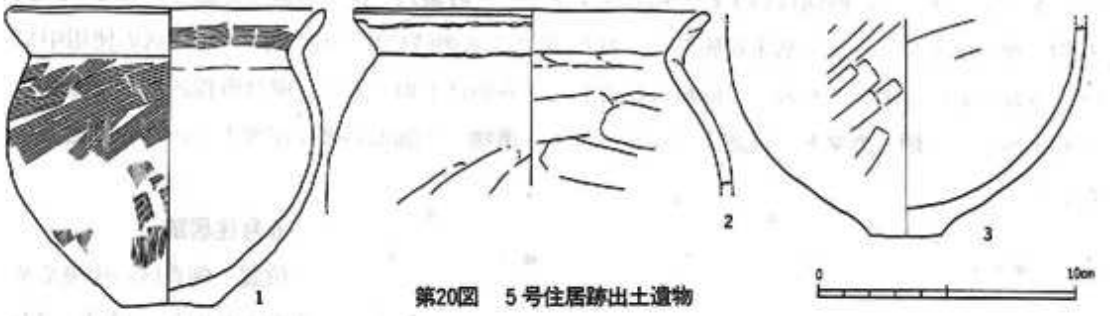
位置　調査区中西部のG－11，G－12，H—11，H—12グリッドに所在する。　**平面形**　方形　**重複関係**　14号住居跡と重複し，同住居跡に先行する。　**規模**　撹乱および重複により不明であるが，一辺6m程度になるものと思われる。　**埋土の状況**　自然堆積と思われる。　**床面**　不規則な凹凸が多く，軟弱である。　**壁**　立ち上がりは直線的でやや外傾する。平滑で硬いロームの壁面である。　**周溝**　確認できなかった。　**柱穴**　2本確認されたが，本来は4本であると思われる。なお南東隅に深さ約8㌢の小ピットがある。　**土坑**　南東隅に近い東壁下に1カ所確認された。方形の掘り方を一度埋め戻し，その上から掘りこんでいる。平面形は不整な楕円形で底面は凹面をなし，壁は微妙に湾曲しながら，外傾して立ち上がる。　**遺物**　No.1～3の土器が床面から出土した他は，図示不能な小片が埋土中から出土している。



第18図　5号住居跡・14号住居跡



第19図　14号住居跡エレベーション図



第20図　5号住居跡出土遺物

No	器種	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
1	甕	口径 12.3 底径 3.6 器高 11.5	緻密 微細な砂粒含む 焼成良好	暗褐色	外面煤付着		外面は口縁部ナデ，胴部ハケメ，底部ヘラケズリ，底面ナデ，内面は口縁部ハケメ，胴部はハケメ後ナデ	95%	床面	No4
2	甕	口径 13.9	緻密 微細な砂粒含む 焼成良好	暗褐色～褐色	外面煤付着	口縁部後付けの粘土紐痕残る	外面は口縁部ナデ，胴部ヘラケズリ後ナデ，内面は口縁部ハケメ，胴部ナデ	50%	床面	No16
3	甕	底径 3.6	緻密 微細な砂粒含む	暗褐色	外面煤付着		外面は胴部ヘラケズリ内面は胴部ナデ	20%	床面	No13

第7表　5号住居跡土器観察表

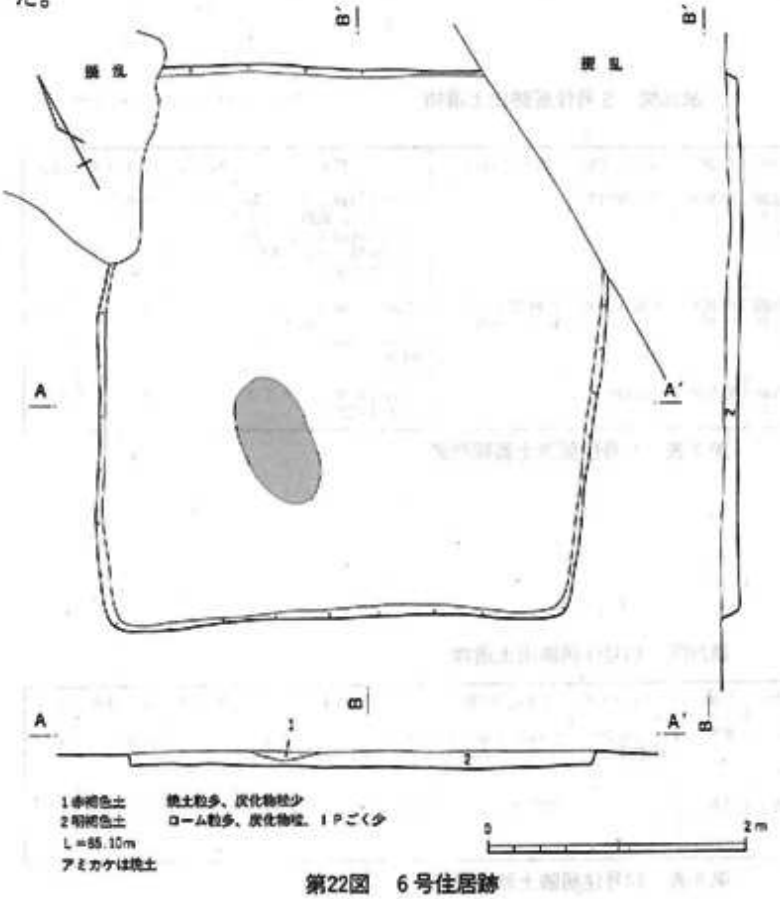
第21図　14号住居跡出土遺物

No	器種	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
1	坏	口径 13.6 器高 3.8	1～3㎜の砂粒含 焼成良好	褐色	内面及び口縁部磨仕上げ	口縁は下端に段を持って真っ直ぐに立ち上がる	外面はナデ，口縁部ミガキ，内面はミガキ	30%	床面	No14
2	台付甕	底径 14.8	緻密微細な砂粒含む 焼成良好	暗褐色		脚部はやや内湾する	外面はナデ，内面はナデ	40%	埋土中	No2 3

第8表　14号住居跡土器観察表

14号住居跡

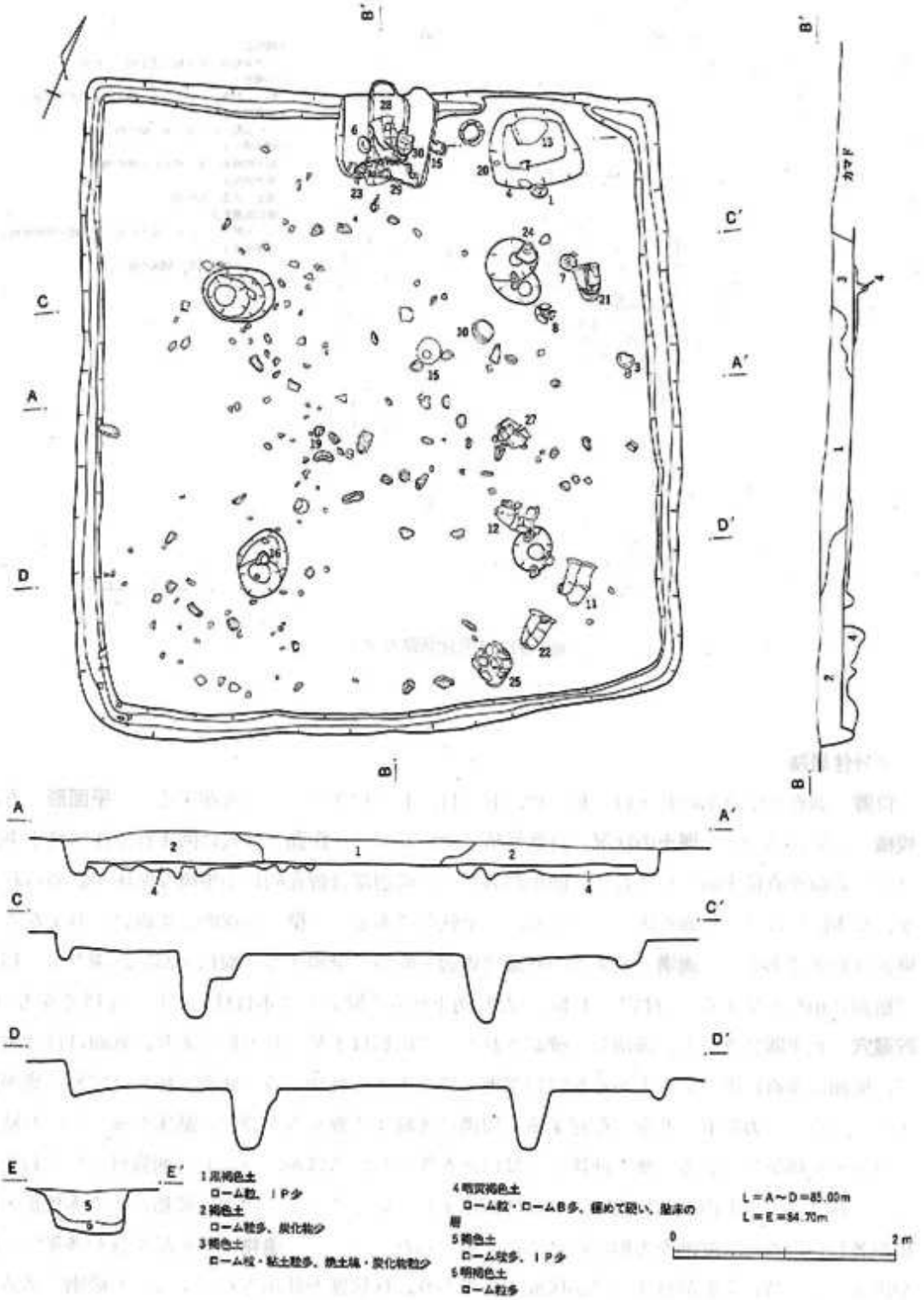
位置　調査区の西部，G－11，G－12，H－11，H－12グリッドに位置し，調査区外にまたがっている。　**重複関係・拡張**　5号住居跡の埋没後に作られており，2度の拡張がみられる。　**平面形**　長方形か？　**規模**　調査区外にまたがるため不明であるが，第2次拡張後は東西6.7㍍である。　**埋土の状況**　自然堆積　**床面**　拡張前は，住居中央部はローム面を床とし周辺部にはロームブロックの混入する暗褐色土による貼床を施す。第1次拡張時には，床面のレベルを変えずに外側に拡張し，拡張した部分にも同様の貼床を施す。第2次拡張時には，それ以前の床面をすべて貼床で覆い，拡張した部分のみローム面を床面としている。　**壁**　立ち上がりは直線的でやや外傾する。　**周溝**　全体は不明だが，確認できる部分には南壁の西部を除いて存在する。拡張前は幅20～29㌢，深さ11～18㌢，第1次拡張時は幅17～22㌢，深さ17～26㌢，第2次拡張後は幅16～25㌢，深さ4～9㌢で，断面はいずれも箱形を呈する。　**貯蔵穴**　南壁の直下に認められるが，人為的に埋め戻されたうえに貼床が施されており，第2次拡張時に作られたものの，住居の使用中に廃止されたものと考えられる。平面形は長方形で，底面は平坦であり，壁は直線的にほぼ垂直に立ち上がる。　**炉・カマド**　確認できなかった。　**遺物**　土師器の破片が埋土中から少量出土した。



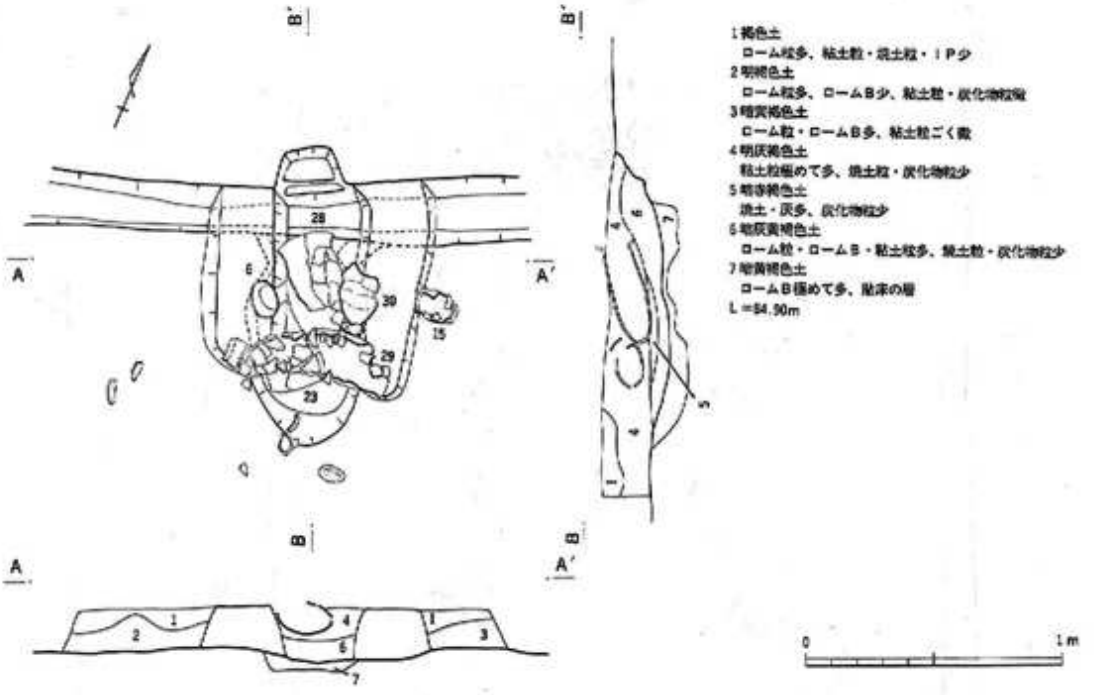
第22図　6号住居跡

6号住居跡

位置　調査区の中央やや南西よりのE—13，E—14，F—13，F—14グリッドに所在する。　**平面形**　平行四辺形に近い方形。　**規模**　3.9㍍×4.3㍍　**埋土の状況**　遺存高が低いため不明確であるが，人為的に埋め戻している可能性が高い。　**周溝・柱穴・貯蔵穴・カマド・炉**　確認できなかった。　**遺物**　土器の小片のみが埋土内から少量出土している。　**備考**　床面より浮いた状態で焼土が出土している。


A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
カマド
1 黒褐色土
ローム粒、ＩＰ少
2 褐色土
ローム粒多、炭化粒少
3 褐色土
ローム粒・粘土粒多、焼土塊・炭化粒粒少
4 明黄褐色土
ローム粒・ロームＢ多、極めて硬い、貼床の層
5 褐色土
ローム粒多、ＩＰ少
6 明褐色土
ローム粒多
L＝A～D＝85.00m
L＝E＝84.70m
0
2m

第23図　7号住居跡



第24図　7号住居跡カマド

7号住居跡

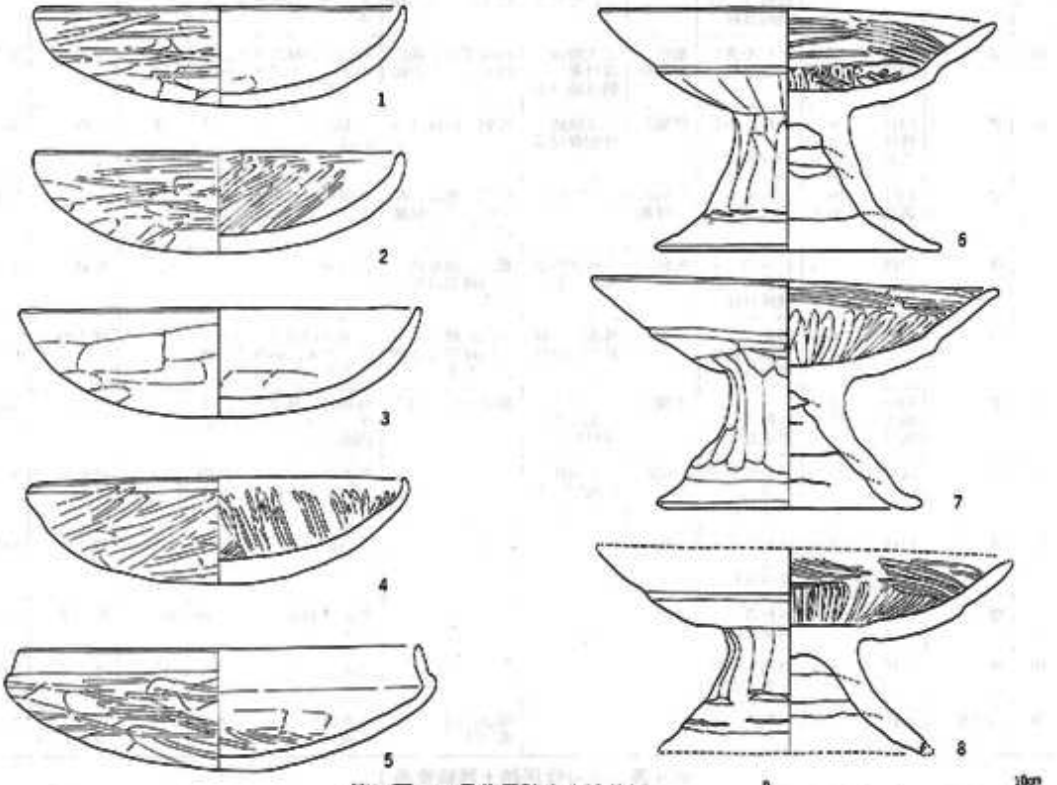
位置　調査区中央部のE—11，E—12，F—11，F—12グリッドに所在する。　**平面形**　方形　**規模**　5.5㍍×5.9㍍　**埋土の状況**　自然堆積と思われる。　**床面**　柱穴に囲まれた住居跡中央部はローム面を直接床面としており，硬化が著しい。周辺部は散在的に小規模な貼床が認められるが，基本的にはローム面を床としており，やや軟弱である。　**壁**　直線的に垂直に立ち上がる。壁面は軟弱である。　**周溝**　北東部の貯蔵穴周辺を除いて全周する。幅12～25㌢，深さ7～15㌢で断面は箱形を呈する。　**柱穴**　4本。ただし南東柱穴を除いた3本は柱穴に接して段差をもつ。**貯蔵穴**　北東隅にカマドに隣接して確認された。平面形は不整な長方形であり，底面はほぼ平坦で，壁面は垂直に近く立ち上がるが開口部近くでは大きく外傾する。底面に接して完形の甕が出土している。　**カマド**　北壁に存在する。周溝に連続する掘り方を設け，貼床を施したのち粘土でカマドを構築している。甕を連接して焚口部を作っているほか，カマドの補強材として石を混入している。カマド内からは甕および高坏が出土している。カマド内面は被熱による赤色化・硬化が著しい。煙道は壁面を方形に掘りこんで設けられている。　**遺物**　完形品を含む多量の土器が出土した。特に完形品はすべてが床面直上であり，住居跡が使用されなくなった段階で放置されたか，直後に投棄されたものと思われる。№31は白玉。滑石製で埋土中の出土である。

No.	器種	法量 (cm)	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
1	坏	口径 14.3 器高 3.8	1 ～ 2³/₄の 砂粒含 焼成良好	淡褐色	口縁部漆仕上げ	内湾しつつ立ち上がり，口縁も内湾する	外面にヘラケズリ後，粗くミガキ，内面は広面にヨコナデ	完形	床面	№11
2	坏	口径 14.3 器高 8.9	微細な砂粒 やや多く含 焼成良好	暗褐色	内外面漆仕上げ	内湾しつつ立ち上がり，口縁も内湾する	外面はヘラケズリ後粗いミガキ，内面はナデ後ミガキ	75%	埋土中	№61
3	坏	口径 15.4 器高 4.2	微細な砂粒 やや多く含 焼成良好	暗褐色	口縁部内外面漆仕上げ	内湾しつつ立ち上がる	外面は口縁部ナデ，ヘラケズリ後ナデ，内面はナデ	80%	埋土中	№6
4	坏	口径 14.6 器高 4.1	1 ～ 2³/₄の 砂粒含 焼成良好	暗褐色	内面と口縁部外面漆仕上げ	内湾しつつ立ち上がり，口縁も内湾する	外面はヘラケズリ後，粗くミガキ，内面はミガキ	完形	床面	№11
5	坏	口径 15.3 器高 4.7	砂粒を含む 焼成良好	橙褐色		口縁部は下端に段をもって内傾する	外面は口縁部ナデ，段の下ヘラケズリ後粗いミガキ，内面ナデ	ほぼ完形	床面	№14
6	高坏	口径 15.3 底径 11.0 器高 9.3	緻密　砂粒 小石含む 焼成良好	褐色	内面黒色処理	坏部は浅く広がり中位に段を持つ。脚部はハの字状に開き裾端部でさらに開く	外面は口縁部ナデ，裾部縦方向ヘラケズリ，内面は，坏部ミガキ，脚部回転方向ヘラケズリ，脚端部ナデ	90%	カマド	№3
7	高坏	口径 15.7 底径 10.3 器高 8.9	砂粒を含む 焼成良好	褐色	内面黒色処理	坏部は浅く広がり中位に段を持つ。	外面は口縁部ナデ，脚部縦方向ヘラケズリ，内面は，坏部ミガキ，脚部回転方向ヘラケズリ，裾端部ナデ	ほぼ完形	床面	№9
8	高坏	口径 16.0 底径 10.5 器高 7.8	緻密　砂粒 含む 焼成良好	暗褐色	内面黒色処理 口唇部と脚端部に，欠損後磨滅	坏部は浅く広がり，中位に段を持つ 裾部は太く短くハの字状に開く	外面は口縁部ナデ，脚部縦方向ヘラケズリ，内面は，坏部ミガキ，裾部回転方向ヘラケズリ，脚端部ナデ	ほぼ完形	床面	№7
9	壺	口径 15.4	2 ～ 3⁵/₄の 砂粒少し含 焼成良好	褐色	内外面の一部に煤付着	口縁部は下端に段をもって内傾する	外面はナデ後粗いミガキ，内面はナデ後ミガキ	40%	床面	
10	鉢	口径 17.2 器高 8.9	砂粒を含む 焼成良好	褐色～ 暗褐色	2次焼成 煤付着 剥落部分有	口唇部は下端に段をもって内傾する	外面は口縁部ナデ，段の下ヘラケズリ，内面はヘラナデ	ほぼ完形	床面	№14
11	甕	口径 20.5 底径 6.9 器高 35.9	砂粒，小石 含 焼成良好	橙褐色	2次焼成 外面煤付着	長脚で口縁は外反	外面はヘラケズリ，内面はナデ	完形	床面	№3
12	甕	口径 16.9 器高 30.8	砂粒多く含 焼成良好	暗褐色 ～橙褐 色	2次焼成	長脚で頸部に稜をもって口縁部は外反する	外面はヘラケズリ，内面はナデ	90%	床面	№4
13	甕	口径 15.4	1 ～ 3³/₄の 砂粒多く含 焼成良好	褐色	口縁部内面著しく剥落	頸部に稜を持って口縁部は外反する	内外面ナデ	95%	貯蔵穴	№93
14	壺	口径 6.6	緻密 微細な砂粒 焼成良好	淡褐色	外面と口縁部内面漆仕上げ	頸部に稜をもって口縁部は垂直に立ち上がる	外面は口縁部ヨコナデ後ミガキ，胴部ナデ後ミガキ，内面はナデ	25%	埋土中	
15	甕	口径 11.7 器高 13.6 底径 6.4	1 ～ 3⁵/₄の 砂粒多く含 焼成良好	赤褐色	2次焼成 外面下部に煤付着	胴部中位に最大径	外面は口縁部ナデ，上位ハケメ，下位ナデ，内面ナデ	50%	カマド	№4
16	甕	底径 6.6	砂粒やや多く含 焼成良好	暗褐色	2次焼成 外面煤付着		外面はヘラケズリ，内面はナデ後粗いミガキ	25%	床面	№55
17	甕	口径 22.0	砂粒やや多く含 焼成良好	淡褐色			内外面ナデ	20%	埋土中	№13
18	甕	口径 14.8	砂粒含 焼成良好	淡褐色			外面は胴部ナデ，内面はナデ	10%	埋土中	№3
19	甕	底径 6.8	微細な砂粒 含焼成良好	灰色			外面ケズリ	10%	埋土中	№47
20	台付甕	底径 5.7	砂粒を含む	褐色		脚部の破片で内湾気味	外面はハケ後ヘラナデ 内面はヘラナデ	10%	炭面 混入か	№17

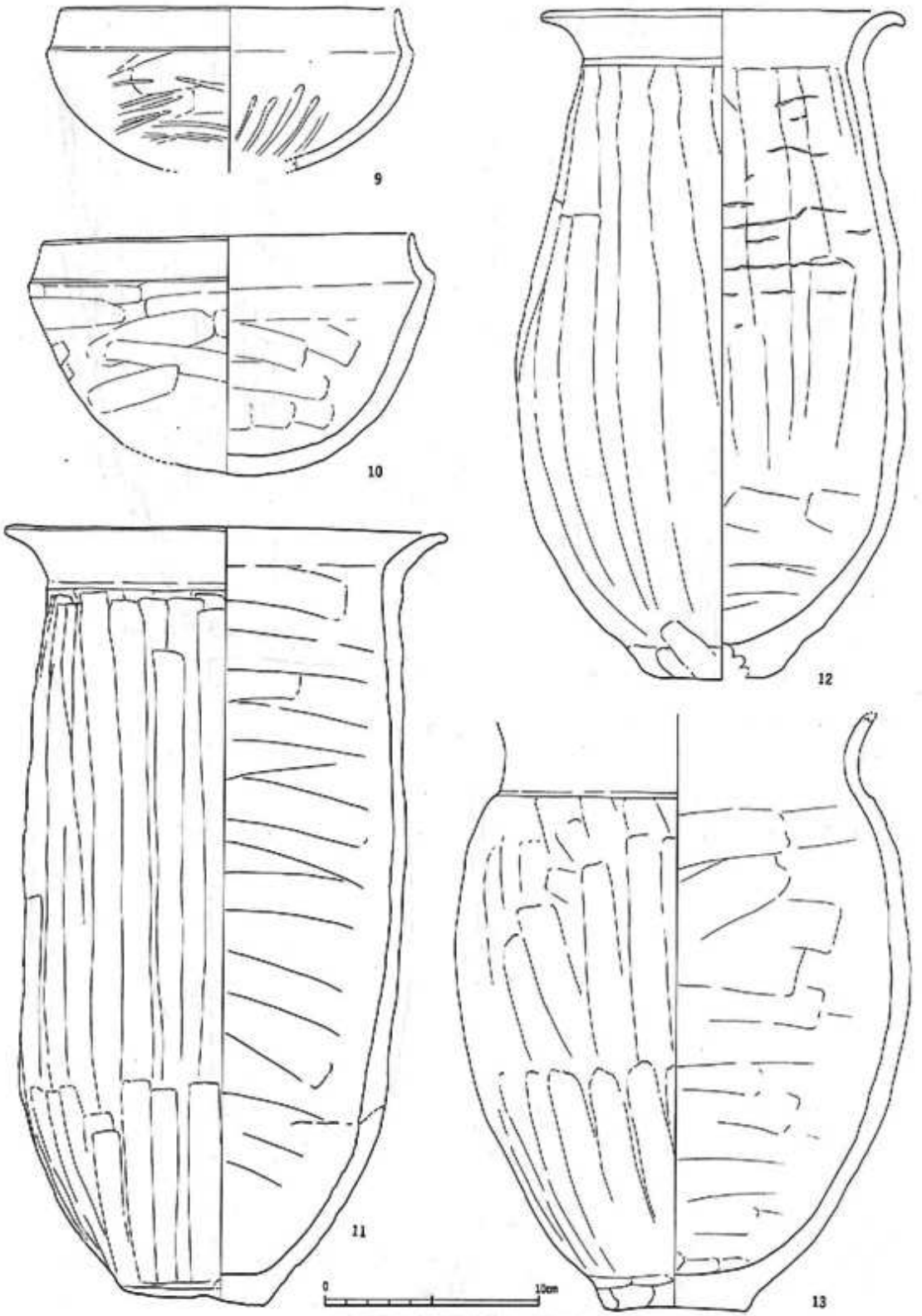
第９表　７号住居跡土器観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
21	甕	口径 24.0 底径 9.3 器高 28.9	緻密微細な砂粒含む 焼成良好	橙褐色			外面はヘラケズリ後，粗くミガキ，内面はミガキ	95%	床面	No.9
22	甕	口径 19.2 底径 8.7 器高 28.4	緻密微細な砂粒含む 焼成良好	淡褐色			外面はケズリ，内面はナデ後ミガキ，	完形	床面	No.2
23	甕	口径 18.4 底径 5.2 器高 30.1	1 ～ 3%の砂粒含 焼成良好	橙褐色		長胴で口縁は外反	外面はヘラケズリ，内面はナデ	90%	カマド	No.5
24	甕	底径 7.1	1 ～ 3%の砂粒含 焼成良好	橙褐色			外面ケズリ，内面ナデ	25%	床面	No.10
25	甕	口径 22.0 底径 5.9 器高 33.5	砂粒を含む 焼成良好	淡褐色 ～ 暗褐色	2次焼成 外面煤付着 磨滅著しい	長胴で口縁は外反	外面はヘラケズリ，内面はナデ	70%	埋土中	No.1
26	甕	底径 7.8	砂粒多く含 焼成良好	淡褐色			外面はヘラケズリ，内面はナデ	30%	埋土中	No.15
27	甕	口径 6.5 底径 11.0 器高 9.3	砂粒含む 焼成良好	暗褐色	外面煤付着	歪み有り	外面はケズリ，内面はナデ	完形	床面	No.5
28	甕	口径 20.5 底径 7.2 器高 35.3	微細な砂粒やや多く含 焼成良好	橙褐色	2次焼成 外面煤付着 表面磨滅	長胴で口縁は外反	外面はヘラケズリ後，上部ナデ，内面はナデ	70%	カマド	No.1
29	甕	口径 21.0 底径 7.8 器高 31.2	砂粒，小石含む 焼成良好	暗褐色			外面はヘラケズリ，内面はナデ	55%	カマド	No.5
30	甕	口径 6.5 底径 11.0 器高 9.3	砂粒やや多く含 焼成良好	褐色	2次焼成 内面底部煤付着		外面はハケメ，内面はナデ	25%	カマド	No.2

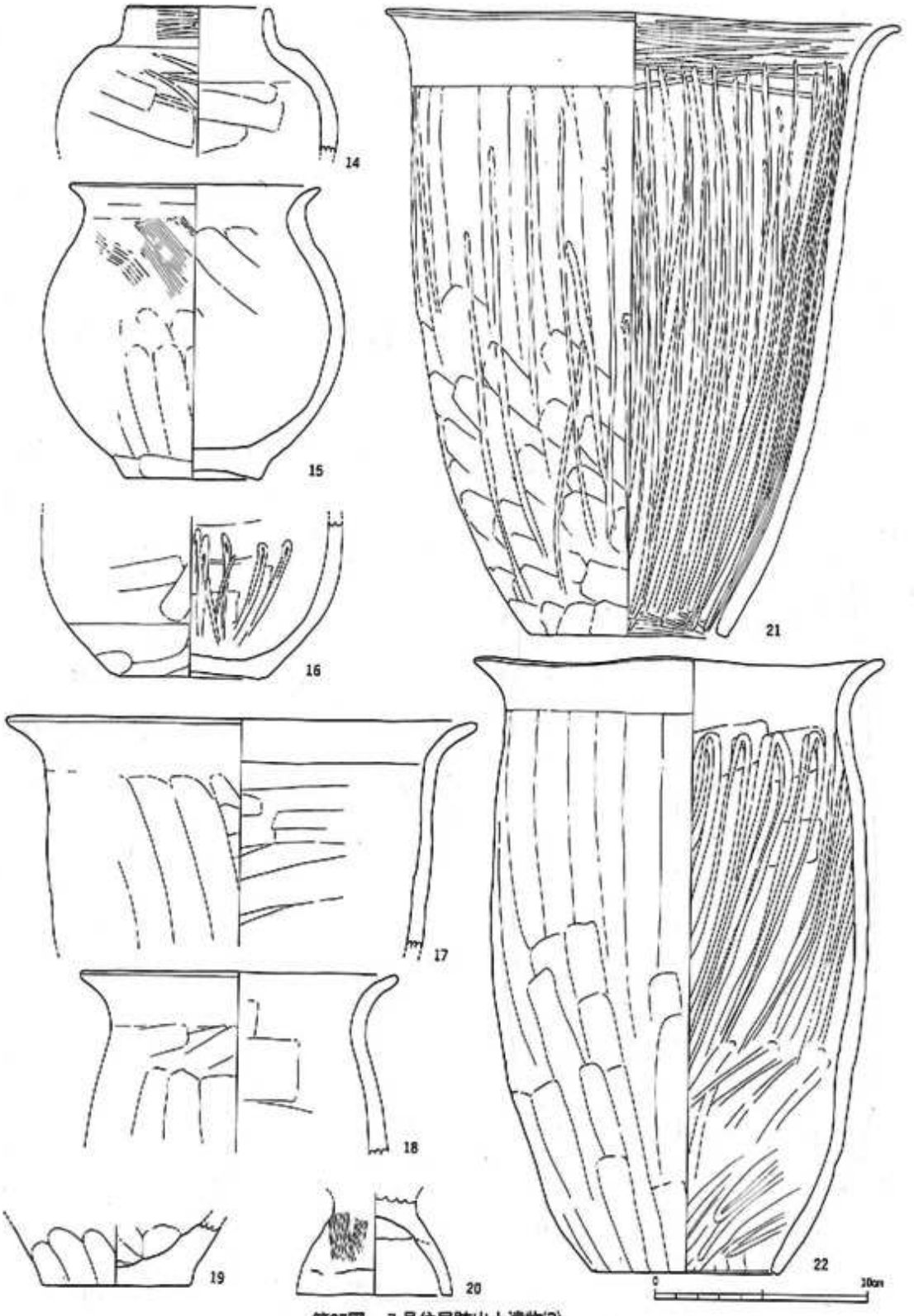
第10表　7号住居跡土器観察表(2)



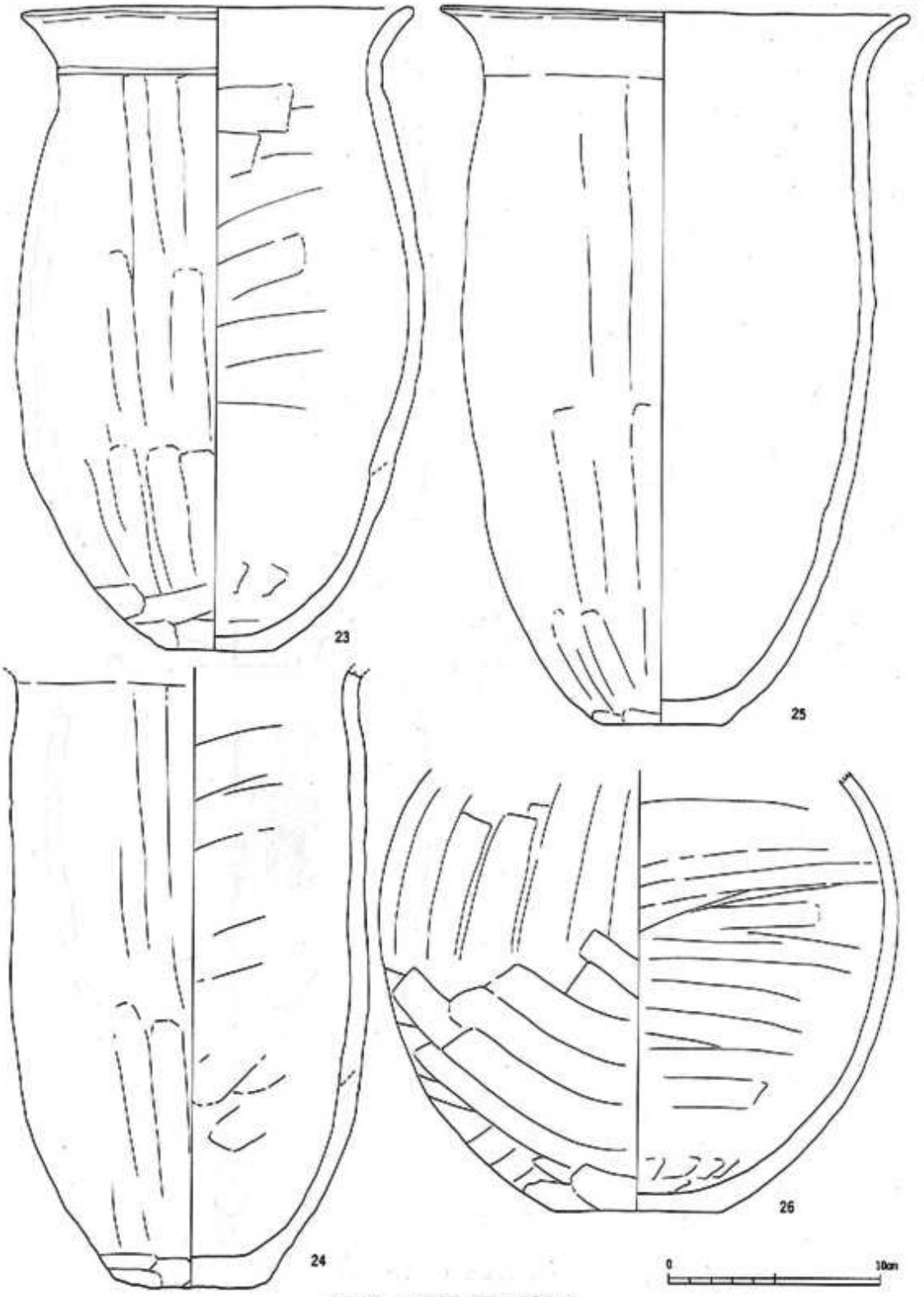
第25図　7号住居跡出土遺物(1)



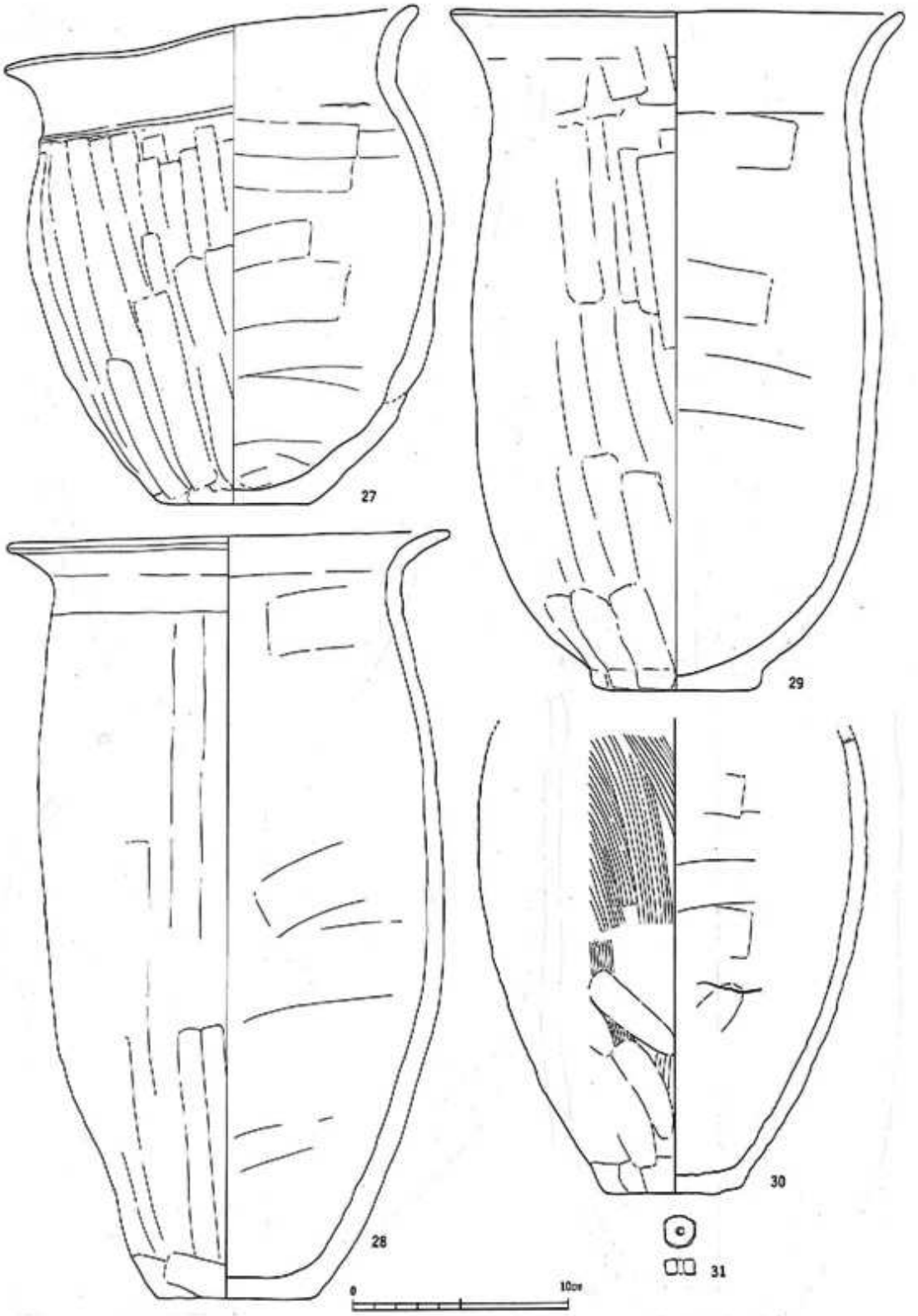
第26図　7号住居跡出土遺物(2)



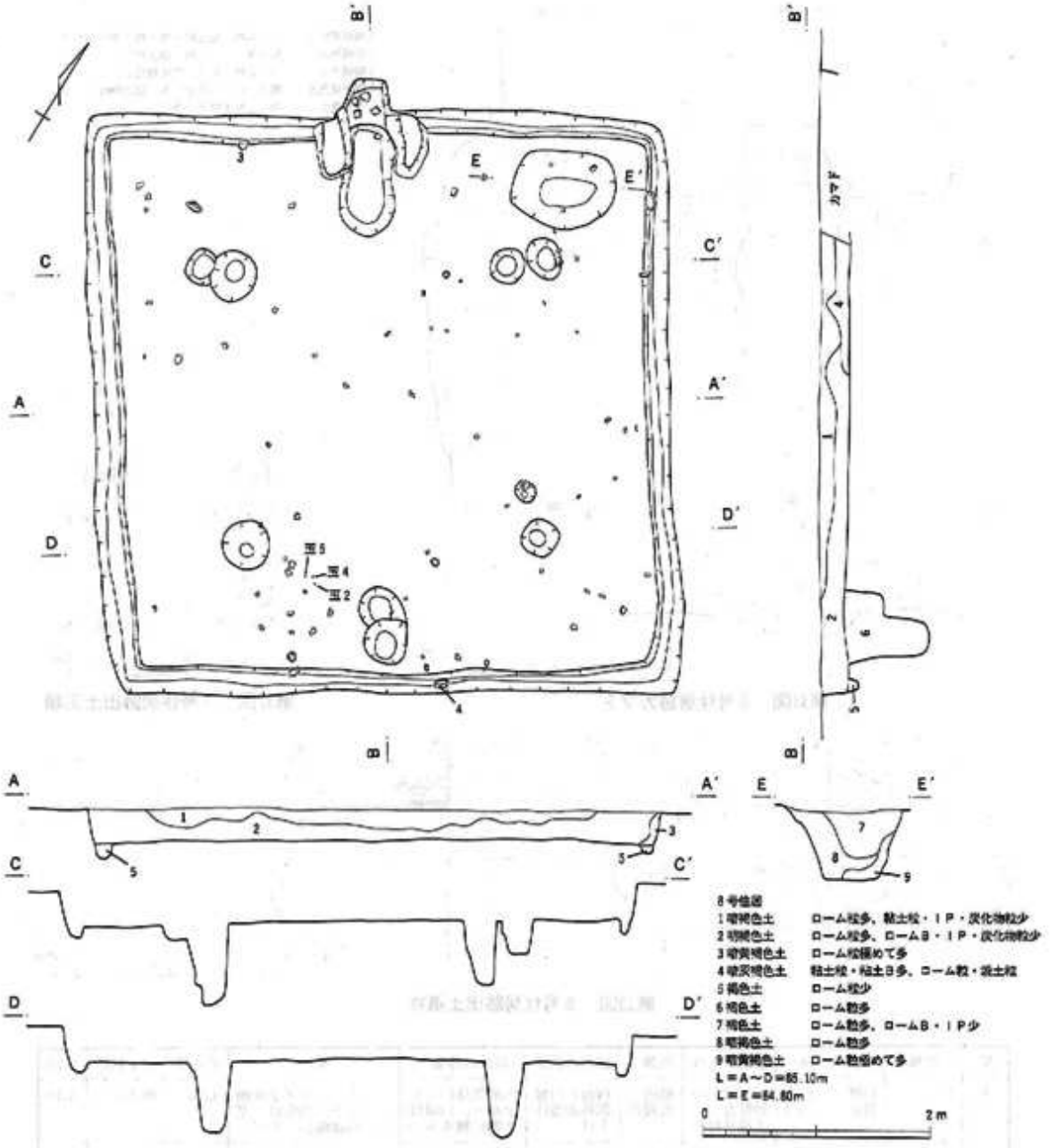
第27図　7号住居跡出土遺物(3)



第28図　7号住居跡出土遺物(4)



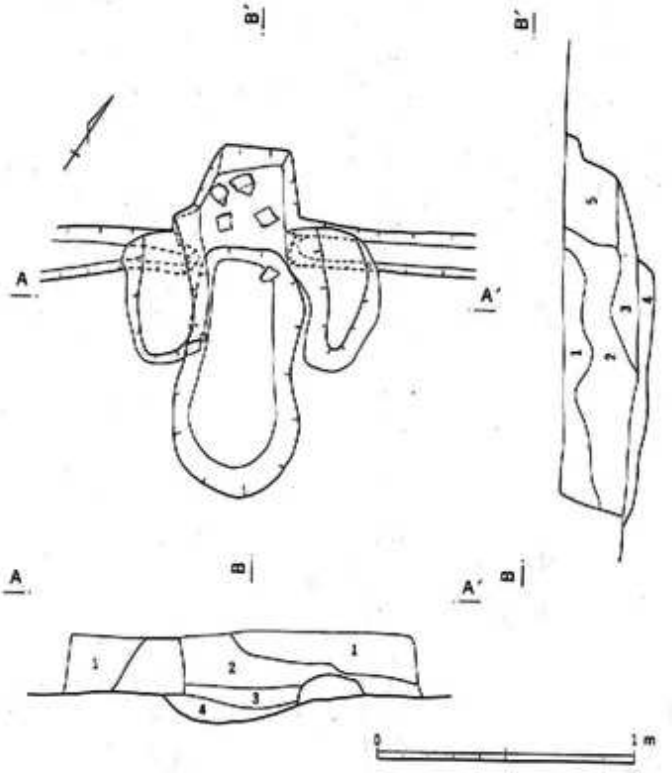
第29図　7号住居跡出土遺物(5)



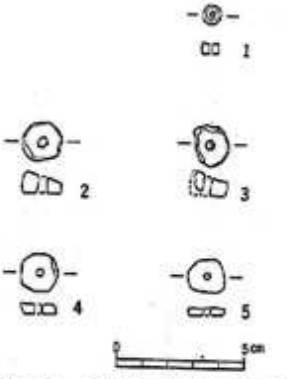
第30図　8号住居跡

8号住居跡

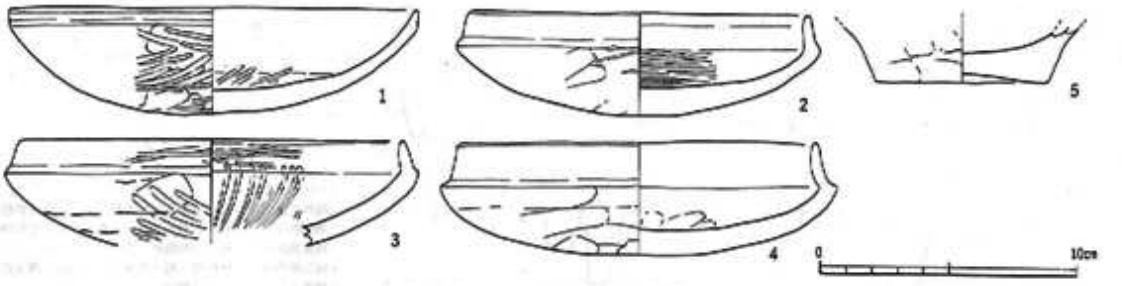
位置　調査区の南西部F—14，F—15，G—14，G—15グリッドに位置する。　**平面形**　方形　**規模**　5.0㍍×5.0㍍　**埋土の状態**　自然堆積と思われる。　**床面**　全面がローム面を直接床面としており，硬化が認められるが，とくにカマド前付近から中央部にかけて著しい。　**壁**　直線的に立ち上がり，ほぼ直立する。　**周溝**　カマド部を除いて住居を全周する。幅12～20㌢，深さ8



第31図　8号住居跡カマド



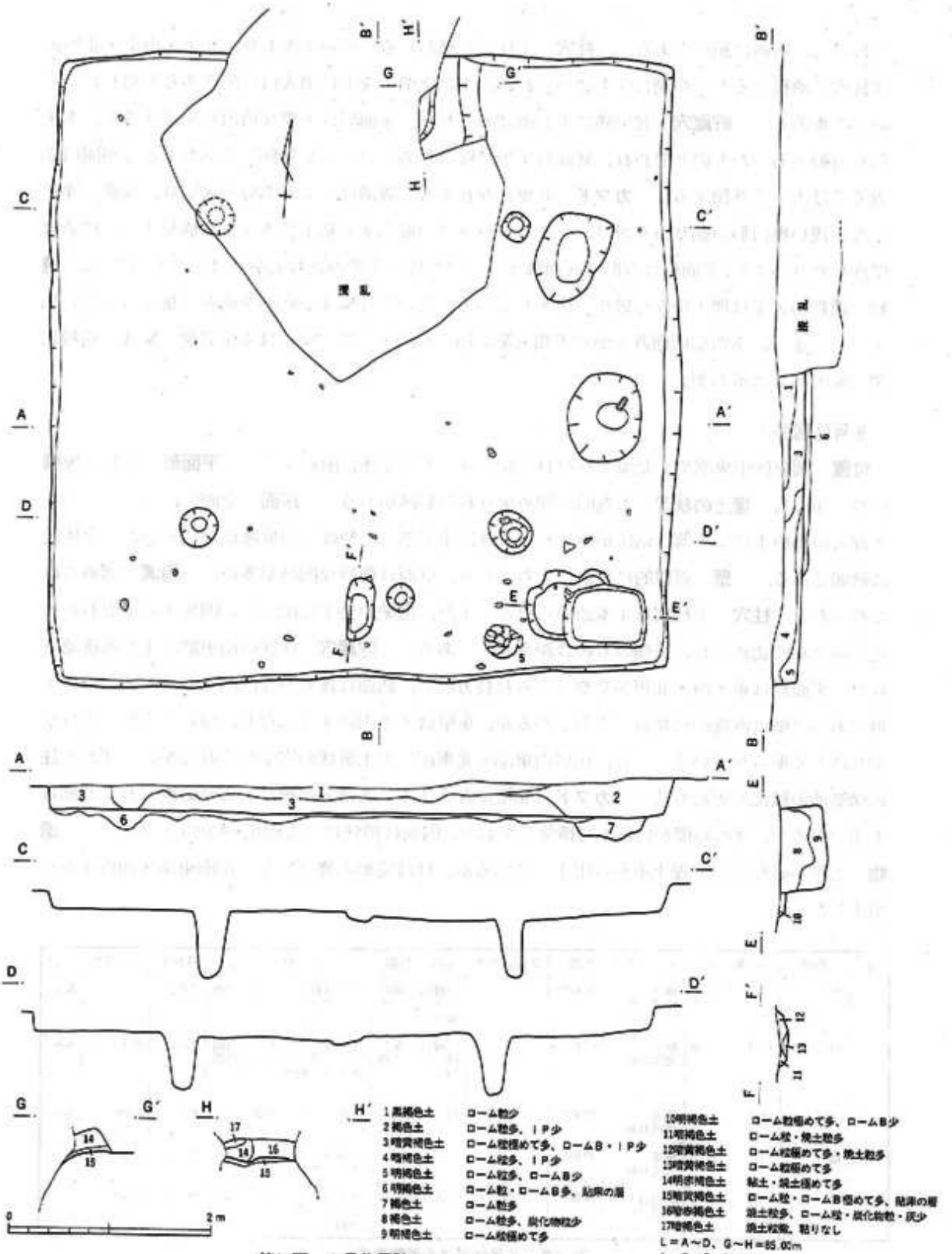
第32図　8号住居跡出土玉類



第33図　8号住居跡出土遺物

No	器種	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
1	坏	口径 15.6 器高 4.1	1%ほどの砂粒含 焼成良好	褐色～暗褐色	内面と口縁部外面漆仕上げ	内湾気味に立ち上がり，口縁は下端に稜をもつ	外面はヘラケズリ後粗くミガキ，内面はミガキ，口縁幅広くナデ	45%	埋土中	No.19
2	坏	口径 13.0 器高 3.9	微細な砂粒やや多く含 焼成良好	褐色	口縁部漆仕上げ	口縁は下端に段を持って内傾する	外面はヘラケズリ後粗いミガキ，内面ミガキ	70%	埋土中	No.11
3	坏	口径 14.8	緻密微細な砂粒含む 焼成良好	暗褐色	内面漆仕上げ	口縁は下端に段を持って内傾する	内面ミガキ，外面ナデ後ミガキ	40%	埋土中	No.2 3
4	坏	口径 13.8 器高 4.3	砂粒を含む 焼成良好	暗褐色	内面と口縁部外面漆仕上げ	口縁は下端に段を持って内傾する	外面はヘラケズリ後，粗くナデ，内面はナデ	80%	埋土中	No.1
5	甕	底径 5.9	緻密 焼成良好	淡褐色			外面はナデ，内面はナデ	破片	埋土中	No.17

第11表　8号住居跡土器観察表


A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
攪乱
0
2m
1 黒褐色土　ローム粒少
2 褐色土　ローム粒多、ＩＰ少
3 暗黄褐色土　ローム粒極めて多、ロームＢ・ＩＰ少
4 暗褐色土　ローム粒多、ＩＰ少
5 明褐色土　ローム粒多、ロームＢ少
6 明褐色土　ローム粒・ロームＢ多、貼床の層
7 褐色土　ローム粒多
8 褐色土　ローム粒多、炭化物粒少
9 明褐色土　ローム粒極めて多
10明褐色土　ローム粒極めて多、ロームＢ少
11明褐色土　ローム粒・焼土粒多
12暗黄褐色土　ローム粒極めて多・焼土粒多
13暗黄褐色土　ローム粒極めて多
14明赤褐色土　粘土・焼土極めて多
15暗黄褐色土　ローム粒・ロームＢ極めて多、貼床の層
16暗赤褐色土　焼土粒多、ローム粒・炭化物粒・灰少
17暗褐色土　焼土粒微、粘りなし
L＝A～D、G～H＝85.00m
L＝E～F＝84.80m

第34図　9号住居跡

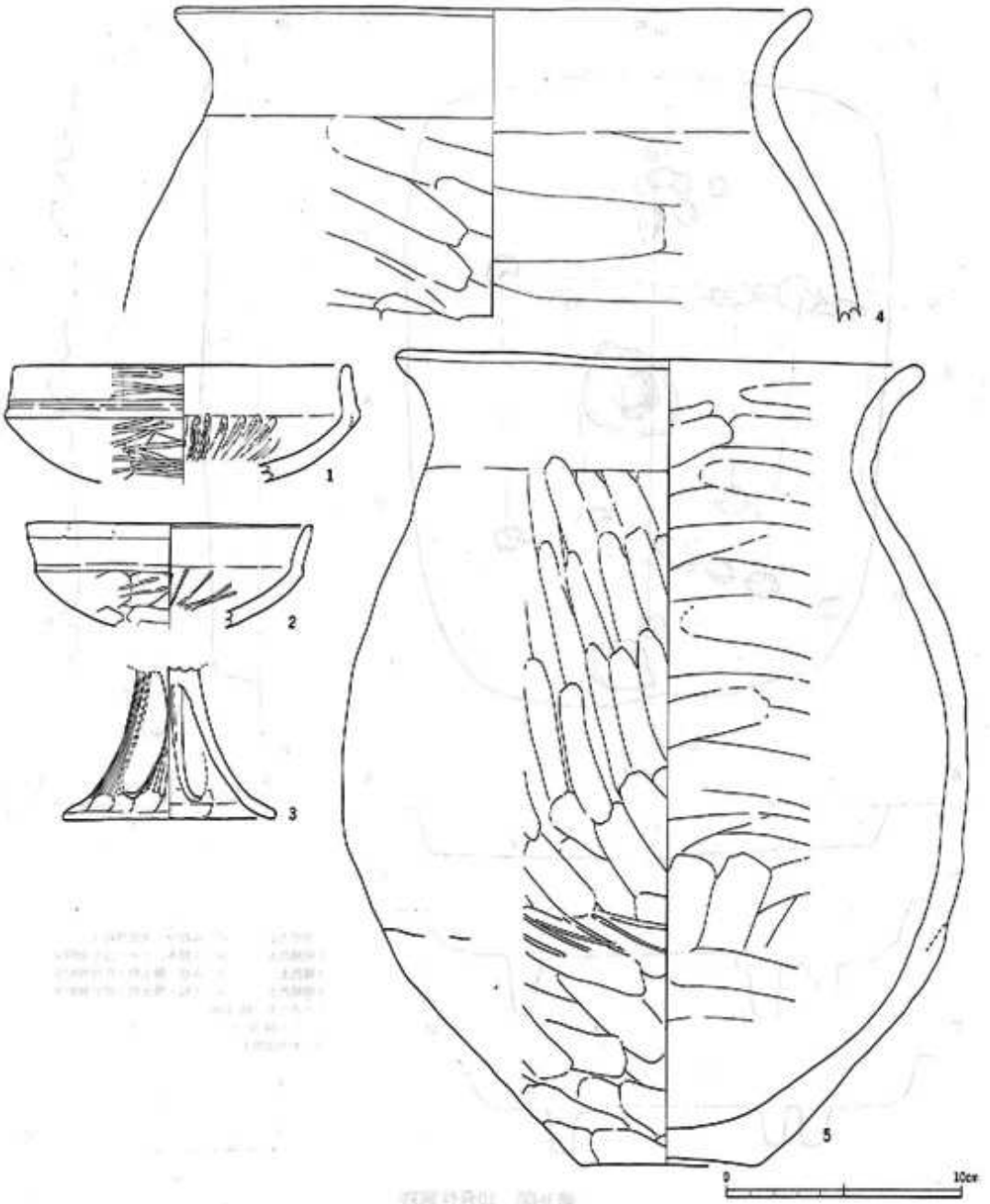
～17㌢で，断面は箱形である。　**柱穴**　主柱穴と思われるものが4本あり，北東・南東・北西の主柱穴に隣接するものが別に3本認められる。また南壁中央下に出入口に関係すると思われるものが2本ある。　**貯蔵穴**　北東隅に1か所認められた。平面形は不整な楕円形を呈するが，本来は長方形であったものと思われ，底面は平坦で壁は外湾しつつやや外傾して立ち上がるが開口部近くでは大きく外傾する。　**カマド**　北壁に存在する。周溝はカマド部分で途切れ，周溝と連続しない浅い楕円形の掘り方を設け，ロームブロックの混入する粘土でカマドを構築する。煙道は壁面に掘り込まれ，平面形は方形で底面は床面と段を持たず壁の立ち上がりはやや外傾する。　**遺物**　遺物の大半は埋土中から破片で出土している。ただし坏No.4が底部を南壁に接するように出土した。また，南西部床面直上から玉類（第32図）が出土した。No.1は安山岩製。No.3は流紋岩製。No.2,4,5は滑石製。

9号住居跡

位置　調査区中央部やや北東よりのD－10グリッドを主体に所在する。　**平面形**　方形　**規模**　6.2㍍×6.2㍍　**埋土の状況**　人為的に埋め戻された形跡がある。　**床面**　全面に，ロームブロック混入の褐色土による薄い貼床が施されており，中央部にやや硬化の痕跡があるものの，全体的に軟弱である。　**壁**　直線的に垂直に立ち上がり，壁面は微妙な凹凸が多い。　**周溝**　認められなかった。　**柱穴**　主柱穴は4本認められる。また，南壁中央下に出入口に関係すると思われる柱穴が2か所認められ，東側のものは深さ6㌢である。　**貯蔵穴**　住居の南東隅に1か所確認された。平面形は東・西・北辺がややふくらむ長方形で，底面は緩やかな凹凸をもつもののほぼ平坦である。壁は直線的に垂直に立ち上がるが，東壁はやや内傾する。なお，浅い不定形の土坑を切り込んで掘られている。また，住居内東部・北東部にも土坑状の穴が見られるが，いずれも住居構築前の攪乱と思われる。　**カマド**　北壁に存在する。大部分が攪乱により破壊されて詳細は不明であるが，きめの細かい粘土で構築しており，内面は被熱による硬化・赤色化が著しい。　**遺物**　大半が破片として埋土中から出土しているが，ほぼ完形の甕（No.5）が南東部床面直上から出土した。

No.	器種	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
1	坏	口径 14.0	緻密 焼成良好	赤褐色		口縁は下端に段をもって内傾する	外面は粗くミガキ，内面はミガキ	25%	床面	No.3
2	坏	口径 12.0	緻密 焼成良好	黒褐色		口縁は下端に段をもって外傾	外面はヘラケズリ，内面ごく一部ミガキ，口唇部外面5㍉幅ケズリ	25%	床面	No.8
3	高坏	底径 6.8	緻密 焼成良好	黒褐色		楕円形の透かし	外面ミガキ，内面ナデ	破片	床面	No.9
4	甕	口径 27.0	緻密 焼成良好	橙褐色			外面はナデ，一部にミガキ，内面はナデ	10%	床面	No.2
5	甕	口径 22.2 器高 34.0 底径 7.6	砂粒含む 焼成良好	淡褐色	外面煤付着	胴部中位に最大径	外面は上位ナデ，下位ケズリ，一部にミガキ，内面はナデ	80%	床面	No.1

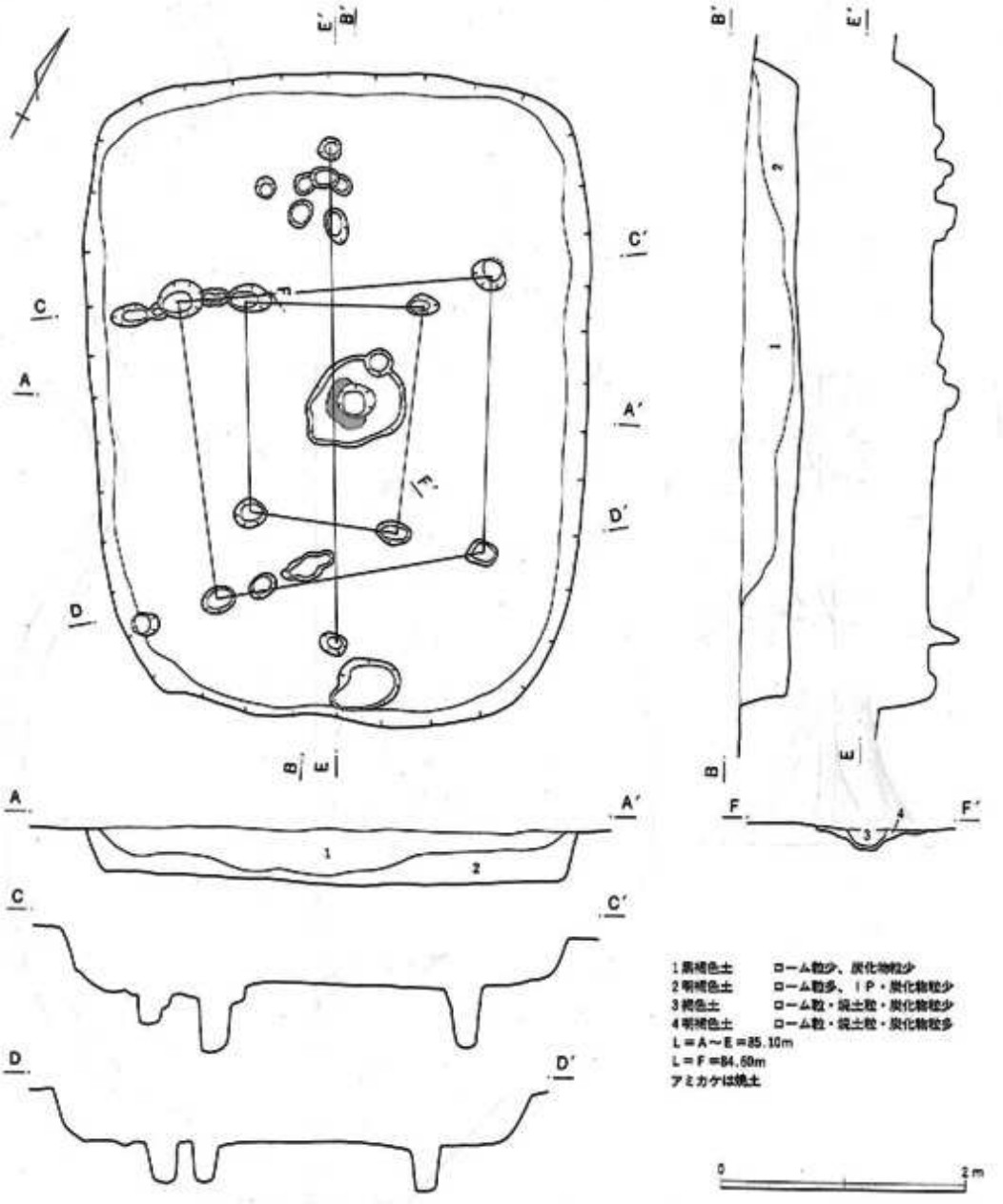
第12表　9号住居跡土器観察表



第35図　9号住居跡出土遺物

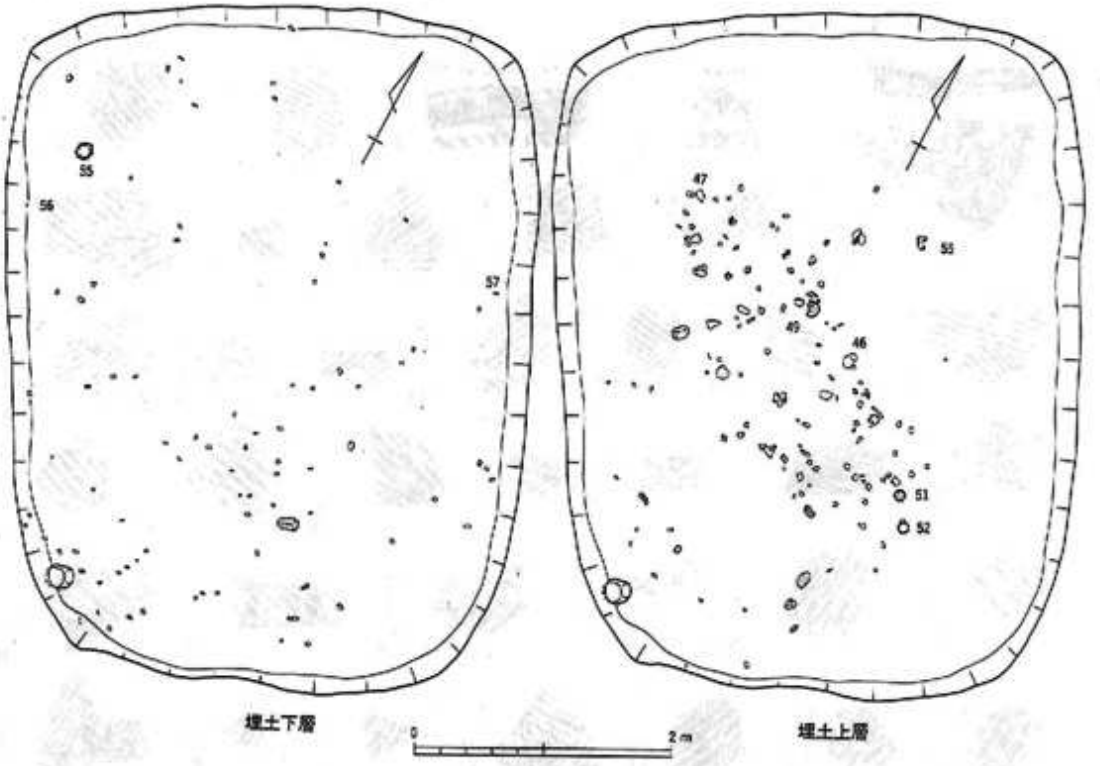
10号住居跡

位置　調査区の中央，D－12グリッドを主として，C－12，D－12グリッドに所在する。**平面形**　隅丸長方形　**規模**　5.7㍍×4.0㍍　**埋土の状況**　埋土下層は自然堆積。上層は基本的に自然堆積であるが，断続的に遺物の投棄が行われている。**床面**　ローム層を以て床面としている。



第36図　10号住居跡

凹凸が多く，住居中央が低い凹面となっており，硬くしまっている。　**壁**　全体的には内湾しつつ外傾して立ち上がるが，傾斜は一様ではなくコーナー付近での傾きが大きい反面，殆ど直立する部分もある。　**周溝**　認められなかった。　**柱穴**　多数確認されたが，二本一組のもの一組，4本一組のもの2組があると考えられる。　**土坑**　南部に平面形が不整な楕円形で深さ10㌢のものが確認された。　**炉**　中央部に1か所確認された。平面形はいびつな円形で，中央部が深く窪



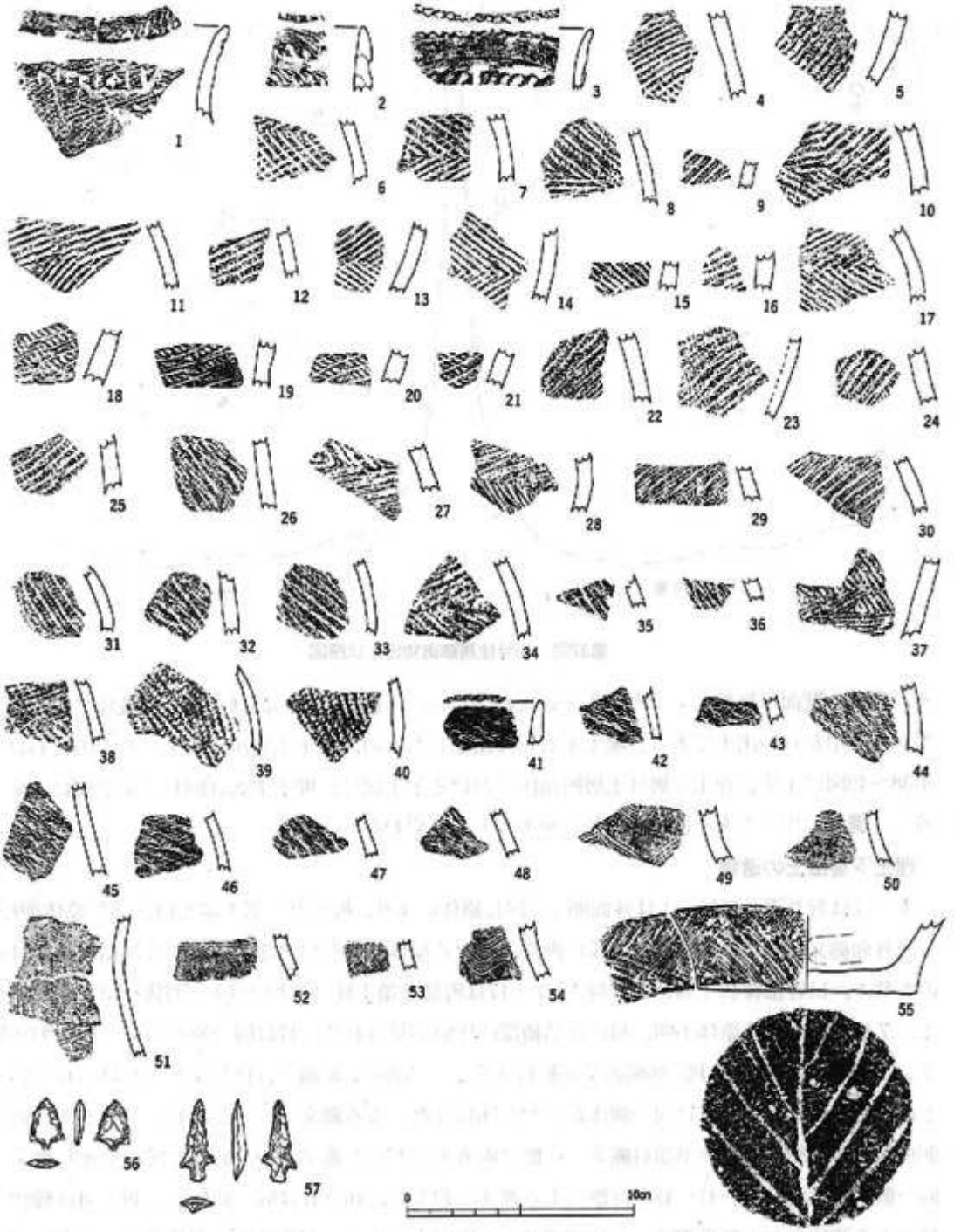
第37図　10号住居跡遺物出土状態図

み，底面・壁面は被熱により赤色化・硬化が著しい。　**遺物**　完形品はなく全て破片であり，大半が埋土中からの出土である。埋土下層から出土したもの，埋土上層から出土したものにわけて第38～40図に示す。埋土上層は土層断面図における第1層に，埋土下層は同じく第2層に対応する。　**備考**　少くとも1回の建て替えがあるものと思われる。

埋土下層出土の遺物

1～3は折り返し口縁。1は外面縄文，同じ原体により，折り返し部下端と口唇部に原体押捺，2は外面縄文，同じ原体により2段に押捺，異なる原体により口唇部に押捺。3は粘土紐貼付ののち刻み，口唇部棒状工具による刻み。4～17は附加条第1種（附加2条）。羽状を呈する物が多く，7は磨滅により原体不明，14には結縛部の圧痕が見られる。17は同一原体による擬似羽状縄文。18～21は附加条第2種。軸縄の条が蛇行するところから，軸縄には撚り戻しがかけられているものと思われる。20～21は同一個体か。22～36は反撚による縄文。22～25，および28と29は同一個体か。37～38は2段の単節斜縄文と反撚の両者をもちいた縄文。39～40は2段の単節斜縄文。同一個体と思われる。41～48は合撚による縄文。42と43，46と47は同一個体か。49～54は櫛状工具による波状文および横線文。55は底部付近。床面直上出土。胴部外面は羽状縄文，底部には木葉痕。底径は，9.7㌢。なお各土器の縄文に付いては観察表（第13表）に示す。

56,57は石鏃。いずれもチャート製で、床面直上の出土。



第38図　10号住居跡埋土下層出土遺物

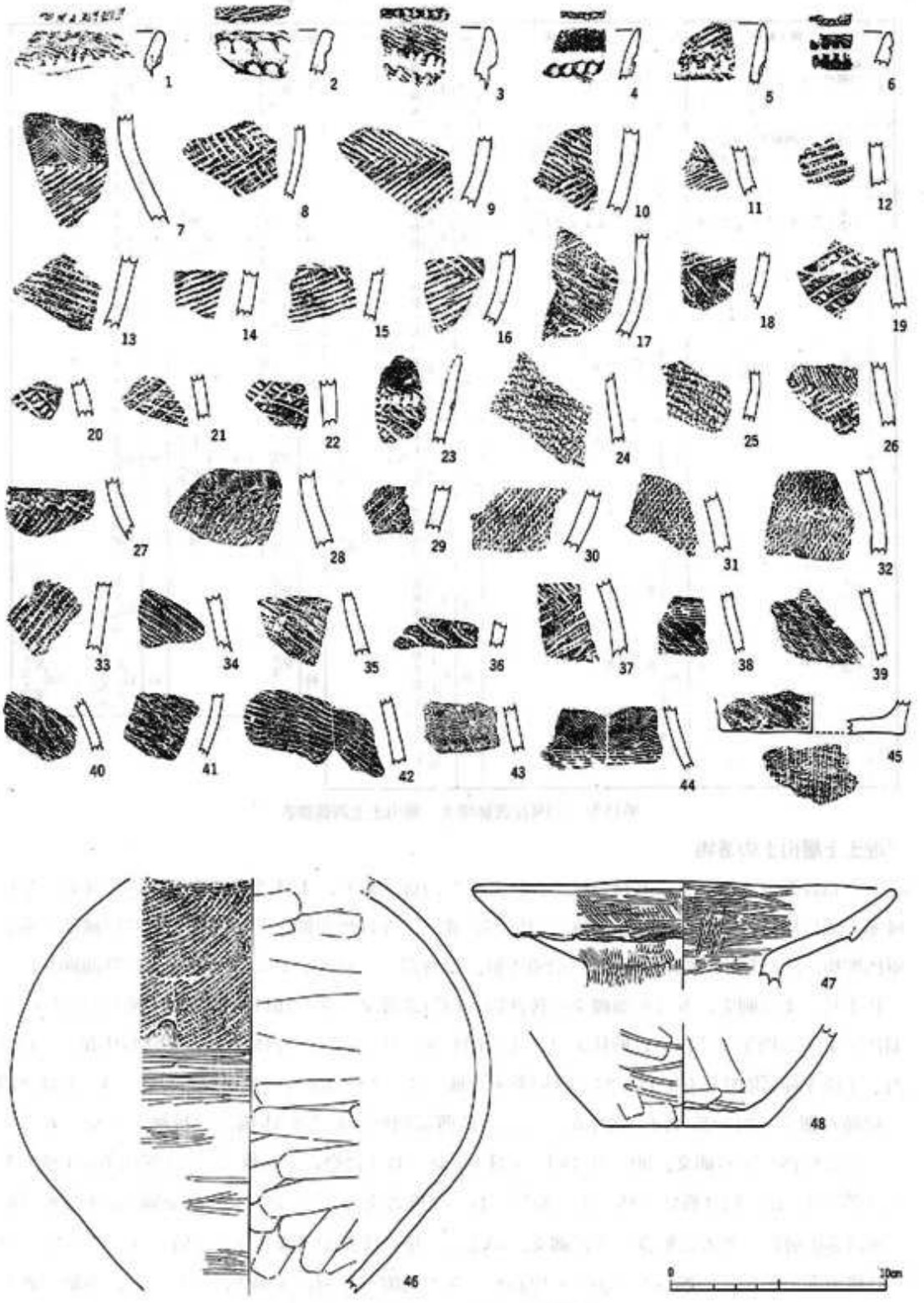
No	縄文原体	No	縄文原体	No	縄文原体	No	縄文原体	No	縄文原体
1	刺突・口唇部とも L{L{R R / L{R R	12	L{R R ÷ 2 R	22	L{L{R R / L{R R	32	R{R{L L / R{L L	41	R{L L / R{R R
2	口唇部 外面刺突 L{R R	13	L{R R + 2 L および R{L L ÷ 2 L	23	L{L{R R / L{R R	33	R{R{L L / R{L L	42	R{L L / R{R R
4	L{R R + 2 R および R{L L + 2 L	14	R{L L + 2 L および L{R R + 2 R	24	L{L{R R / L{R R	34	L{L{R R / L{R R および R{R{L L / R{L L	43	R{L L / R{R R
5	R{L L ÷ 2 R	15	R{L L ÷ 2 L	25	L{L{R R / L{R R	35	R{R{L L / R{L L	44	R{L L / R{R R
6	R{L L ÷ 2 R および L{R R ÷ 2 L	16	L{R R + 2 R	26	R{R{L L / R{L L	36	R{R{L L / R{L L	45	R{L L / R{R R
7	不明	17	L{R R + 2 R	27	R{R{L L / R{L L および L{L{R R / L{R R	37	R{L L および L{L{R R / L{R R	46	R{L L / R{R R
8	R{L L + 2 L	18	R{L L ÷ R	28	L{L{R R / L{R R および R{R{L L / R{L L	38	L{L{R R / L{R R および R{L L	47	R{L L / R{R R
9	R{L L + 2 L	19	R{L L + R	29	L{L{R R / L{R R	39	R{L L	48	R{L L / R{R R
10	L{R R ÷ 2 R	20	R{L L + R	30	L{L{R R / L{R R	40	R{L L	55	L{L{R R / L{R R および R{R{L L / R{L L
11	R{L L + 2 L	21	R{L L + R	31	R{R{L L / R{L L				

第13表　10号住居跡埋土下層出土土器観察表

埋土上層出土の遺物

1～45は弥生土器。1～6は口縁部。折り返し口縁であり，1は外面は縄文，口唇部および口縁部下端に原体押捺，2は指頭圧痕と口唇部に縄文，3は外面縄文と口唇部および口縁部下端に原体押捺，4は粘土紐貼付のうえに指頭圧痕，口唇部へラ状工具による刻み，5は外面縄文，へラ状工具による刺突，6は外面縄文の後沈線，口唇部縄文。7～16は附加条第1種(附加2条)。羽状を呈する物が多く，7は櫛状工具による山形文，16は同一の原体による擬似羽状縄文。17は附加条第1種(附加1条)。18～23は附加条第2種。23には結縛部の圧痕が見られる。24～27は2段の単節斜縄文。24と25は同一個体か。27には結縛部回転圧痕と原体端部の接触痕が見られる。28～37は反撚による縄文。30と31は同一個体か。38～41は合撚による縄文。42は附加条第1種もしくは撚糸文。43～44は櫛状工具による波状文および横線文。45は底部付近。外面縄文，底面布目痕。

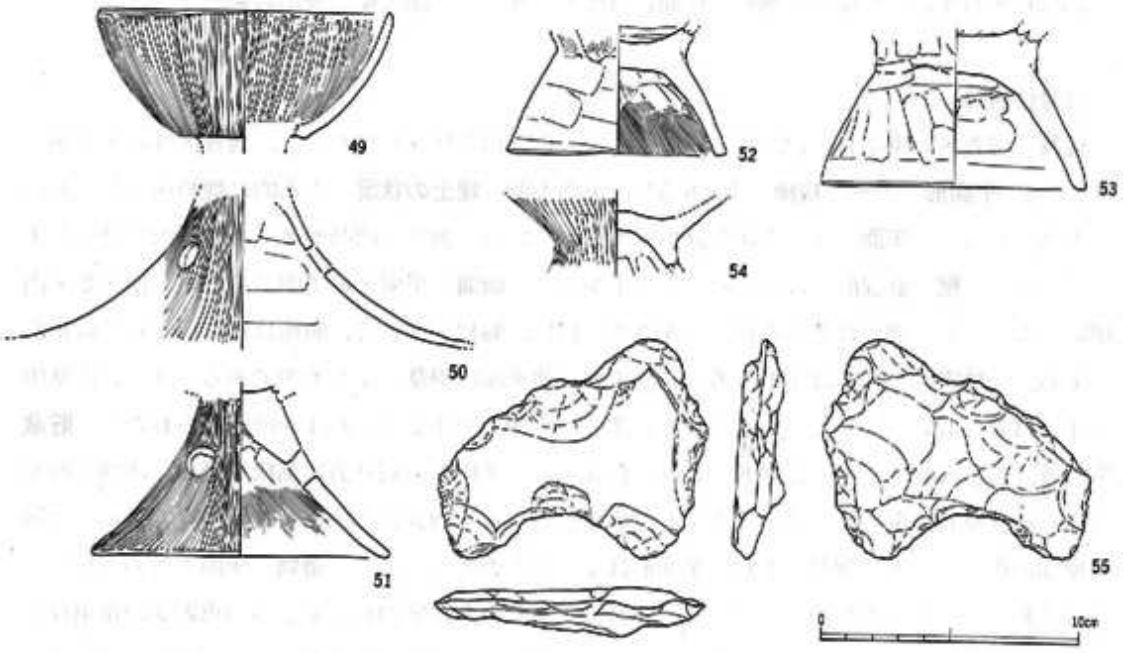
46は壺の破片。外面は胴部上半に縄文，頸部との接合部直下に簾状文，胴部下半はミガキ。内面は横方向のナデ。一部ミガキかとも思われるが不明瞭。色調は淡褐色，焼成良好，微細な砂粒を含む。外面胴部下半は剝落が著しい。



第39図　10号住居跡埋土上層出土遺物(1)

No.	縄文原体	No.	縄文原体	No.	縄文原体	No.	縄文原体	No.	縄文原体	No.	縄文原体
1	外面・刻突とも R{L/L}	10	R{L/L}+2 L および L{R/R}+2 R	17	R{L/L}+L	24	R{L/L}	31	L{L{R/R}/L{R/R}}	38	R{L/L/R/R}
2	口唇部 L{R/R}+L	11	R{L/L}+2 L および L{R/R}+2 R	18	L{R/R}+L	25	R{L/L}	32	L{L{R/R}/L{R/R}}	39	R{L/L/R/R}
3	外面・刻突・口唇部とも R{L/L}	12	L{R/R}+2 R	19	R{L/L}+R	26	L{R/R}	33	L{L{R/R}/L{R/R}}	40	R{L/L/R/R}
5	口唇部 L{R/R}+2 R 胴部 R{L/L}+2 L	13	R{L/L}+2 L	20	L{R/R}+L	27	L{R/R}	34	R{R{L/L}/R{L/L}}	41	R{L/L/R/R}
6	口唇部 L{R/R} 外面 R{L/L}	14	L{R/R}+2 R	21	R{L/L}+L	28	L{L{R/R}/L{R/R}}	35	R{R{L/L}/R{L/L}}	42	R{ℓ/ℓ}+L{r/r}
7	L{R/R}+2 R	15	L{R/R}+2 R	22	R{L/L}+L	29	L{R{L/R}/R{L/R}}	36	R{R{L/L}/R{L/L}}	45	R{L/L/R/R}
8	R{L/L}+2 L および L{R/R}+2 R	16	L{R/R}+2 R	23	R{L/L}+L	30	L{L{R/R}/L{R/R}}	37	R{R{L/L}/R{L/L}} および L{L{R/R}/L{R/R}}	46	L{R/R}
9	R{L/L}+2 L および L{R/R}+2 R										

第14表　10号住居跡埋土上層出土土器観察表(1)



第40図　10号住居跡埋土上層出土遺物(2)

No.	器種	法量 (cm)	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
47	壺	口径 19.7	緻密	淡褐色		短く立ち上がった頸部から，外面中位に段をもつ口縁部が朝顔形にひらく	外面ハケメ口唇部粗くミガキ，内面はハケメ後ミガキ，口唇端部は面をもちナデ	20%	埋土中	No.10 14
48	壺	底径 7.6	砂粒を含む	褐色	外面煤付着		外面ヘラケズリ後粗いミガキ，内面粗いナデ	10%	埋土中	No.18
49	高坏	口径 11.2	緻密 1～2㎜の砂粒少し含 焼成良好	淡褐色～橙褐色		坏部下端に稜をもち内湾気味に立ち上がる，口縁端に稜。	外面はミガキ，内面にミガキ	50%	埋土中	No.3 10
50	高坏		緻密 焼成良好	淡褐色～橙褐色		脚部は大きく広がり3孔を有する	外面にミガキ，内面にナデ	20%	埋土中	
51	高坏	底径 11.5	微細な砂粒含む 焼成良好	橙褐色		3孔	外面にミガキ，内面にハケメ	50%	埋土中	No.87
52	台付甕	底径 8.5	微細な砂粒多く含 焼成良好	橙褐色		台部はやや内湾気味	台部外面ナデ，内面ハケメ，	10%	埋土中	No.1
53	台付甕	底径 10.2	砂粒を含む 焼成良好	橙褐色		台部はやや内湾気味	台部外面ナデ，内面ナデ	10%	埋土中	No.3
54	台付甕		砂粒多く含む 焼成良好	赤褐色			内面はユビナデ，外面ハケメ	5%	埋土中	No.58

第15表　10号住居跡埋土上層土器観察表(2)

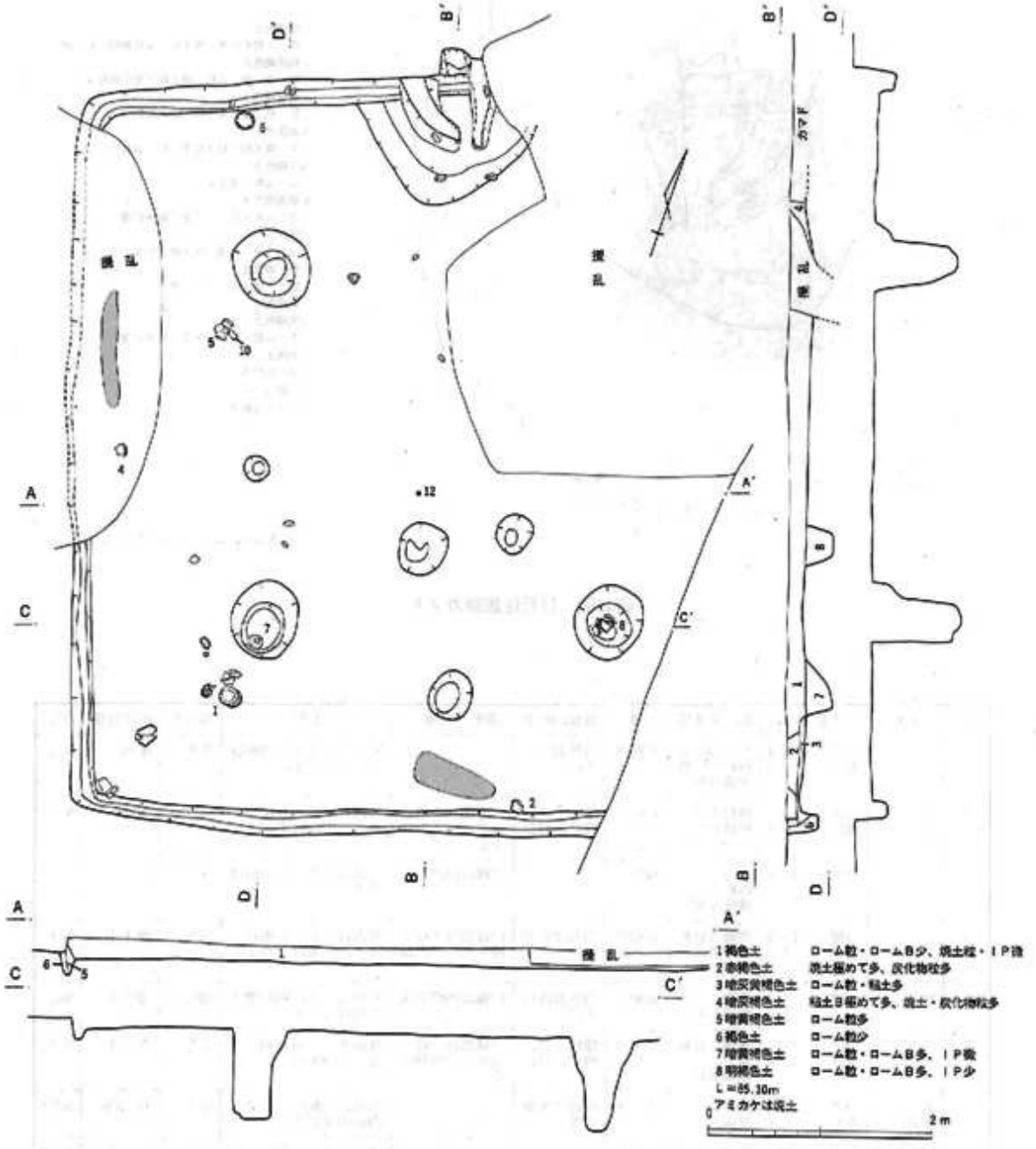
なお1～46の縄文に付いては観察表（第14表）に示す。

47～54については第15表に示すとおりである。

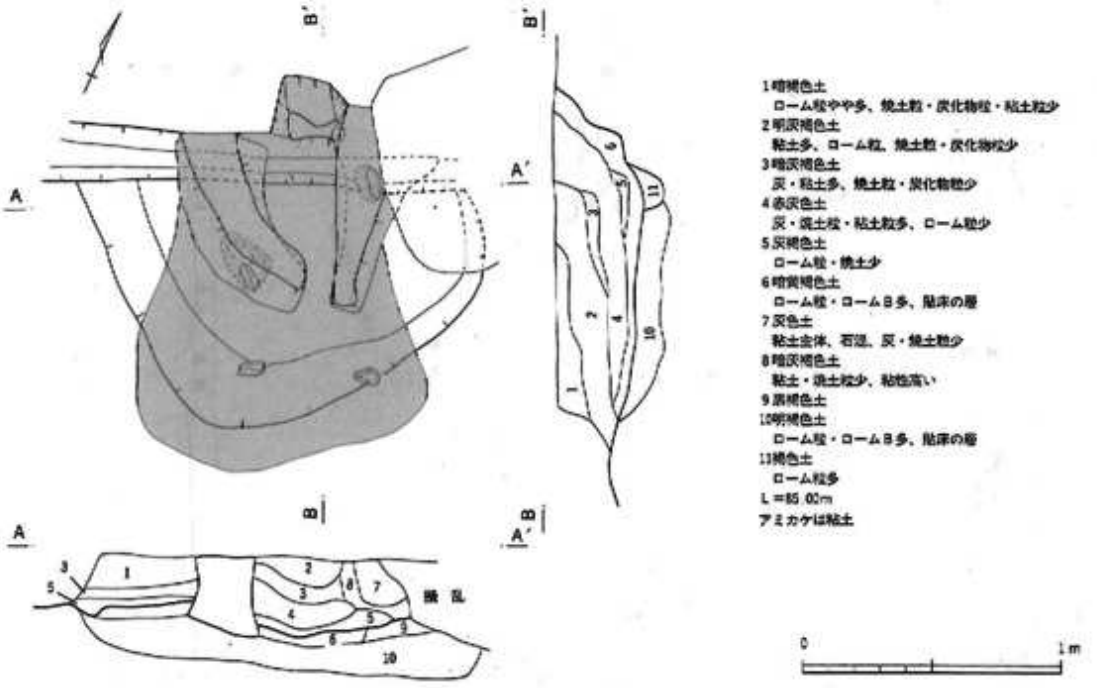
55は打製石斧，いわゆる分銅形で片面に自然面を残し，一部欠損。安山岩製。

11号住居跡

位置　調査区の東部B－12，B－13，C－12，C－13グリッドに所在し，調査区外にまたがっている。 **平面形**　方形　**規模**　南北6.5㍍　東西不明　**埋土の状況**　人為的に埋め戻されたものと考えられる。　**床面**　ローム面を直接床面としている。細かい凹凸が多く，全体的に硬くしまっている。　**壁**　直線的にほぼ垂直に立ち上がる。　**周溝**　東壁下は不明であるが，南・北・西壁の少なくとも一部には認められた。深さ12～15㌢，幅13～20㌢で，断面はU字形もしくは箱形である。　**柱穴**　主柱穴は4本と考えられるが，北東部は攪乱により不明である。また，南壁中央下には深さ32㌢の小ピットがあるほか，深さ15～20㌢の小ピットが4か所認められた。　**貯蔵穴**　確認できなかった。　**カマド**　北壁に存在する。半円形の掘り方に貼床を施し，周溝を掘りこんだ後河原石の混入する粘土でカマドを構築している。内面は赤色化・硬化が見られる。煙道は壁面の中位から上に掘りこまれ，平面形はくずれた方形である。　**遺物**　床面上から完形もしくは完形にちかい土器が出土している。(No.1,2) また南西柱穴内からNo.7の須恵器が，南東柱穴内からNo.8の土師器が出土した。No.9,10はカマド支脚、2次焼成をうけている。No.12,13は白玉、いずれも滑石製。


A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
撹乱
カマド
1 褐色土　ローム粒・ロームB少、焼土粒・IP微
2 赤褐色土　焼土極めて多、炭化物粒多
3 暗灰黄褐色土　ローム粒・稲土多
4 暗灰褐色土　稲土B極めて多、焼土・炭化物粒多
5 暗黄褐色土　ローム粒多
6 褐色土　ローム粒少
7 暗黄褐色土　ローム粒・ロームB多、IP微
8 明褐色土　ローム粒・ロームB多、IP少
L＝85.10m
アミカケは焼土
0
2m

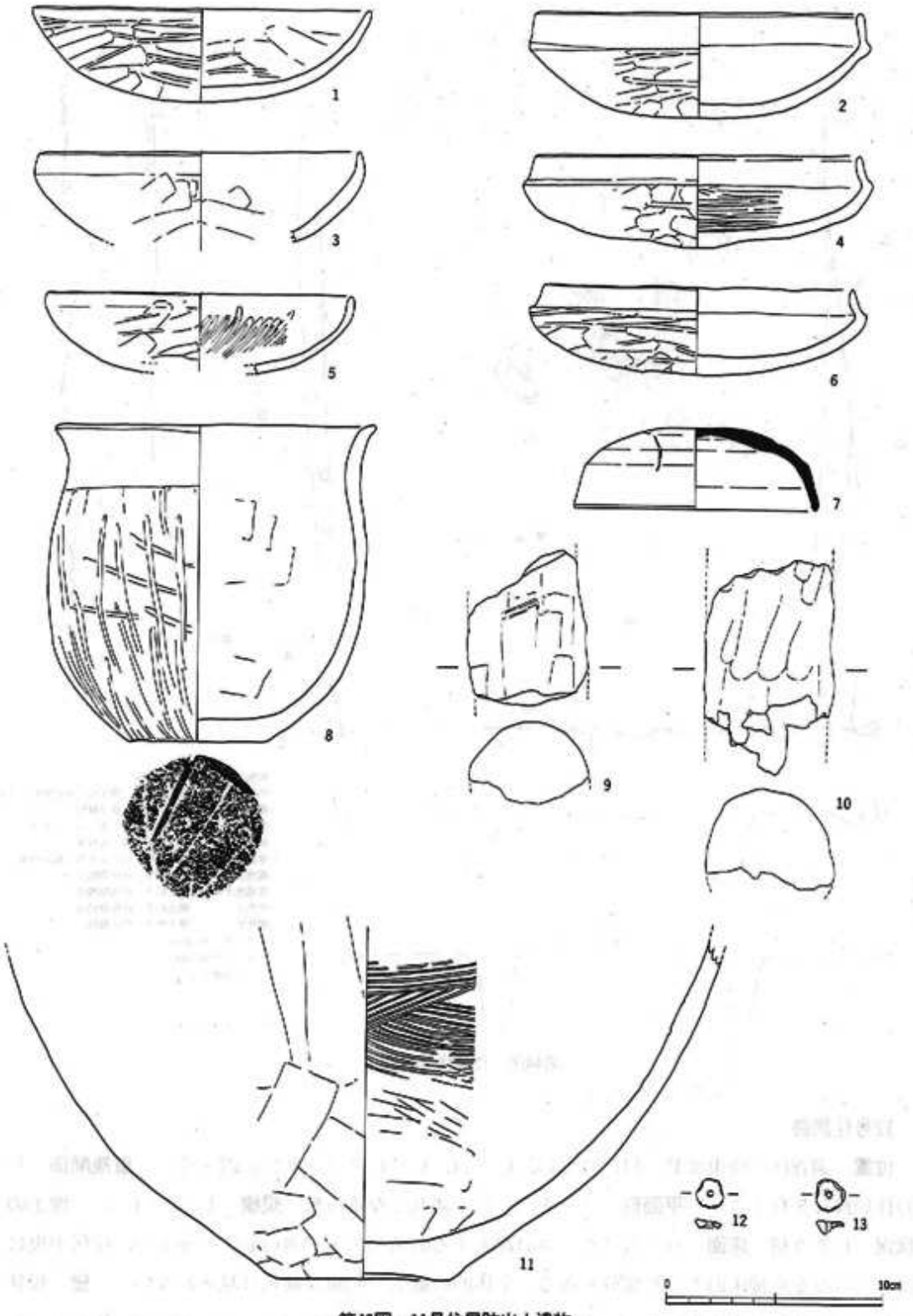
第41図　11号住居跡



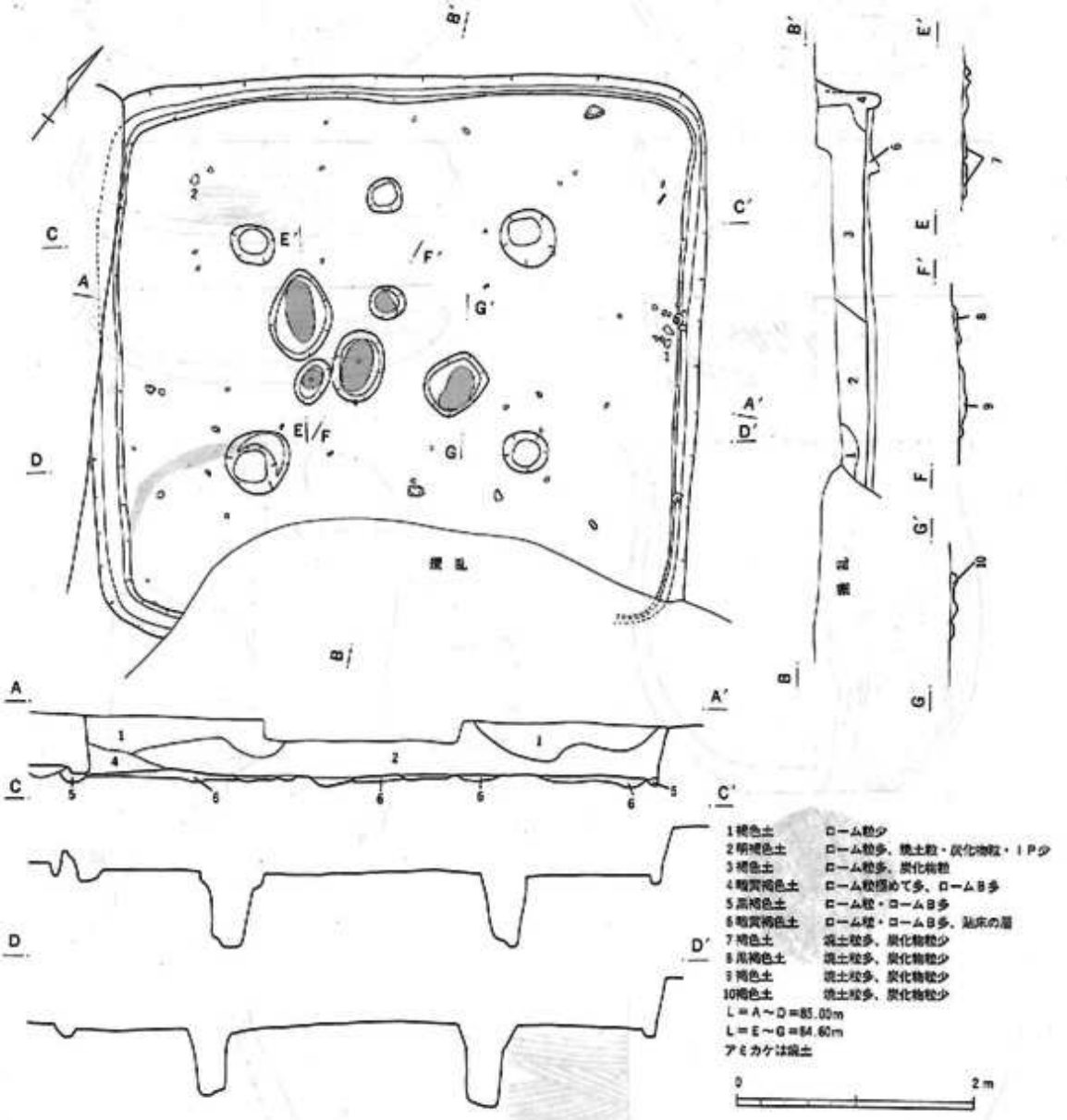
第42図　11号住居跡カマド

No	器種	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
1	坏	口径 15.4 器高 4.3	1～2$^{3}/_{4}$の砂粒少し含 焼成良好	暗褐色	内外面漆仕上げ		外面はミガキ，内面はナデ，ミガキ	完形	床面	No5
2	坏	口径 15.2 器高 6.8	砂粒を含む 焼成良好	暗褐色	漆仕上げ，特に口縁部	口縁部は下端に段をもって内傾する	外面はナデのち粗いミガキ，内面はナデ	40%	床面	No7
3	坏	口径 14.8	1～2$^{3}/_{4}$の砂粒少し含 焼成良好	褐色		口縁に内湾する	外面はケズリ，内面はナデ	20%	カマド	
4	坏	口径 15.0 器高 4.2	微細な砂粒やや多く含 焼成良好	暗褐色	内面漆仕上げ	口縁部は下端に段をもって内傾する	外面はナデのち粗いミガキ，内面はミガキ	70%	堆土中	No4
5	坏	口径 14.0	緻密 焼成良好	暗褐色	内外面漆仕上げ	口縁は内湾気味	外面はナデ，粗い磨き内面はミガキ	20%	堆土中	No2
6	坏	口径 14.4 器高 4.0	微細な砂粒含む 焼成良好	暗褐色	漆仕上げ，特に口縁部	口縁部は下端に段もって内傾する	外面ケズリのち粗いミガキ，内面はナデ	完形	堆土中	No1
7	甕 須恵器	口径 11.2 器高 3.7	緻密 焼成良好	青灰色	外面に黒斑 刻線		外面に回転ヘラケズリ内面中央にナデ	完形	柱穴内	No21
8	甕	口径 14.8 器高 14.4 底径 6.3	砂粒やや多く含む 焼成良好	淡褐色			外面はナデ後粗いミガキ内面はナデ，木葉底	90%	柱穴内	No22
11	甕	底径 8.4	砂粒やや多く含む 焼成良好	褐色			外面はケズリ後軽くナデ，内面はハケメ後ナデ	10%	堆土中	No 29

第16表　11号住居跡土器観察表



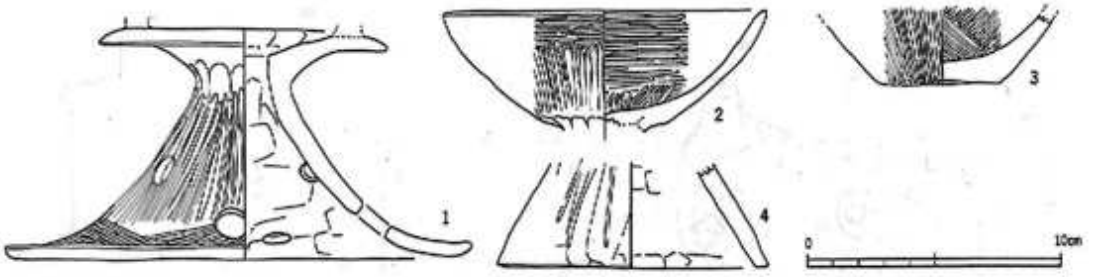
第43図　11号住居跡出土遺物



第44図　12号住居跡

12号住居跡

位置　調査区の南東部B－14，B－15，C－14，C－15グリッドに位置する。　**重複関係**　13号住居跡に先行する。　**平面形**　コーナーがやや隅丸となる方形　**規模**　4.1㍍×4.5㍍　**埋土の状況**　自然堆積　**床面**　ロームブロックの混入する暗黄褐色土で薄い貼床を施すが，住居中央にはローム面を直接床面とした部分もある。全体的に軟弱で明瞭な硬化は見られない。　**壁**　現状ではやや外傾して立ち上がるが，本来は直線的にほぼ垂直に立ち上がっていたものと思われる。



第45図　12号住居跡出土遺物

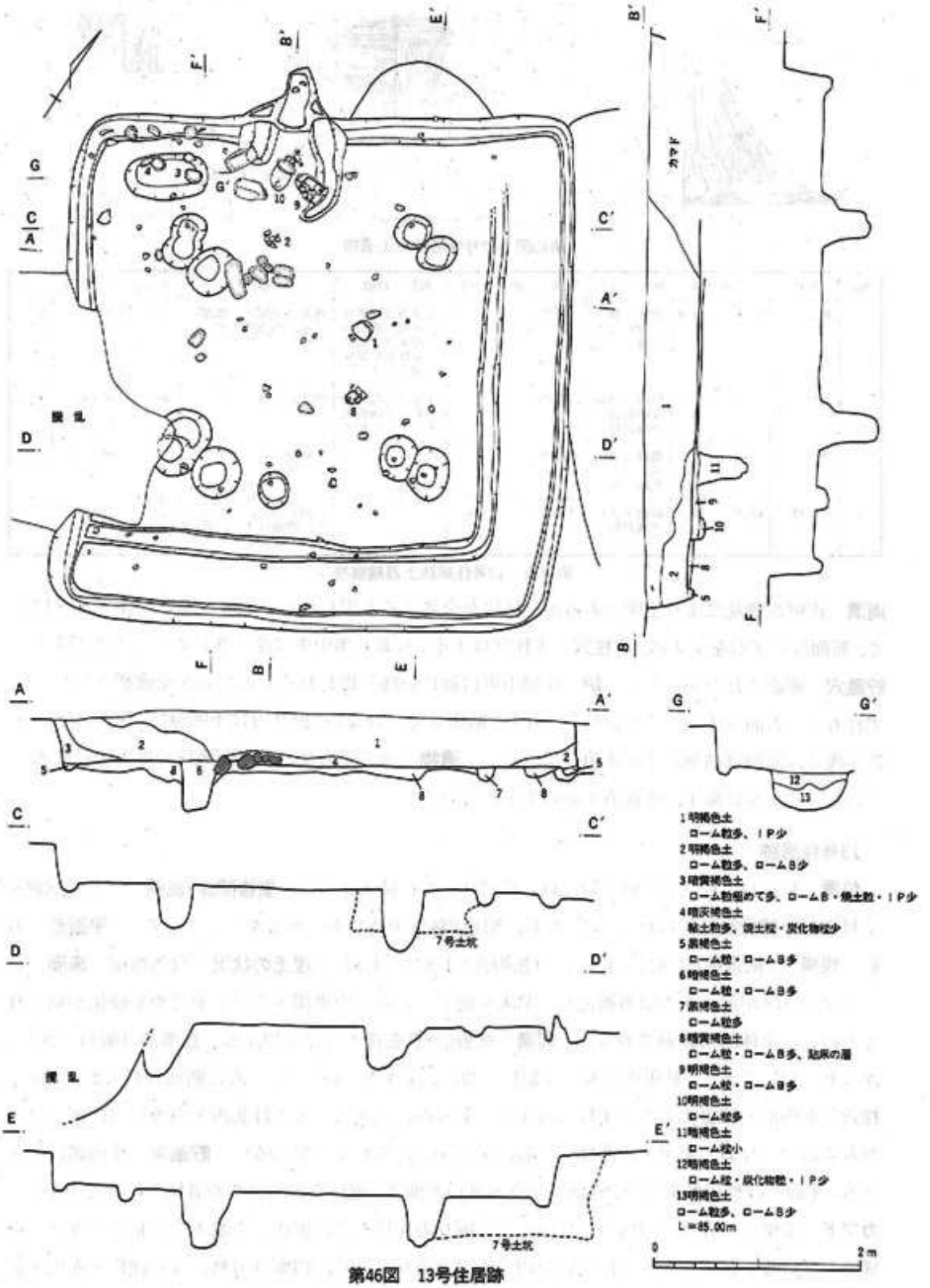
No.	器種	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
1	器台	底径　18.0	緻密　微細な砂粒含む焼成良好	淡褐色		受部下端に鍔状の突起，脚部はハの字状で裾部で反り返り気味に開く，8孔	外面は受部ナデ脚部ミガキ，内面はナデ	80%	床面	No.1
2	高坏	口径　12.5	緻密　微粗な砂粒含む焼成良好	淡褐色		坏部は下端に稜をもって内湾気味にたち上がる	内外面ともミガキ	30%	埋土中	No.11
3	甕	底径　4.7	微細な砂粒含む焼成良好	淡褐色			内外面ともミガキ	5%	埋土中	No.7 30
4	台付甕	底径　10.5	砂粒を含む焼成良好	淡褐色			外面はナデ，一部ミガキ，内面はナデ，底面はヘラで切る	5%	埋土中	

第17表　12号住居跡土器観察表

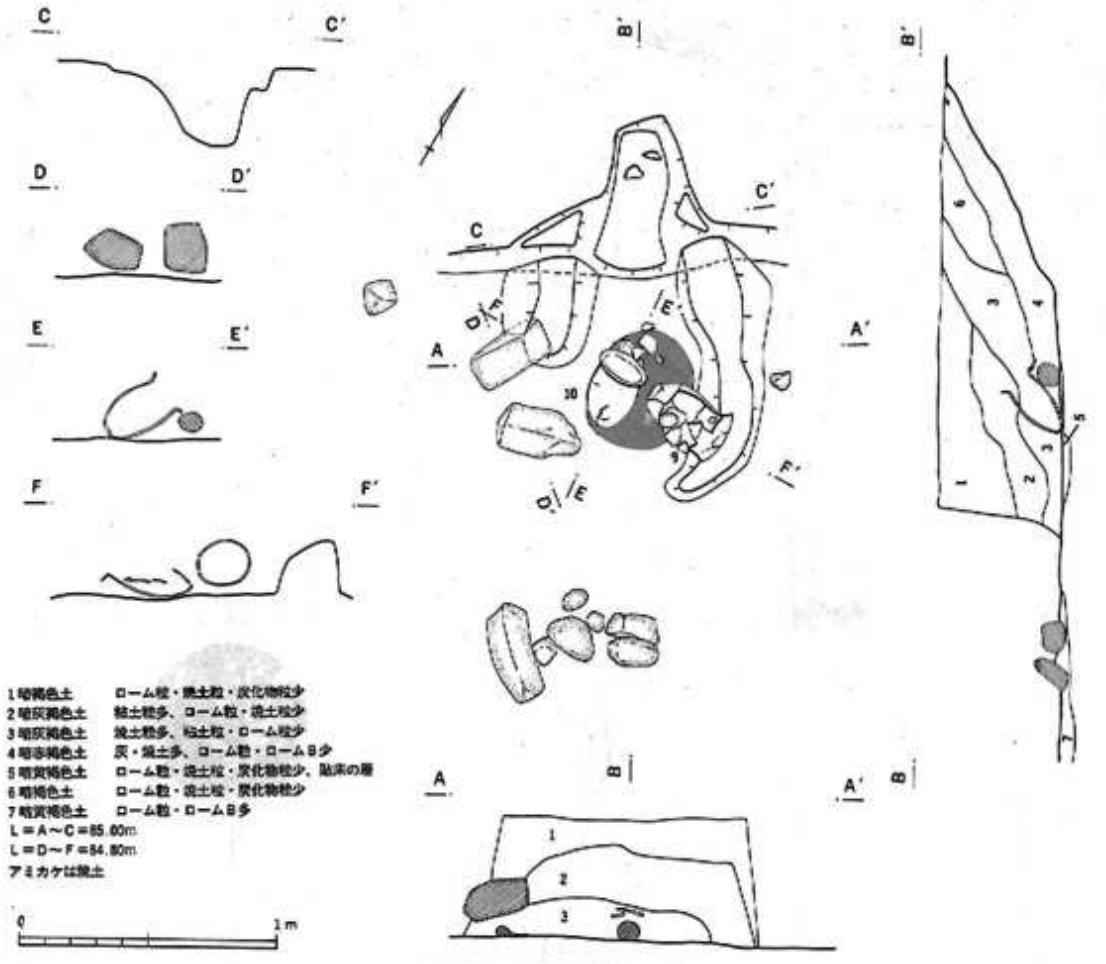
周溝　南壁が攪乱により不明であるが，住居を全周すると思われる。幅8～22㌢，深さ4～12㌢で，断面はU字形を呈する。　**柱穴**　主柱穴は4本。なお北部中央に深さ9㌢の小ピットがある。**貯蔵穴**　確認されなかった。　**炉**　住居中央付近に炉跡と思われるものが5か所確認された。いずれもローム面を床面とする部分に存在し，貼床部分にはない。掘り方は不明瞭で，深さは4～6㌢と浅く，底面は被熱により赤色を呈する。　**遺物**　僅少であり，大半が破片で埋土中に混入している。わずかにNo.1が床面直上から出土している。

13号住居跡

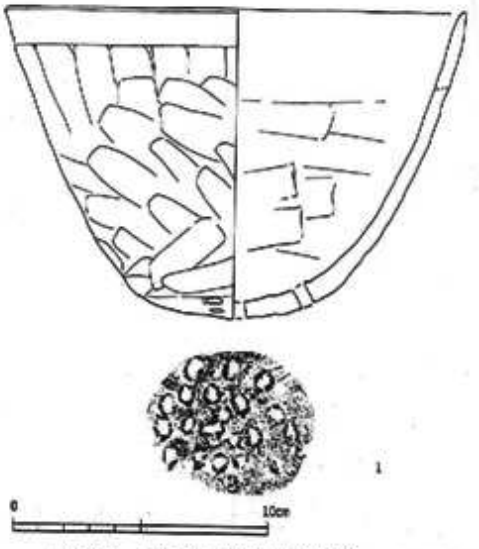
位置　C－14，C－15，D—14，D—15グリッドに位置する。　**重複関係・拡張**　12号住居跡・7号土坑の埋没後に作られている。なお，当住居跡は東及び南に拡張を行っている。　**平面形**　方形　**規模**　（拡張前）4.0㍍×4.1㍍　（拡張後）4.8㍍×4.8㍍　**埋土の状況**　自然堆積　**床面**　ロームブロックが混入する暗黄褐色土で貼床を施している。中央部～カマド前でやや硬化が見られるものの，全体的に軟弱である。　**周溝**　拡張前・拡張後ともに全周する。拡張前は幅11～20㌢，深さ6～13㌢であり，拡張後のものは幅15～20㌢，深さ4～15㌢で，ともに断面はU字形である。**柱穴**　拡張前・拡張後ともに主柱穴は4本であるが，拡張前のものは北西・南西柱穴に掘り替えがみられる。なお，南東・南西柱穴の間に深さ50㌢の小ピットがある。　**貯蔵穴**　北西隅に所在する。平面形は楕円形を呈し，底面は中央が低い凹面で，壁は直線的にやや外傾して立ち上がる。**カマド**　北壁に所在する。床面にはほとんど掘り方を持たず，黒色土の混入する粘土でカマドを構築している。補強材として凝灰岩の切石が用いられており，内面は被熱による硬化・赤色化が


カマド
撹乱
7号土坑
1 明褐色土
ローム粒多、ＩＰ少
2 明褐色土
ローム粒多、ロームＢ少
3 暗黄褐色土
ローム粒極めて多、ロームＢ・焼土粒・ＩＰ少
4 暗灰褐色土
粘土粒多、焼土粒・炭化物粒少
5 黒褐色土
ローム粒・ロームＢ多
6 暗褐色土
ローム粒・ロームＢ多
7 黒褐色土
ローム粒多
8 暗黄褐色土
ローム粒・ロームＢ多、貼床の層
9 明褐色土
ローム粒・ロームＢ多
10 明褐色土
ローム粒多
11 暗褐色土
ローム粒小
12 暗褐色土
ローム粒・炭化物粒・ＩＰ少
13 明褐色土
ローム粒多、ロームＢ少
Ｌ＝85.00m
0
2m

第46図　13号住居跡

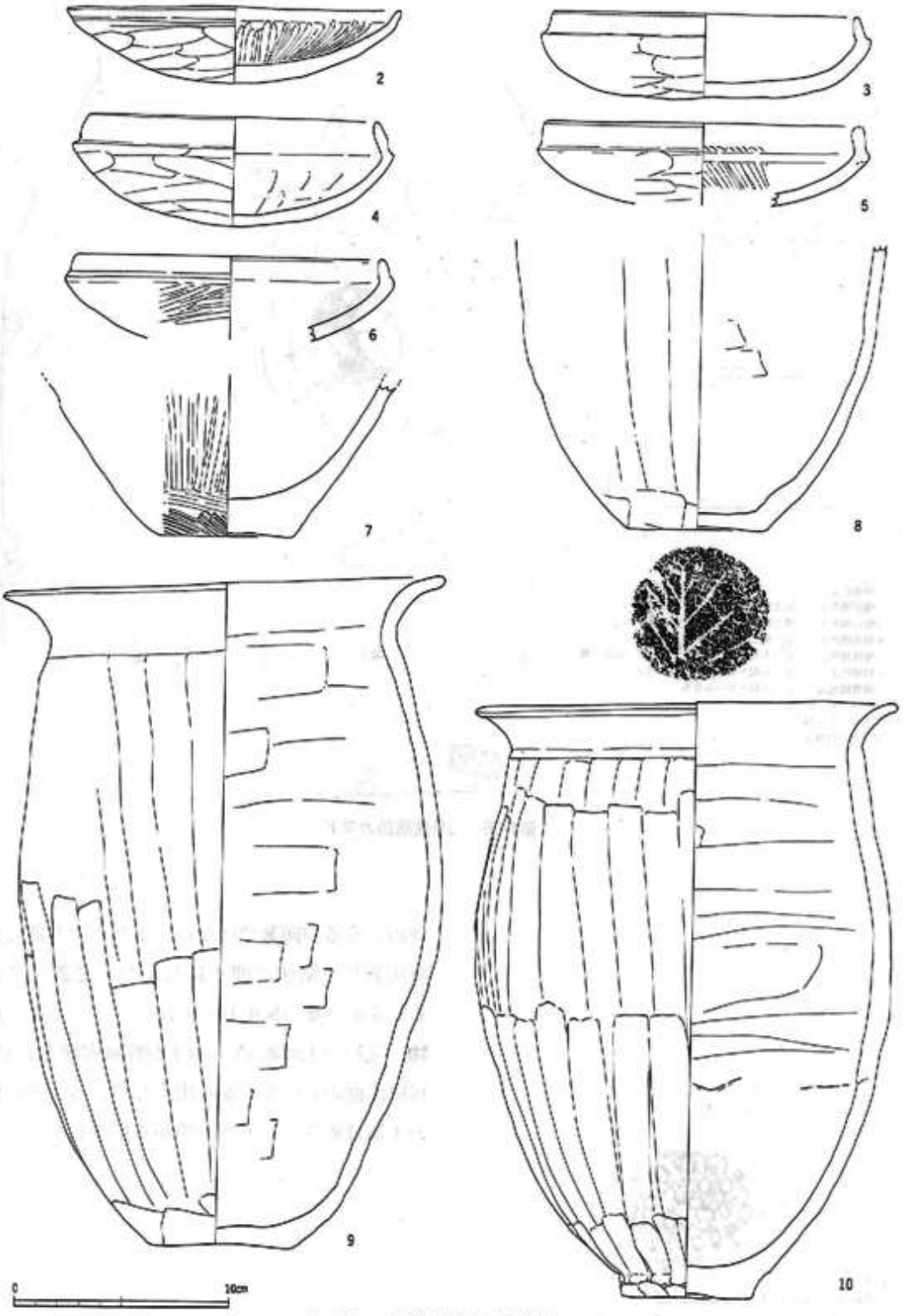


第47図　13号住居跡カマド



第48図　13号住居跡出土遺物(1)

認められるが顕著ではない。またカマド前には凝灰岩片を貼床に埋め込むかたちで置いている。完形の甕（№9,10）が出土している。　**遺物**　完形の土師器（№2，4）が貯蔵穴埋土上（住居跡床面のレベル）から出土している。その他の土器は破片として埋土中から出土した。



第49図　13号住居跡出土遺物(2)

No.	器種	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
1	壺	口径 17.8 器高 11.8	砂粒多く含 焼成良好	淡褐色	煤付着	底の中心をそれて18孔を穿つ	外面はナデ，内面は面はナデ	80%	埋土中	No.3
2	坏	口径 15.4 器高 3.5	微細な砂粒含む 焼成良好	暗褐色	内面漆仕上げ	口縁部に浅い段をもつ	外面はナデ，内面はミガキ	完形	埋土中	No.15
3	坏	口径 14.0 器高 4.0	緻密 微細な砂粒含む 焼成良好	暗褐色	外面漆仕上げ	口縁部は下端に段をもって内傾する	外面はナデ，内面はナデ	70%	埋土中	No.2
4	坏	口径 13.4 器高 5.0	緻密～2°₀の砂粒含む 焼成良好	淡褐色	内面漆仕上げ	口縁部は下端に段をもって内傾する	外面はナデ，口縁部ヨコナデ，内面はナデ	完形	埋土中	No.1
5	坏	口径 14.6	緻密 微細な砂粒含む 焼成良好	褐色		口縁部は下端に段をもって内傾する	外面はナデ，内面はミガキ	10%	カマド	
6	坏	口径 14.0	緻密 焼成良好	暗褐色	漆仕上げ，特に口縁部	口縁部は下端に段をもって内傾する	外面はケズリ後粗くミガキ，内面はナデ	10%	埋土中	No.75
7	甕	底径 6.1	1～3°₀の砂粒含 焼成良好	褐色			外面はハケメ後軽くナデ，内面はナデ	5%	埋土中	No.9
8	甕	底径 6.4	1～3°₀の砂粒やや多 焼成良好	暗褐色	外面煤付着		外面はヘラケズリ，内面はナデ 木葉底	10%	埋土中	No.4
9	甕	口径 20.4 底径 6.5 器高 30.8	1～3°₀の砂粒含 焼成良好	橙褐色	2次焼成 外面煤付着	長胴で口縁は外反，木葉底	外面はヘラケズリ後，上部ナデ，内面はナデ	90%	カマド	No.4
10	甕	口径 19.4 底径 6.0 器高 27.4	砂粒，小石含む 焼成良好	暗褐色～橙褐色	2次焼成 外面煤付着	長胴で口縁は下端に稜をもって外反	外面はヘラケズリ，内面はナデ	完形	カマド床面	No.1

第18表　13号住居跡土器観察表

2.　円形周溝遺構

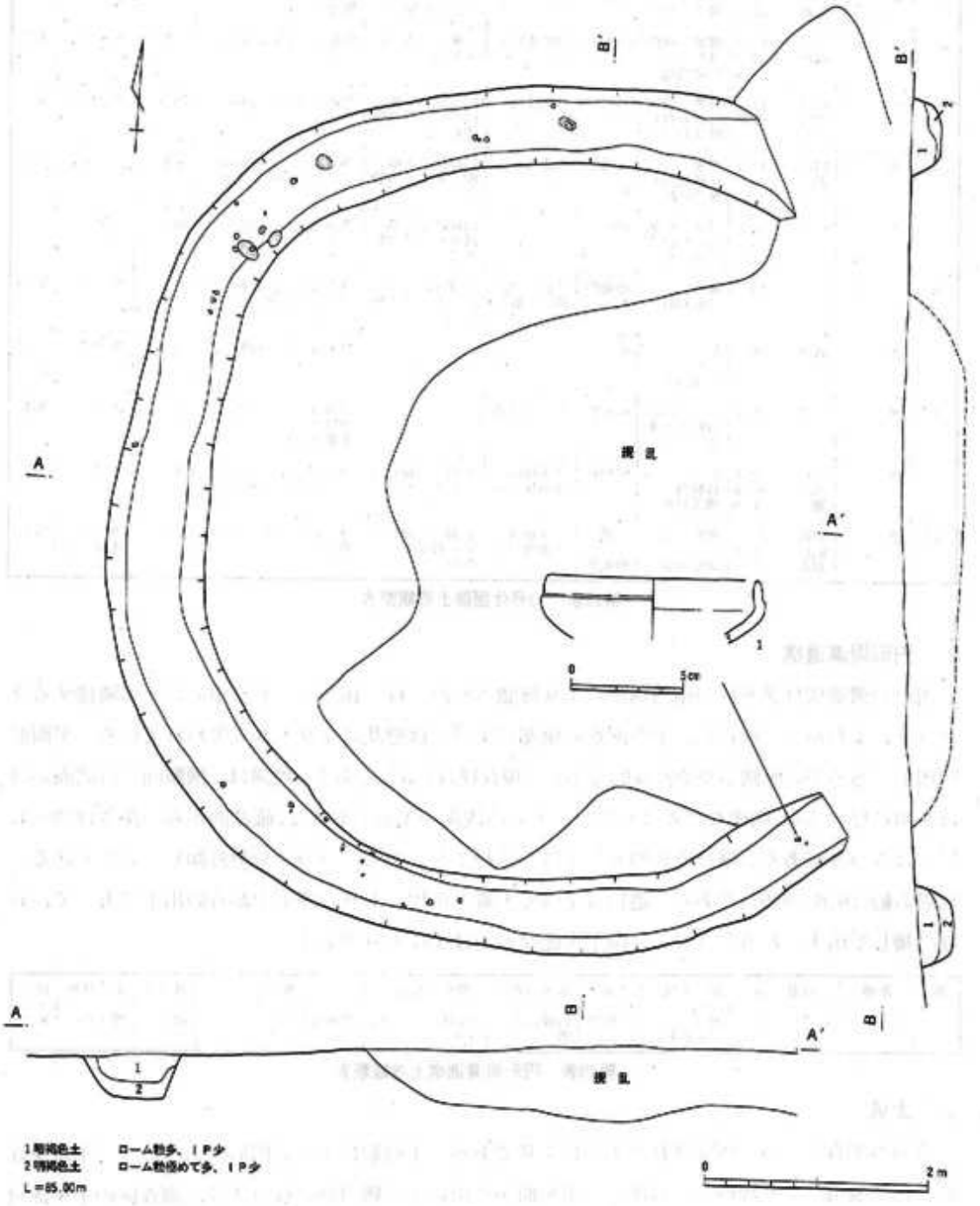
円形周溝遺構は調査区の南西隅から１基確認された。G—16グリッドを中心にその隣接するグリッドにまたがって所在し，中央部から東部にかけては攪乱により大きく失われている。平面形は円形であるが，西側がやや直線的である。現存径は7.5㍍である。周溝は，横断面では底面がほぼ平坦に見えるが，明確な段差はもたないものの浅深の差がおおきく，確認面からの深さは23～47㌢とばらつきがある。壁は直線的もしくはごくわずかに内湾しつつ，やや外傾して立ち上がる。周溝の幅は0.6～0.9㍍である。遺物はすべて土器の小片であり，埋土中からの出土であって，底面に接して出土したものはなく，図示可能なものは１片のみである。

No.	器種	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土状態	注記
1	坏	口径 9.4	緻密 焼成良好	淡褐色	口縁部漆付着	口縁は下端に段をもつ	内外面ともナデ	破片	埋土中	No.29

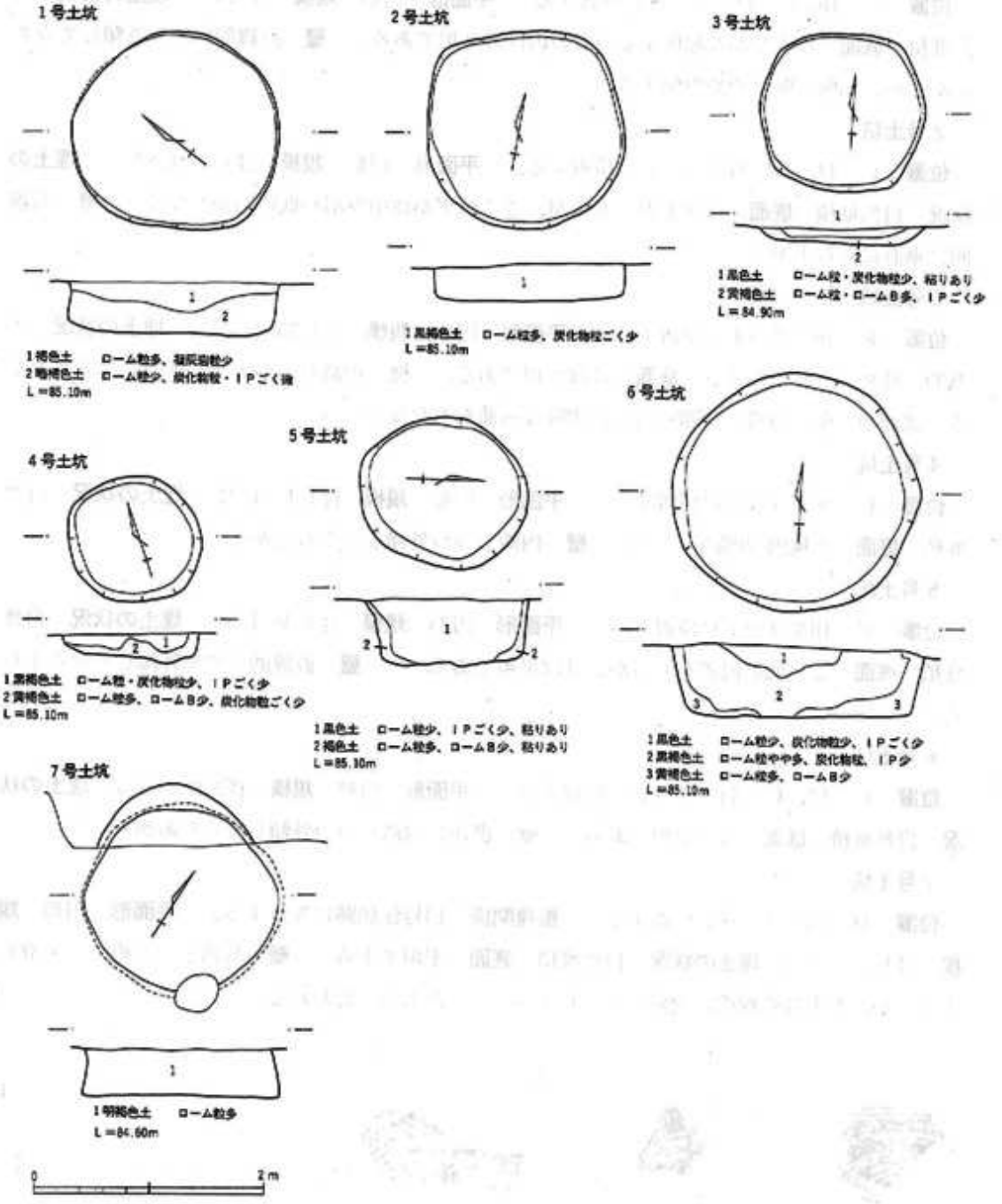
第19表　円形周溝遺構土器観察表

3.　土坑

今回の調査によって確認された土坑は７基である。平面形はすべて円形であり，３号土坑を除いて自然堆積により埋没し，台地上の平坦面から南に下る緩斜面に移行する，調査区の中央部付近に分布するなどの共通点をもつ。しかしながら出土遺物が皆無もしくは僅少のうえ図示不能な破片ばかりであるため時期を特定することが困難であり，住居跡との関係も７号土坑が13号住居跡に先行することを指摘できるのみである。


A
A'
B
B'
撹乱
1
2
0
5cm
0
2m
1号褐色土　ローム粒少、IP少
2号褐色土　ローム粒極めて少、IP少
L=85.00m

第50図　円形周溝遺構


1号土坑
1褐色土　ローム粒多、凝灰岩粒少
2暗褐色土　ローム粒少、炭化物粒・ＩＰごく微
L＝85.10m
2号土坑
1黒褐色土　ローム粒多、炭化物粒ごく少
L＝85.10m
3号土坑
1黒色土　ローム粒・炭化物粒少、粘りあり
2黄褐色土　ローム粒・ロームＢ多、ＩＰごく少
L＝84.90m
4号土坑
1黒褐色土　ローム粒・炭化物粒少、ＩＰごく少
2黄褐色土　ローム粒多、ロームＢ少、炭化物粒ごく少
L＝85.10m
5号土坑
1黒色土　ローム粒少、ＩＰごく少、粘りあり
2褐色土　ローム粒多、ロームＢ少、粘りあり
L＝85.10m
6号土坑
1黒色土　ローム粒少、炭化物粒少、ＩＰごく少
2黒褐色土　ローム粒やや多、炭化物粒、ＩＰ少
3黄褐色土　ローム粒多、ロームＢ少
L＝85.10m
7号土坑
1明褐色土　ローム粒多
L＝84.60m
0
2m

第51図　土坑

1号土坑

位置　C－10，C－11グリッドに位置する。　**平面形**　円形　**規模**　径1.8㍍　**埋土の状況**　自然堆積　**底面**　ゆるやかな起伏をもつもののほぼ平坦である。　**壁**　直線的にやや外傾して立ち上がるが，北側の壁はやや内傾する。

2号土坑

位置　C—11，D—11グリッドに位置する。　**平面形**　円形　**規模**　径1.7～1.8㍍　**埋土の状況**　自然堆積　**底面**　ほぼ平坦であるが，ごくわずかに中央部が低い凹面となる。　**壁**　直線的に垂直に立ち上がる。

3号土坑

位置　E－10グリッドに位置する。　**平面形**　円形　**規模**　径1.35～1.45㍍　**埋土の状況**　人為的に埋め戻されている。　**底面**　ほぼ平坦である。　**壁**　内湾しつつ大きく外傾して立ち上がる。底面から壁への移行は連続的で，明瞭な屈曲をもたない。

4号土坑

位置　C－9グリッドに位置する。　**平面形**　円形　**規模**　径1.1～1.2㍍　**埋土の状況**　自然堆積　**底面**　不規則な凹凸をもつ。　**壁**　内湾しつつ外傾して立ち上がる。

5号土坑

位置　C－10グリッドに位置する。　**平面形**　円形　**規模**　径1.3～1.5㍍　**埋土の状況**　自然堆積　**底面**　ごく低い段差をもつが，ほぼ平坦である。　**壁**　直線的にやや外傾して立ち上がる。

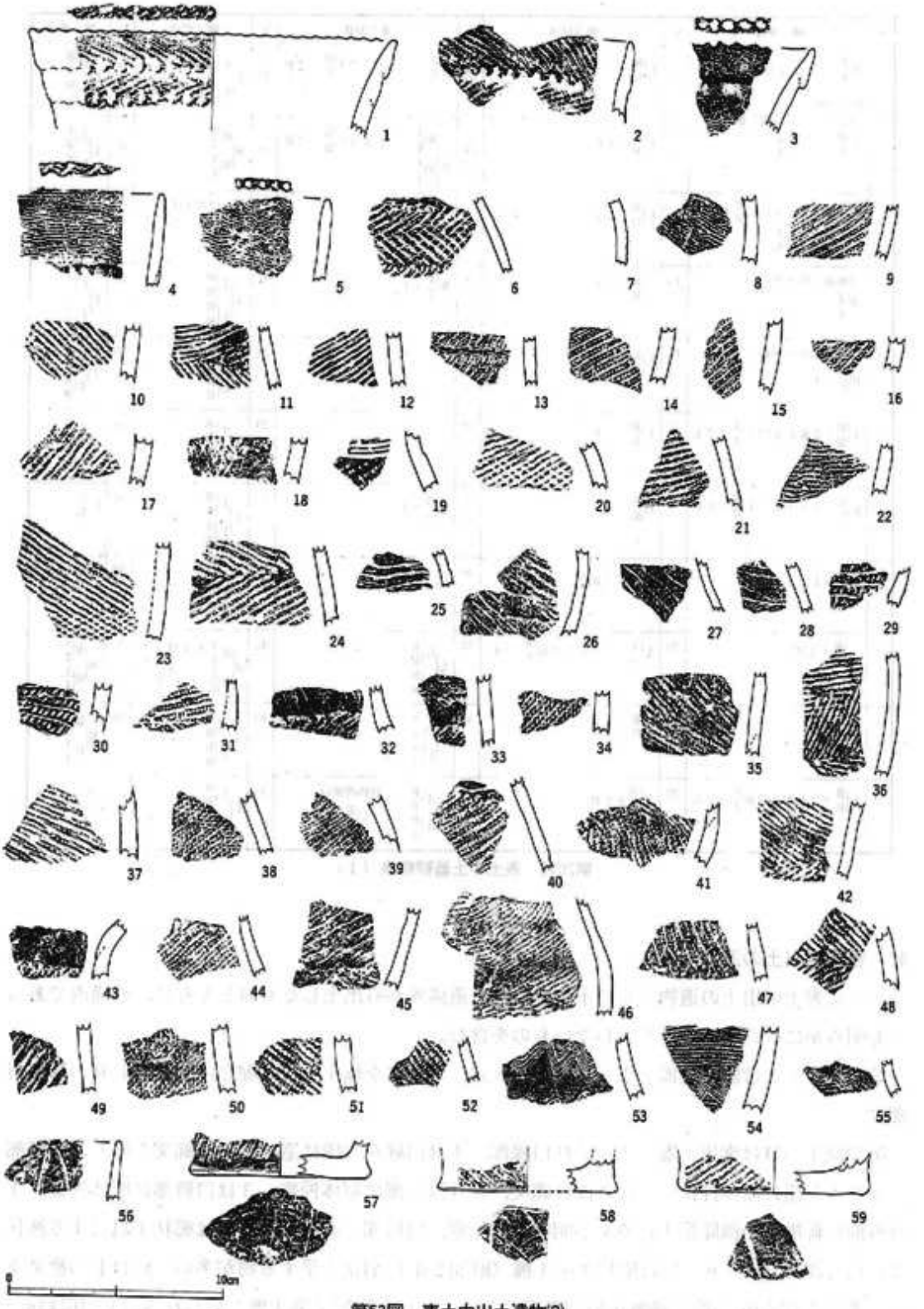
6号土坑

位置　C－13，C－14グリッドに位置する。　**平面形**　円形　**規模**　径2.0～2.1㍍　**埋土の状況**　自然堆積　**底面**　ほぼ平坦である。　**壁**　僅かに内湾しつつ外傾して立ちあがる。

7号土坑

位置　D—14グリッドに位置する。　**重複関係**　13号住居跡に先行する。　**平面形**　円形　**規模**　径1.7～1.8㍍　**埋土の状況**　自然堆積　**底面**　平坦である。　**壁**　外湾しつつ直立して立ち上がるが，本来は直線的に内傾して立ち上がっていたものと思われる。

第52図　表土中出土遺物(1)



第53図　表土中出土遺物(2)

No.	縄文原体	No.	縄文原体	No.	縄文原体	No.	縄文原体	No.	縄文原体
1	R{L/L}+2 L および L{R/R} 原体押捺は 口唇部　折り返し部 L{R/R}　R{L/L}	12	L{R/R}+2 R	23	R{ℓ/L}+2 L および L{R/R}+2 R か？	34	L{L{R/R}/L{R/R}}	45	L{L{R/R}/L{R/R}}
		13	L{R/R}+2 R	24	R{R{L/L}/R{L/L}/R{L/L}} および L{R/R}+2 R	35	R{R{L/L}/R{L/L}}	46	L{L{R/R}/L{R/R}}
2	R{L/L}+2 L および L{R/R}+2 R 原体押捺は R{L/L}	14	L{R/R}+2 R			36	R{R{ℓ/ℓ}/R{ℓ/ℓ}} および L{L{r/r}/L{r/r}}	47	R{R{L/L}/R{L/L}}
				25	L{?/?}+L				
3	口唇部の原体押捺は R{ℓ/ℓ}	15	L{R/R}+2 R	26	R{ℓ/ℓ}+L	37	L{L{R/R}/L{R/R}}	48	L{L{r/r}/L{r/r}}
4	口唇部の原体押捺は R{L/L}+R	16	L{R/R}+2 R	27	?　+L	38	L{L{R/R}/L{R/R}}	49	L{L{R/R}/L{R/R}}
6	L{R/R}+2 R および R{L/L}+2 L	17	L{R/R}+2 R	28	?　+L	39	L{L{R/R}/L{R/R}}	50	L{L{R/R}/L{R/R}}
7	R{L/L}+2 L および L{R/R}+2 R	18	L{R/R}+2 R	29	L{R/R}+L	40	L{L{R/R}/L{R/R}}	51	R{ℓ/L}
8	R{ℓ/ℓ}+L{r/r}	19	R{ℓ/ℓ}+2 R{ℓ/ℓ}	30	L{r/r}−L{r/r}	41	R{R{L/L}/R{L/L}}	52	R{L/L}
9	L{R/R}+2 R	20	L{r/r}+2 r および R{ℓ/ℓ}+2 ℓ	31	L{L{R/R}/L{R/R}}	42	R{R{L/L}/R{L/L}} および L{L{r/r}/L{r/r}}	57	R{R{L/L}/R{L/L}}
10	R{L/L}+2 L	21	L{R/R}+2 R	32	L{L{r/r}/L{r/r}}	43	L{L{R/R}/L{R/R}}	58	R{R{L/L}/R{L/L}}
11	L{R/R}+2 R および R{L/L}+2 L	22	L{R/R}+2 R	33	L{L{R/R}/L{R/R}}　原体押捺は L{R/R}	44	L{L{R/R}/L{R/R}}	59	L{R/R}+2 R

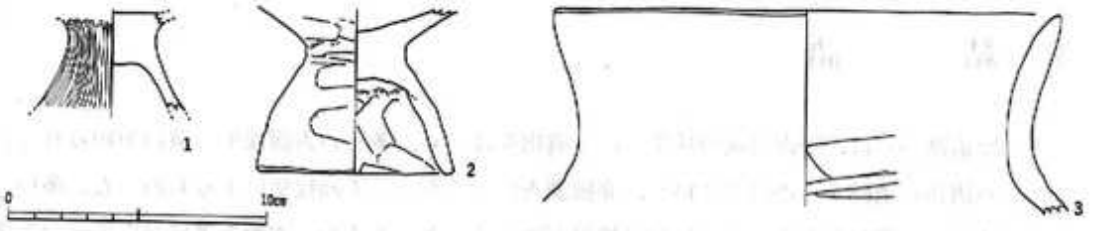
第20表　表土中土器観察表（1）

4.　表土中出土の遺物

ここに表土中出土の遺物として示すものは，遺構外から出土したものとともに，遺構内であっても明らかにその遺構にともなわないものを含む。

第52図1～3は縄文土器。1～2は諸磯a式，竹管文を施す。3は堀之内II式，LRの単節斜縄文。

第53図1～51は弥生土器。1～5は口縁部。1は口縁を二段に造り出し，縄文を施し，口唇部と折り返し部に原体押捺。2は外面は縄文，折り返し部に原体押捺。3は口唇部に原体押捺。4は外面に櫛描文と微隆帯上にやや不明確な押圧痕，口唇部に原体押捺。5は櫛状工具による波状文，口唇部に刻み。6～23は附加条第1種（附加2条）。羽状を呈する物が多い。8はLの撚糸文とも考えられるが，条間に繊維圧痕が観察できることから附加条第1種と思われる。14～16は同一



第54図　表土中出土遺物(3)

No.	器種	法量 (cm)	胎土・焼成	色調	器面の状態	器形の特徴	整形	残存率	出土場所
1	高坏		緻密 焼成良好	淡褐色			外面はミガキ、内面は坏部ミガキ、脚部ナデ	5%	表土中
2	台付甕	底径 7.6	緻密、微細な砂粒含む 焼成良好	橙褐色		脚は内湾	外面はナデ、一部ミガキ、内面はナデ、脚部はハケメ後ナデ	10%	表土中
3	甕	口径 19.7	砂粒、小石含む 焼成良好	淡褐色	口縁部外面漆仕上げ		外面はヨコナデ、内面はナデ	破片	表土中

第21表　表土中土器観察表(2)

No.	出土位置	No.	出土位置	No.	出土位置
1	8号住居跡	2	8号住居跡	3	円形周溝

第22表　第52図土器出土位置

No.	出土位置	No.	出土位置	No.	出土位置	No.	出土位置	No.	出土位置	No.	出土位置	No.	出土位置
1	12号住居跡	2	12号住居跡	3	12号住居跡	4	6号住居跡	5	13号住居跡	6	4号住居跡	7	4号住居跡
8	8号住居跡	9	11号住居跡	10	11号住居跡	11	12号住居跡	12	12号住居跡	13	12号住居跡	14	13号住居跡
15	13号住居跡	16	13号住居跡	17	13号住居跡	18	13号住居跡	19	13号住居跡	20	5号土坑	21	円形周溝
22	円形周溝	23	表土中	24	12号住居跡	25	8号住居跡	26	9号住居跡	27	11号住居跡	28	11号住居跡
29	12号住居跡	30	5号土坑	31	6号住居跡	32	8号住居跡	33	8号住居跡	34	8号住居跡	35	8号住居跡
36	12号住居跡	37	12号住居跡	38	13号住居跡	39	13号住居跡	40	13号住居跡	41	13号住居跡	42	13号住居跡
43	13号住居跡	44	円形周溝	45	円形周溝	46	円形周溝	47	表土中	48	表土中	49	表土中
50	表土中	51	円形周溝	52	表土中	53	表土中	54	表土中	55	表土中	56	13号住居跡
57	8号住居跡	58	12号住居跡	59	円形周溝								

第23表　第53図土器出土位置

個体か。19はR＋Rと考えられるが，軸縄の圧痕が認められないので，あるいは草本類の茎にS巻(R巻)にしたものか。24は直前段多条の撚り戻しと附加条第1種の両者による羽状縄文。25～30は附加条第2種。27と28は軸縄不明。31～50は反撚による縄文。33には原体圧痕が見られる。40には沈線が見られる。51～52は2段の単節斜縄文。53～55は櫛状工具による波状文および横線文。56は沈線による波状文。57～59は底部資料。いずれも縄文を施し，木葉痕が認められる。縄文については観察表を第20表に示す。

第54図の1～3は土師器。観察表を第21表に示す。

各資料の出土場所は，第22～23表に示すとおりである。

V 結　　語

天狗原遺跡からは，野沢岩蔵の採集による遺物をはじめ，多くの表面採集の遺物が知られている。また周辺の遺跡からの出土資料も，発掘調査によるもの，表面採集によるものともに多い。本来はそれらの資料をも含めて多角的に検討を加えるべきであるが，本報告書においては今次調査についての事実記載のみにとどまったことにつき寛恕を乞う次第である。以下にその概要を記して結語とする。

当調査においては，縄文時代の遺構は確認できなかった。遺物は8号住居跡，円形周溝遺構埋土中から土器片が，10号住居跡埋土中から打製石斧が出土している。土器については，前期諸磯a式に属すると思われるものと，後期堀之内II式に属すると思われるものである。しかし量的に僅かであり，当該遺構に伴うものではない。打製石斧については，その形状と出土遺構がやや疑問を生じさせるものであるが，縄文時代の打製石斧が欠損したものと考えたい。

弥生時代の遺物は後期後半の遺物が表土中および各遺構の埋土中と床面から出土しているが，10号住居跡を除いては埋没時の流入と考えられる。また，数量的にも少量であるため数値的な分析には無理があり，器形の復元が困難な小片が多いため組成も不明である。以上のような限界を踏まえたうえで，敢えて破片を文様（主として縄文）により分類し，百分率で表したものが第24表である。この表によれば附加条第1種，同第2種についてはほぼ同様の比率を示すが，10号住居跡以外では40%におよぶ直前段反撚が10号住居跡では比較的少なく，逆に10号住居跡では十数%認められる合撚が10号住居跡以外には全くないという傾向が看取できる。それ以外のものは点数が少なく，傾向を掴むことができない。なお，附加条第1種の比率が予想より低く，その反面直前段反撚の比率が予想より高かった。10号住居跡における合撚の比率とともに解釈に苦しむところであるが，資料の数量が少ないうえ，同一個体の同定に問題がある恐れもあるので，現象の提示のみにとどめたい。

従来から二軒屋式土器の縄文は基本的には附加条第1種であることが指摘されており，主として附加条第2種が施文される十王台式と伴出する例が知られている。十王台式との伴出の有無は

	附加条1種	附加条2種	単節斜縄文	直前段反撚	合　撚	そ の 他	合　計
10号住居跡下層	14 (32%)	3 (7%)	1 (2%)	11 (25%)	7 (16%)	8 (18%)	44 (100%)
10号住居跡上層	13 (34%)	6 (15%)	4 (11%)	9 (24%)	4 (11%)	2 (5%)	38 (100%)
表 土 中 等	17 (33%)	6 (12%)	2 (4%)	22 (43%)	0 (0%)	4 (8%)	51 (100%)
合　計	44 (33%)	15 (11%)	7 (5%)	42 (32%)	11 (8%)	14 (11%)	133 (100%)

※数字は破片数（単位一個），括弧内は百分率

第24表　弥生土器破片文様別集計表

時間差として捉え，二軒屋式のみの段階から十王台式を伴う段階へ移行すると考えられている[1]が，今次調査地区の土器には口縁部・胴部ともに十王台式の様相を示す破片が含まれており，その比率は10%程度になるものと思われる。したがって，二軒屋式のなかでも新しい段階であり，塙氏の細分における「二軒屋II式」に相当するものであろう[2]。ただし，伴出した十王台式と思われる土器片は十王台式としては退化した様相を呈しており，10号住居跡から土師器の出土を見たことを勘案すると二軒屋式でも終末に近いものと考えられる。

また10号住居跡においては，埋土下層から弥生土器片が，埋土上層からは弥生土器片と土師器片が出土しており，上層中の弥生土器と土師器については層位的な分別が困難である。このことは，単純には弥生時代の住居が廃絶後，古墳時代前期には完全に埋没しておらず，その埋没の過程で弥生土器片の流れ込みと土師器片の投棄もしくは流れ込みが同時進行した時期があったものと考えられる。しかし，上層と下層の弥生土器には，接合不能ながら同一個体の疑いを抱かせる破片が見られることから，両層間の差異を埋没の進行による単純な上下関係としては把握しきれない面もあり，今後に疑問を残した。同一住居内から弥生土器と土師器が伴出する例が近年増加しているが，本住居跡の出土遺物についても二軒屋式土器の下限の問題も含めて検討されるべきであろう。また，本住居跡上層出土の№46・47は在地のものではなく，西関東および南関東に出自が求められるものと思われる。10号住居跡は遺構的には当地の弥生時代の住居としての特徴をおおむね備えていると考えられる一方，出土遺物については同時性の可否，多系統の幅輳など疑問が多く，4号住居跡との時間差も検討を要するものと思われる。

古墳時代前期に属すると思われる遺構としては4号・5号・12号の3軒の住居跡を挙げることができる。このうち5号住居跡は出土遺物僅少であるため不詳であるが，4号住居跡からは№25に示すS字状口縁の台付甕が出土しており，田口一郎氏のII－b類[3]，赤塚次郎氏のB－a類[4]にあたるものと考えられる。この段階は，濃尾平野低湿地に発生したS字甕が広範囲に拡散し定着する時期にあたるとされており，№25は若干長胴化の傾向が看取されるものの，当地におけるS字甕のなかでも比較的初期のものと考えられる。12号住居跡からの器形を窺える土器の出土は№1～4のみであるが，4号・12号住居跡ともに古墳時代の初期のあまり隔たらない時期の所産と思われる。

1号・2号・3号・7号・8号・9号・11号・13号の各住居跡はいずれも古墳時代後期の遺構と考えられる。そのうち，9号住居跡出土土器にやや先行する様相が認められるものの，住居相互の切り合い関係がないこと，土器の形態にも顕著な差異が認められないことから，全体としては各住居とも比較的近接した時期に営まれた可能性が高いものと思われる。具体的には7世紀前半のごく限られた期間に集落が存在したものであろう。

奈良時代以後の遺構は今次調査地区内で確認することはできなかった。

このように，天狗原遺跡の今次調査地区に関しては，弥生時代後期末から古墳時代前期にかけ

てと，古墳時代後期に限って遺構の存在が確認された。ただし，該期においても継続的に集落が営まれたというよりは，弥生時代から古墳時代へ移行するごく一時期と，7世紀前半代のやはり一時期のみに遺構が見られるという特徴がある。もとより今回の調査は天狗原遺跡のごく一部を調査したに過ぎず，周辺がすべて宅地化されてしまった現在，遺跡の全容を知ることは事実上不可能となっている。

註(1)藤田典夫，1985，「弥生時代の遺物について」（『車堂』益子町史編纂委員会）

註(2)塙　静夫・田代　寛，1972，「真岡市柳久保遺跡発掘調査概報」（『栃木県史研究』第3号　栃木県史編纂委員会）

註(3)田口一郎，1981，「S字状口縁台付甕の分類と編年」（高崎市文化財調査報告書第22集『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会）

註(4)赤塚次郎，1986，「S字甕」（『欠山式土器とその前後』　第3回東海埋蔵文化財研究会）

写 真 図 版

① 全景（北から）

② 1号住全景（南東から）

③ 1号住遺物出土状態（南東から）

④ 1号住カマド（南から）

⑤ 2号住全景（南から）

① 2号住カマド（南から）

② 3号住全景（南東から）

③ 3号住カマド（南東から）

④ 4号住全景（南東から）

⑤ 4号住遺物出土状態（北から）

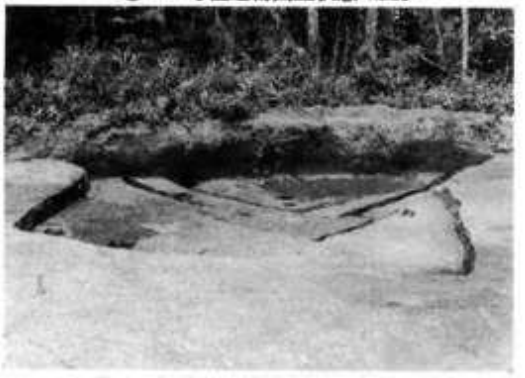
⑥ 4号住遺物出土状態 No. 1

⑦ 4号住遺物出土状態 No. 5

⑧ 4号住遺物出土状態 No.24

① 4号住遺物出土状態 No.25

② 4号住炉（南から）



③ 5号住・14号住全景（南東から）

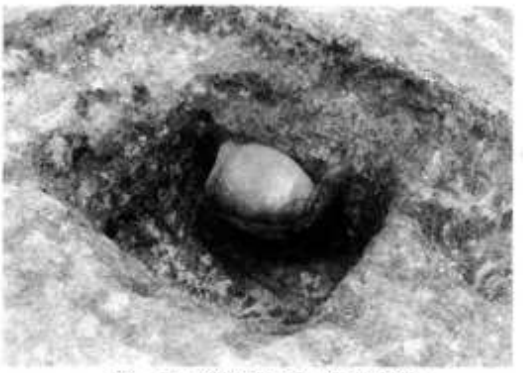
④ 14号住全景（南から）

⑤ 5号住・14号住遺物出土状態（北から）

⑥ 6号住全景（南から）

⑦ 7号住全景（南から）

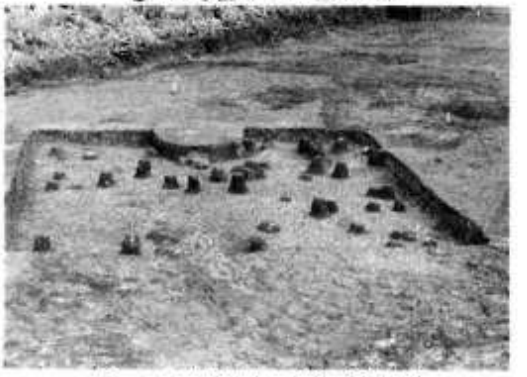
⑧ 7号住遺物出土状態（東から）



① 7号住内貯蔵穴（南東から）

② 7号住カマド（南から）

③ 8号住全景（南から）



④ 8号住遺物出土状態（南から）

⑤ 8号住カマド（南から）

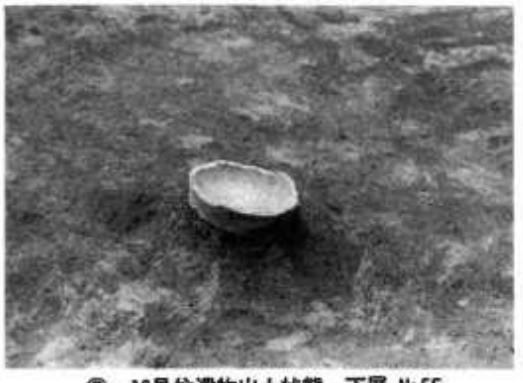
⑥ 9号住全景（南から）

⑦ 9号住遺物出土状態（南西から）

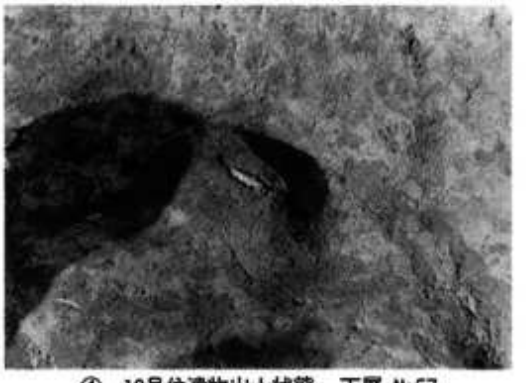
⑧ 9号住内貯蔵穴（南から）

① 10号住全景（南から）

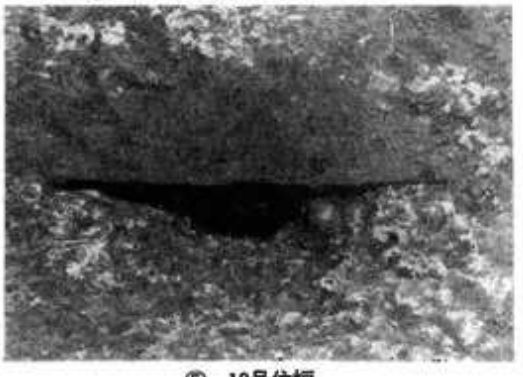
② 10号住遺物出土状態（南から）



③ 10号住遺物出土状態　下層 No.55



④ 10号住遺物出土状態　下層 No.57



⑤ 10号住炉

⑥ 11号住全景（南から）

⑦ 11号住カマド（南から）

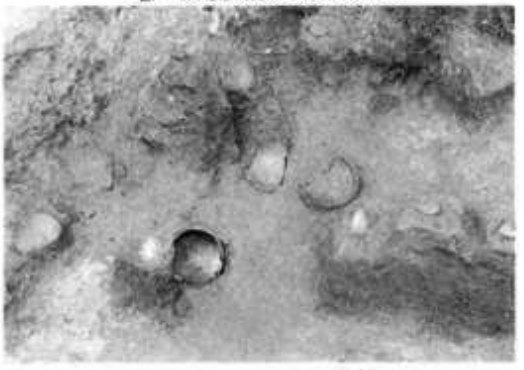
⑧ 12号住全景（西から）

① 12号住遺物出土状態（南から）

② 12号・13号住全景（西から）

③ 13号住全景（南東から）

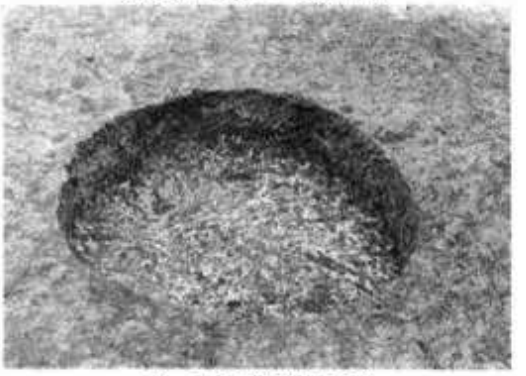
④ 13号住遺物出土状態（南から）



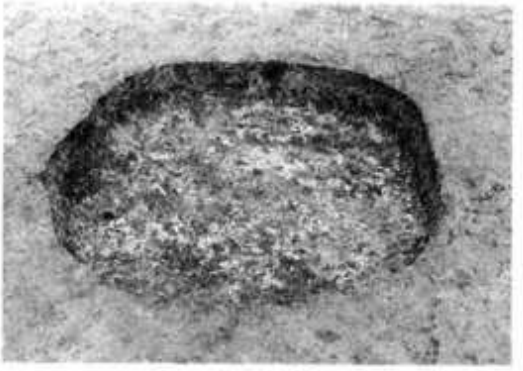
⑤ 13号住遺物出土状態

⑥ 13号住カマド（南から）

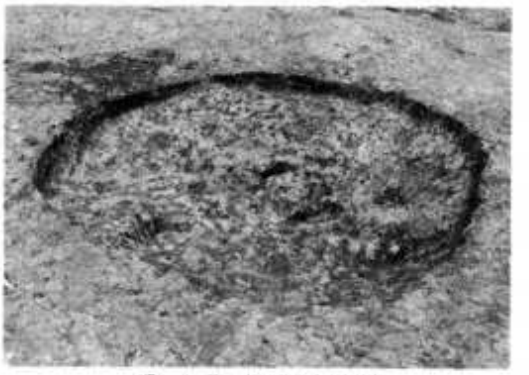
⑦ 円形周溝遺構



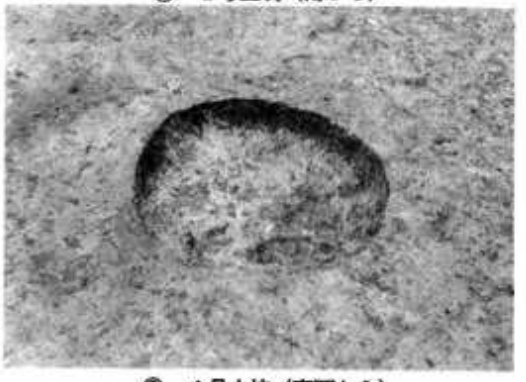
⑧ 1号土坑（北から）



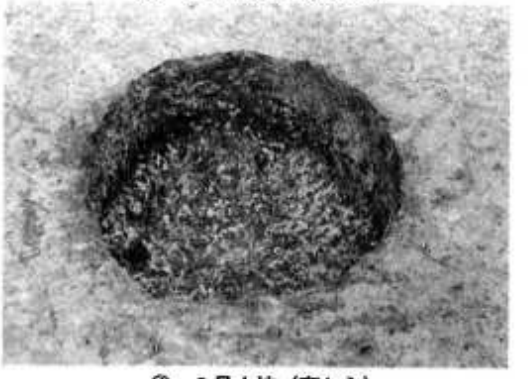
① 2号土坑（南から）



② 3号土坑（南東から）



③ 4号土坑（南西から）



④ 5号土坑（南から）

⑤ 6号土坑（北東から）

⑥ 7号土坑（南から）

⑦ 作業風景

⑧ 現地説明会

① SI 02—1

② SI 02—3

③ SI 02—4

④ SI 04—1

⑤ SI 04—5

⑥ SI 04—7

⑦ SI 04—8

⑧ SI 04—9

⑨ SI 04—12

⑩ SI 04—13

⑪ SI 04—14

⑫ SI 04—15

⑬ SI 04—18

⑭ SI 04—19

⑮ SI 04—20

① SI 04—24

② SI 04—25

③ SI 05—1

④ SI 05—2

⑤ SI 07—1

⑥ SI 07—2

⑦ SI 07—3

⑧ SI 07—4

⑨ SI 07—5

⑩ SI 07—6

⑪ SI 07—7

⑫ SI 07—8

⑬ SI 07—9

⑭ SI 07—10

⑮ SI 07—11

⑯ SI 07—12

① SI 07—13

② SI 07—15

③ SI 07—16

④ SI 07—17

⑤ SI 07—20

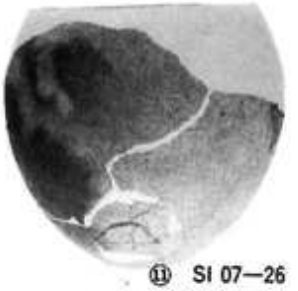
⑥ SI 07—21

⑦ SI 07—22

⑧ SI 07—23

⑨ SI 07—24

⑩ SI 07—25



⑪ SI 07—26

⑫ SI 07—27

① SI 07—28

② SI 07—29

③ SI 07—30

④ SI 08—3

⑤ SI 08—4

⑥ SI 09—4

⑦ SI 09—5

⑧ SI 10—下—55

⑨ SI 10—上—46

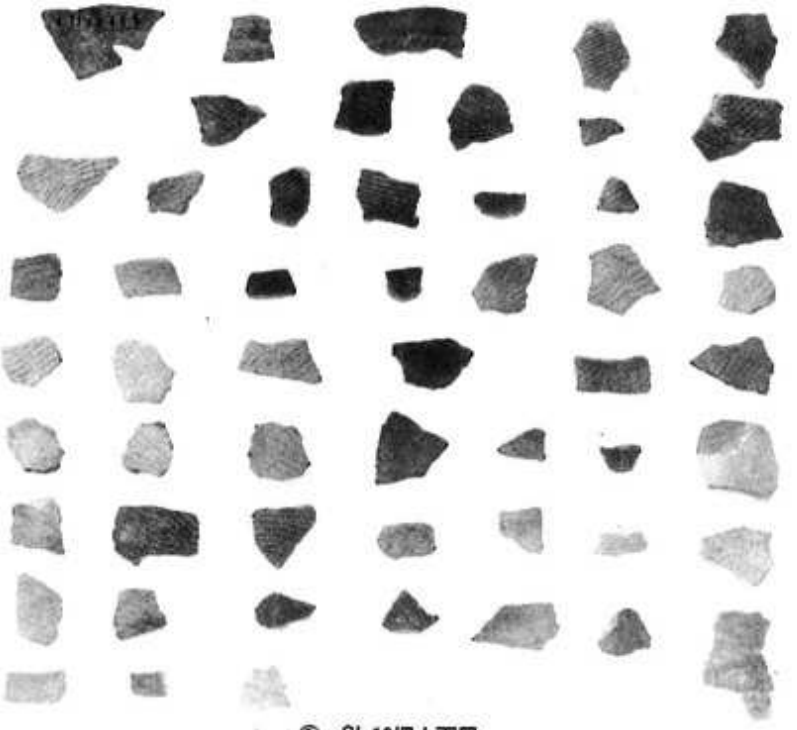
⑩ SI 10—上—47

⑪ SI 10—上—49

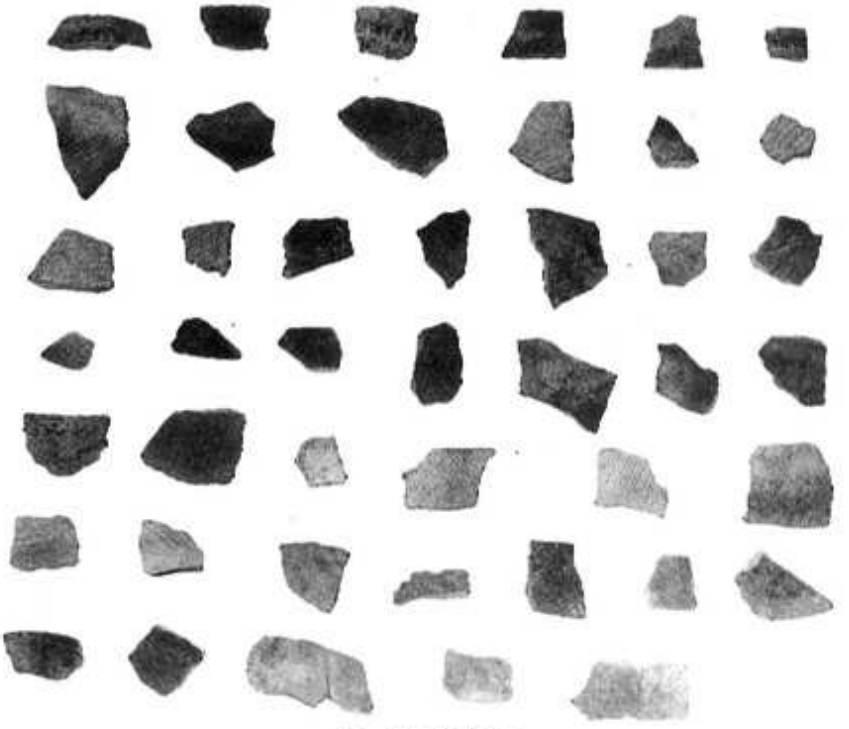
⑫ SI 10—上—51

⑬ SI 10—上—52

⑭ SI 10—上—53



① SI 10埋土下層



② SI 10埋土上層

① SI 11—1

② SI 11—2

③ SI 11—3

④ SI 11—4

⑤ SI 11—6

⑥ SI 11—7

⑦ SI 11—8

⑧ SI 12—1

⑨ SI 12—2

⑩ SI 13—1

⑪ SI 13—2

⑫ SI 13—3

⑬ SI 13—4

⑭ SI 13—8

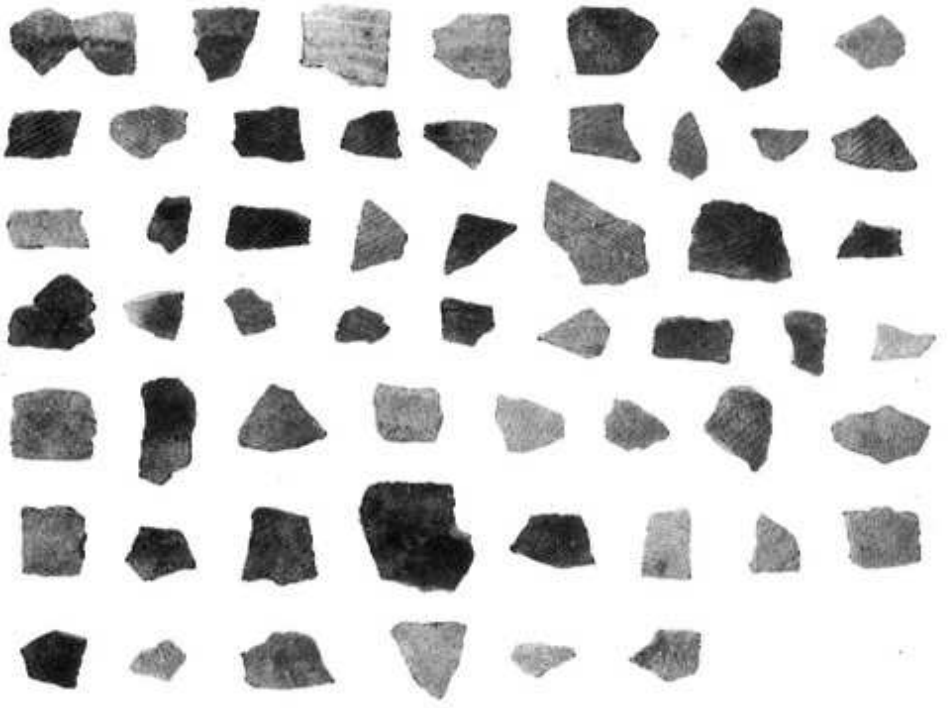
⑮ SI 13—9

⑯ SI 13—10

⑰ 表土中(2)—1

⑱ 表土中(3)—1

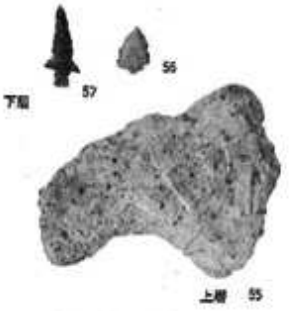
⑲ 表土中(3)—2



① 表土中 (2)

② 表土中（1）

③ SI 04出土鉄器



④ SI 10出土石器

SI 02—6　SI 11—9　SI 11—10　SI 14—3

⑤ 土製品

SI 07—31　SI 08—1～5　SI 11—12,13

⑥ 玉類

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第34集

天狗原遺跡

平成６年３月発行

発行　宇都宮市教育委員会文化課

（宇都宮市旭１－１－５）

ＴＥＬ　（0286）32-2765

印刷　朝陽堂印刷興業株式会社

（宇都宮市不動前１－３－35）

ＴＥＬ　（0286）34-3421